

二本松市史

各論編 1 民 俗

8

編集・発行 二本松市

目次

口 絵
凡 例
はじめに

第一章 衣・食・住

第一節 衣

- 一 仕事着……………五
- 二 雨具・防寒具……………三
- 三 織・染……………六
- 四 手ぬぐいのかぶり方……………三
- 五 儀礼・禁忌・歌など……………六

第二節 食

- 一 平常の主食……………四
- 二 あくぬきをする食物の種類と作り方……………三

三 保存食……………五

四 晴の日の食品・特殊な食品……………五

五 飲食用具……………七

六 白・杵……………八

七 格式商家の婚礼献立帳……………六

第三節 住……………七

- 一 母屋・間取り・屋敷……………六
- 母屋 98 屋敷神 99 間取り 99 民家 101 屋根型 102
- 屋敷神 102 台所の名称 102 居間の名称 103

目次

寢室の名称 130

二 いろいろ・かまど・灯火具…………… 133

いろいろの名称 133 いろいろの座名 133 火棚の名称 134

いろいろの用具 135 かまど 135

三 飲料水・井戸神・屋敷林…………… 133

飲料水 144 グシに火伏せの呪い 144

火伏せの行事 144

四 出入口の使いわけ…………… 144

五 建築工程とその儀礼…………… 145

六 二本松市の古民家…………… 145

第二章 生産・生業…………… 101

第一節 稲 作…………… 103

一 湿 田…………… 104

二 稲の干し方…………… 107

三 田植の組…………… 110

四 作業分担と性別…………… 113

第二節 稲作儀礼…………… 114

第三節 畑作儀礼…………… 115

第四節 田畑の農具…………… 115

第五節 禁忌・俗信…………… 116

第六節 養 蚕…………… 116

第七節 畜 産…………… 116

第八節 漁 撈…………… 116

第九節 山 樵…………… 116

第一〇節 狩 猟…………… 117

第一一節 手 工 業…………… 117

第一二節 諸 職…………… 117

一 陶 芸…………… 117

二 玩 具…………… 118

三 木工細工…………… 118

付 諸職関係民俗文化財調査票…………… 118

第三章 交通・運輸・通信…………… 101

第一節 運 搬…………… 101

人力運搬 302 牛馬運搬 302 渡し舟 303

第二節 運 搬 具…………… 101

頭上 303 肩担い 303 背負い 303 畜力 304 舟 304

第三節 通信方法…………… 105

車 304 そり 304

近距離 305 遠距離 305

第四章 交 易…………… 102

第一節 市…………… 107

第二節 行 商…………… 108

第三節 物々交換…………… 108

第四節 道具・牛馬の貸借…………… 108

第五章 社会生活…………… 101

第一節 年齢集団…………… 111

子供組 311 若者組 311 娘組 311 中年組 311

第二節 信仰的講集団…………… 111

山の神講 312 こじら講 312 天王講 312

奥参り講中 313 古峯原講 313 十三夜講 313

十九夜講 313 二十三夜講 314 念仏講 314

第三節 経済的講集団及び組合…………… 115

無尽講 315 寄合 315 共有茅場 315 普請講 315

水利組合 315 山林共有地 315

第四節 相互扶助…………… 116

ユイ 316 テツダイ 317

第五節 家族関係……………三六

相統318 隠居318 分家319 親族319 擬制的親子319

第六章 信 仰……………三三

| | |
|---------------------|----------------------|
| 第一節 山の神……………三三 | 第六節 神仏信仰……………三六 |
| 第二節 家についている神……………三五 | 第七節 参拝・巡礼……………三七 |
| 第三節 聖地・森……………三六 | 第八節 憑霊現象・靈異現象……………三七 |
| 第四節 便所神……………三元 | 第九節 講……………三三 |
| 第五節 路傍の神仏……………三〇 | |

第七章 民俗知識……………三七

| | |
|-----------------|---------------------|
| 第一節 民間療法……………三六 | 第四節 自然 曆……………三〇 |
| 第二節 うらない……………三〇 | 第五節 気 象……………三一 |
| 第三節 まじない……………三〇 | 第六節 質量の慣習的基準……………三二 |

第八章 民俗芸能……………三七

| | |
|-----------------|-----------------------|
| 第一節 はじめに……………三七 | 一 鈴石神社の太々神楽……………三三 |
| 第二節 神 楽……………三九 | 名称と所在地41 行なわれる時期と場所41 |
| | 管理と組織41 演者の衣装と用具など42 |

| | |
|-----------------------|-------------------------|
| 二 原瀬諏訪神社の太々神楽……………三六 | 七 原瀬の長獅子……………三六 |
| 名称と所在地43 行なわれる時期と場所43 | 名称と所在地46 行なわれる時期と場所46 |
| 管理と組織43 採物・用具・楽器など43 | 管理と組織46 演者と衣装46 |
| 芸能の構成と内容43 由来と沿革42 | 採物・用具・楽器など46 芸能の構成と内容46 |
| | 歌詞47 由来と沿革47 |

| | |
|-----------------------|-------------------------|
| 三 大平三島神社の太々神楽……………三三 | 第三節 田 楽……………三七 |
| 名称と所在地43 行なわれる時期と場所43 | 一 石井の田植踊り……………三七 |
| 管理と組織43 採物・用具・楽器など43 | 名称と所在地47 行なわれる時期と場所47 |
| 芸能の構成と内容44 由来と沿革44 | 管理と組織47 演者と衣装47 |
| | 採物・用具・楽器など47 芸能の構成と内容47 |
| | 基本の所作47 踊りの詳細47 歌詞48 |
| | 由来と沿革49 |

| | |
|-----------------------|-------------------------|
| 四 高田八幡神社の太々神楽……………三九 | 第四節 風 流……………三九 |
| 名称と所在地49 行なわれる時期と場所49 | 一 石井の七福神……………三九 |
| 管理と組織49 演者と衣装、採物など49 | 名称と所在地49 行なわれる時期と場所49 |
| 楽器と囃子49 芸能の構成と内容49 | 管理と組織49 演者と衣装49 |
| 由来と沿革49 | 芸能の構成と内容50 歌詞50 由来と沿革50 |

| | |
|-----------------------|-------------------------|
| 五 西荒井八坂神社の太々神楽……………三九 | 二 二本松の祭囃子(提燈祭り)……………三九 |
| 名称と所在地49 行なわれる時期と場所49 | 名称と所在地50 行なわれる時期と場所50 |
| 管理と組織49 採物・楽器など49 | 管理と組織50 演者と衣装50 |
| 芸能の構成と内容49 由来と沿革49 | 芸能の構成と内容50 歌詞50 由来と沿革50 |

| | |
|-----------------------|--|
| 六 塩沢神社の十二神楽……………四〇 | |
| 名称と所在地46 行なわれる時期と場所46 | |
| 管理と組織46 芸能の構成と内容46 | |

第九章 人生儀礼

五九

第一節 産 育

五三

一 妊娠と出産

五三

妊娠と帯祝い 522 産屋と産の忌み 522 産の神 522
出産 522 避妊や産胎の呪いなど 523

二 生児儀礼

五三

産後の儀式 523 食い初め 523 初節供 524 初誕生 525

三 育 児

五三

子守り 526 育児の呪法 526

第二節 成 人 式

五三

一 七五三と成人式

五三

七五三の儀礼 526 氏子入り 527 成人式・成女式 527

第三節 婚 姻

五三

名称 527 仲人 528 見合いなど 528 婚約 528 結納 528
嫁入り 528 中宿 529 婚家に入る作法 529

婚礼の儀式 529 披露 530 里帰り 530 通婚圏 530
内縁関係 530 破談・離婚・再婚など 532

第四節 厄年・年祝い

五三

厄年 532 年祝い 532

第五節 葬 制

五三

一 死 喪

五三

予兆 522 魂呼び 522 死の確認 522 枕飯 533
告げ人 533 喪の忌み 533 通夜 533
納棺の方法など 533 協力 533

二 葬 送

五三

名称 534 出棺の方法 534 野辺送り 534 葬法 534
後の儀礼 535

三 忌み明けと年忌

五三

忌み明け 535 年忌 535

第一〇章 年中行事

五七

一 月

五八

若水汲み 538 元朝参り 538 雑煮 538 買い初め 539

書き初め 539 初夢 539 年始廻り 540 謡習い 540
三日とろろ 540 寺の年始 540 女御年始 541

棚さがし・棚さらえ 541 七草粥 541 歳越し 543

農の始め 543 山ごし 545 四隅祭り 545

なりもろす・木いじめ・成る木まじない・
木まじない 546 団子さし 546 十六団子 546

長虫除け 546 ツンボ引き 547

セツチン神祭り・セツチン神祭り 547

水神参り 547 病気呪い 547 病気の根掘り 547

無病息災の呪い 548 かさどり 548

左義長・サゲチョウ 550 鳥小屋・どんどん焼き 550

年直し 551 女の正月・女の神事 551 藪入り 551

念仏講 551 団子もぎ 552 二十日正月・歯固め餅 552

恵比須講 552 二十日灸 552

二 月

五九

膝直しの一日 552 節分 553 豆占 554

おくだり八日 554 針供養 554 初午 554

養蚕講・こじらこう 554 繭団子 554 天王講 555

山の神講 555 念仏百万遍 556

三 月

六〇

三月節供・雑祭り・おなごの節供 556

池払い・井戸払い・種井戸払い 557 十九夜講 557

地神講 558

四 月

六一

慈善会 559 花祭り・灌仏会 559

五 月

六二

五月節供・男の節供・端午の節供 559

水口まつり 560 わせ田植 560 早苗振り 560

六 月

六三

神送り・団子送り 562

七 月

六三

七日盆 562 盆箸とり 562 墓掃除 563

七夕・七夕まつり・星まつり 563 迎え盆 563

盆踊り 564 送り盆・仏流し 564

土用の丑の日・土用餅 565 神送り 565

八 月

六四

八朔ついたち 565 オソナエ 566

月見・十五夜・中秋の名月 566

九 月

六五

菊の節供・おつづ参り 567 天王講 568 伊勢講 568

作場道造り 568

十 月

六六

虫供養 569 こじら講 569 月見 569 山の神講 569

恵比須講 570 頭痛呪い 570

刈り上げ祝い・刈り上げ餅 570

庭あがり祝い・ニワガリ餅 570

十一月

六七

大節講 571

十二月

六八

かっぱれい朔日 571

おやつかい八日・おやつけ八日 572 針供養 573

おこもり 573 冬至かぼちゃ 573 納豆ねせ 573

煤払い 574 餅つき 574 大晦日・年取り 574

第一章 口頭伝承

第一節 伝説

- 一 伝説とは何か……………五七
- 二 伝説の分類……………五八
- 三 福島県の伝説収集と研究……………五九
- 四 伝説の数と伝説の見方……………六一
- 五 二本松市の伝説資料集……………六二
- 六 二本松市の伝説……………六三

(1) 二本松

- 牛石 582……………五二
- 塩沢……………五三

居蛇沼の龍 583 鴨壇 584 雨乞不動尊 584

赤目鱈主 585 木の根坂 586 元岳温泉と梵字石 586

足利の七本桜 587 機織御前 587 黄金長者 588

泣き石 589 乳地蔵 589 田中神社の由来 589

鷹森山 590 熊野宮の由来 590

(3) 永田

- 湯坂の由来 591 木の旗 591 縁切り松 591 硯石 591
- 原瀬……………五二
- 鬼面石 592 大三の鬼退治 592
- 杉田……………五三

七夜校 595 石塚 595 姫小松 595 虎丸長者 596

隠れ里 599 青麻三光宮常陸坊大権現略記 600

念仏太郎 601 甘酒地蔵 601 狐石 602

箕輪……………六二

苗松太郎 602……………六三

三かえりの松 603 石のますめど 603 鐘指石 603

オカバミ山 603 平石 603……………六三

西荒井……………六四

西荒井の地名のおこり 604……………六四

鈴石……………六四

弁天壇 604 鈴石 604 万海坊 605 子育て地蔵 606

池地蔵 607 弘法橋 608 大清水 608

八坂神社と坂上田村麻呂 609

八坂神社の神様ときゅうり 609 うわばみ山 610

産土様 611 観音堂 612 道祖神 613 穴地蔵 613

蛇王権現様 615 不動滝 616 経壇 616 泣面石 617

加賀壇 617……………六八

片葉よし 618 螺石 618 三度返り 618

安達ヶ原の鬼婆 618……………六八

(11) 大平

化け狸 666 丸森狐 667 白蛇のたたり 667 お春 667

大久保のでぶ 669 狐の嫁入り 670

狐に馬鹿にされた子供 670 木ノ崎の狐 670

方中内の怪 671 城山の狐 671……………六八

世間話一覧……………六九

二本松市文化財基礎調査書目録……………六九

二段なぞ 681 三段なぞ 683……………六九

自然現象名 691 動植物名 692 地名 692……………六九

呼びかけ語 693 あいさつ 693 唱え言・呪文 694

忌み言葉 694 地方語 694……………六九

田歌……………六九

田植唄 697……………六九

庭歌……………六九

餅搦き唄 699 麦搦き唄 700……………七〇

遊び歌……………七〇

盆踊り唄 700……………七〇

盆踊り唄 700……………七〇

伝説一覧……………六〇

第二節 昔話……………六三

- 一 昔話とは何か……………六三
- 二 昔話の分類……………六三
- 三 昔話の形式上の特徴……………六三
- 四 福島県の昔話報告書……………六四
- 五 昔話の地方別特色……………六六
- 六 昔話に関する地方別の呼称……………六七
- 七 二本松市の昔話資料……………六八
- 八 二本松市の昔話……………六九

昔話一覧……………六九

第三節 世間話……………六九

- 一 世間話とは何か……………六九
- 二 世間話の内容……………六九
- 三 福島県の世間話報告資料……………七〇
- 四 二本松市の世間話……………七〇

世間話一覧……………六九

第四節 二本松市の昔話・伝説・世間話付記……………六九

二本松市文化財基礎調査書目録……………六九

第五節 なぞ……………六九

二段なぞ 681 三段なぞ 683……………六九

第六節 ことわざ……………六九

第七節 命名……………六九

自然現象名 691 動植物名 692 地名 692……………六九

第八節 日常生活用語……………六九

呼びかけ語 693 あいさつ 693 唱え言・呪文 694

忌み言葉 694 地方語 694……………六九

第九節 民謡……………六九

田歌……………六九

田植唄 697……………六九

庭歌……………六九

餅搦き唄 699 麦搦き唄 700……………七〇

遊び歌……………七〇

盆踊り唄 700……………七〇

祝い歌……………七〇〇

長沼 700

座興歌……………七〇一

二遍返し 701 あきあじ 701 大津絵 702 おいとこ 705
伊勢音頭 705 伊予節 706 ションデノイ節 706

語り物……………七〇二

口説 707

第一〇節 わらへ歌……………七〇七

子守歌……………七〇八

眠らせ歌……………七〇九

ねんねんころりや 708 ねんねんころりよ 709
ねんねん猫の 708 ねんねこぼっちゃん 709
ねんねこぼこちゃん 709 ねんねこねんねこ 710
向いの山の木切りは 710 おらが前の柿の木さ 711
向い小山のはねうさぎ 711 おせんなじよで泣く 711
お月さまいくつ 712

遊ばせ歌……………七一一

一にいじめられて 712 一でいじめられ 712

遊び歌(一)……………七一一

手まり歌……………七一一

いっぱたもれ 713 一番始めは 714
一でインドの黒ん坊 715 どんどんしや 715
一かけ二かけ三かけて 716 いちれつたんぼん 716
山王のお猿さん 717 山王のおさとさんは 717
一つ火箸で 718 早く帰ってきてちょうだい 718

天竺おばさま 718 おらまもならぬない 719

一郎のかかは 719 おらがさしき 719

へんけいさまが 720 今日はおるぎ田 720

向い通るは誰が娘 720 おららのおどっつあは 721
正月とせ 721 一つとせ 722 一いつせ 723
田舎日光 723 いちじくになじん 723 一銭一銭 723

お手玉歌……………七二四

一かけ二かけて 724 おさらりおひとつ 724
おひとつおひとつ 725 赤坂のかんこぼ 725
お一つお一つ 725 一にたち花 726 一番始めは 726

羽子つき歌……………七二六

一人きな 726

風船つき歌……………七二七

ひふみよ 727

遊び歌(二)……………七二七

指遊び歌……………七二七

こうのげ様は 727 こは手首 727

鬼遊び歌……………七二七

かごめかごめ 727 坊さん坊さん 728
さらばさらばよし 728 地藏さま 728

子取り遊び歌……………七二八

花いちもんめ 728

縄とび歌……………七二九

お嬢さんおはいり 729 大なみ小なみ 729
隣りのおばさん 729 ひとりきなふたりきな 730

年中行事の歌……………七三〇

正月の歌……………七三〇

正月ちやよいもんだ 730 お正月つあいいもんだ 730

天体気象の歌……………七三〇

大寒小寒 730

動物植物の歌……………七三〇

動物の歌……………七三〇

カラスカラスとこさいく 730

囃し歌……………七三二

悪口歌……………七三二

男と女と豆煎り 731 ○○さん○がつく 731

尻とり歌……………七三二

さいなら三角 731

ごろ合わせ歌……………七三三

隣の張り合一という 732

民謡・わらへ歌一覧……………七三三

付 民俗文化財調査票……………七三五

使用(参考)文献

話者 一覧

資料提供者並びに協力者一覧

| 種類 | 名称 | 漁獲物 | 漁期 | 漁具 | 船 |
|---------------------|---------------------|----------------------------|-----------------------------------|--|---|
| 藻取り 貝取り 特別な漁法 | 貝取り つぶ拾い ませ掛け | からすげい つぶ あかはら | 七月・八月 四月・五月 四月・五月頃 の四〇日間 | 水の中にもぐり、石に さわってとる。 川に二尺おきに杭を打 ち、柳の枝で杭の間を編 み、その下に砂利をひい て網をかける。 | |
| 西荒井地区 網漁 | 雑魚すくい | ぎんぎよ、ど じよう、鮎、 えび、うなぎ | 夏中を通して、 特に夏・秋 | 雑魚網 (雨の日は水口の水溜りを利用) | |
| 釣漁 | 川釣 | はや、はぜ、 かまびし | 夏・秋 | 手製の釣竿 (糸はテングス) | |
| 藻取り 貝取り | つぶ拾い | つぶ | 四月・五月 | | |
| 鈴石地区 網漁 | 雑魚すくい | 銀魚、どじよ う、えび、ふな 鯉、うなぎ | 年中 | 小形の網 | |
| 藻取り 貝取り | つぶ拾い | つぶ | 秋 | | |

第九節 山 樵

| 大平地区 | | 山 樵 | |
|------|---------|----------|---|
| 突網漁 | 投網、刺し網 | 鯉 | 鯉が産卵のた め、柳の下など に雌・雄揃って 来るのを待ちか まえて突く。 |
| 釣漁 | 川釣り、沼釣り | な 鯉、はや、ふ | 適期 |
| | | やす | |
| | | 釣竿、糸、餌 | |

山仕事は、**杣・木挽・樵・炭焼**など、山林労働を総括していう。ことに、木材を取扱う作業が中心であった。しかし古くは、**屋根板割り・鋸台作り・臼造り・杓子作り・松脂採り・松煙焚き・とりもち作り・炭焼き**など、多数の山林生産物の採取業が行われた。これらの仕事は、通年の生産に従うほど大量の生産を必要とせず、専業者は稀で副業が多かった。

木材は建築の材となるのをはじめとして、家具や什器などに利用される比重が大きい。このため、樹木の伐採・搬出・加工などの技術や用具、林業組織が古くから発達してきた。

炭は初めは**鋳物・たたら・鍛冶**の燃料として需用が起こった。そのような炭工業に対応してどのような炭がまが造られ、どのような炭が生産されたか、また、都市の需要に応じてどのような炭が生産され、炭焼きがまがいかに改良されてきたかに留意する必要がある。

一般に私有林の発達は遅く、林野の多くは共有で管理されたのであり、そこから水田の刈敷き、牛馬の飼料、屋根

| | | | | | | | |
|------------------|-------------------|---|---|---|---|---|---|
| たきぎ伐り | 種類・名称 平石・西荒井地区 | 場 | 所 | 方 | 法 | 処 | 分 |
| 山林 | | | | | | | |
| 燃料用の割り木とたき木(巻)作り | | | | | | | |
| 自家用燃料、炊事、風呂 | | | | | | | |

薪炭類場所時期経営方法生産物処分用

薪炭 炭 地元山林 冬 個人 炭がまを作る(土がま・石がま) 割木・柴木に作る 自家用 鋸、まさかり、なた、炭かき(火かき) 鋸、まさかり、なた

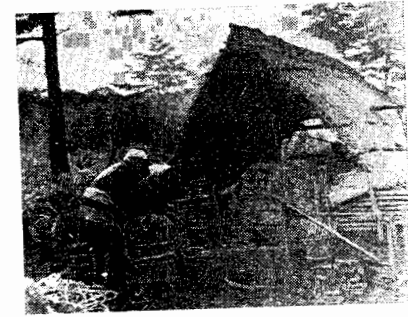
その他 柴木——朝食前に二、三把の柴を背にし、本宮町まで歩いて出かける。売った代金で、衣類などを買ってもちたりした。女に多かった。

| | | | | | |
|-------------------|--|---|---|-------------------------------|--|
| 永田地区 炭焼 木挽 | 炭焼 木挽 | 山 | 山 | 石がま——白炭 土がま——黒炭 土がま、石がま | 自家用、販売 |
| 原瀬地区 炭たき 木挽 | 山 | | | | 自家用、高い。戦後五年位までは、柴を背負って町に売りに出た。主婦の仕事であった。 |
| 儀礼・禁忌 | 山の神様に男根を見せると、山がしずまる。山で刃物などがなくなったら男根をだし、大きくすると見つかる。 | | | | |

| | | | | | | |
|---------------------------------|------------------------|---|--|---|---|---|
| 種類・名称 塩沢地区 木挽 木挽 炭焼 | 場 山 山または家の敷地内 | 所 | 方 山の立木をのこぎりで伐採する。伐った木を板にひく(特別ののこぎりを使う)。木を伐って、かまでやく。 | 法 | 処 人の依頼をうけて、伐ることが多い。 町の店屋に売る。賃焼きもする。 | 分 |
| 儀礼・禁忌 | 神木を切ると、たたりがある。 | | | | | |
| 高越地区 木挽 | 村内に何人かの業者がいて、依頼に応じていた。 | | | | | |



炭焼き (丸太木をかまに入れる)



炭焼き (炭を俵につめる)

材、燃料などが採取された。建築用材、酒だる用材など、杉・檜ひのきの需要が盛んになるにつれて、天然林だけではまかないきれなくなり、有用な樹種の植林が行われるようになった。地域における植林の発達過程、作業の方法、経営、管理などについて留意する必要がある。

二本松市には、木挽・炭焼はいたので、それを中心に、種類・名称、場所、方法、処分・儀礼・禁忌などについて、地区別に記する。

第一〇節 狩 猟

狩猟には、単独で行うものと集団によるものとの別がある。一般には気心の合った者が組をつくる。指揮者には老練な者が押されるが、獲物の配分には差がないのが普通である。

| 種類・名称 | 場 所 | 方 法 | 処 分 |
|------------------------|---|--|--|
| 炭焼き(黒炭) | 畑の頭または土手 | 炭がまつくり 結をして土手などにねば土でつくる。 炭俵つくり 夜なべに縄でかやを編む。 炭木を山で二尺二寸に切ったものを背負って釜場に運ぶ。 丸太木を炭釜に立こみに入れる。 たきつけ(釜の入口からたく) 火止め(煙の色で焼け具合をみて、口を石でふたをする) 口あけ(炭釜の中で冷してから炭火を出す) 炭俵つくり | 炭の仲買人に売る場合もある。 自家用―養蚕、こたつ(暖房) |
| 木の葉拾い マツボ拾い 枯木拾い | 松林・山林 | 熊手などを使って、木葉、マツボを拾う。 なたを使って山の中を枯木を倒す。 | 火たきつけ用、たい肥(種肥)、燃料(自家用) |
| 儀礼・禁忌 | 立木を伐り倒した時に、山の神祝いとして山で簡単な酒盛りをする。 釜ぶち祝い―現場で酒肴で祝う。 釜あけ―炭焼き終わった後の祝い事。 | | |
| その他 | 山林のない人は、協同で山の立木を購入する。 山主人を招き祝う。 | | |
| 鈴石地区 黒炭 | 鈴石全域 | 山の土手を掘って土かまどを作り、くぬぎ、ならを主に焼いた。 割り木(太い木を割ったもの)、柴木(小枝) | 四貫匁を炭すごでまるき、二本松・小浜の商人に売却する。一部は養蚕用など自家用とした。 薪は自家用であった。 |
| 大平地区 炭焼き 石かま | 管理の便利な山のふもとかまどを設ける。 | 炭木を切りかまどに入れて火をつけ、焚き終れば土を掛けて消す。五、六日にて出来上り、使用する。 定められた長さに木を切り、かまの中に積み、一昼夜程かま口に火を焚き続ける。かまの中の木が燃え終れば、口を閉じて火を消す。一週間位で出来る。 定められた長さに木を伐り、牛や馬を使って搬出する。 | 自家用、販売用 |
| 炭焼き 土かま | 管理の便利な山にかまどを築く。 | | 自家用、販売用 |
| 建築用材 (松、杉、檜) | | | 自家用、販売用 |
| その他 | 大平地内は山林が多く、樹種は雑木が多い。それで燃料とする。 杉・松を植林しているところもあるが、輸入材に押され気味である。 | | |

| 種類・名称 | 場 所 | 方 法 | 処 分 |
|------------------------|---|--|----------------------------------|
| 炭焼き(黒炭) | 畑の頭または土手 | 炭がまつくり 結をして土手などにねば土でつくる。 炭俵つくり 夜なべに縄でかやを編む。 炭木を山で二尺二寸に切ったものを背負って釜場に運ぶ。 丸太木を炭釜に立こみに入れる。 たきつけ(釜の入口からたく) 火止め(煙の色で焼け具合をみて、口を石でふたをする) 口あけ(炭釜の中で冷してから炭火を出す) 炭俵つくり | 炭の仲買人に売る場合もある。 自家用―養蚕、こたつ(暖房) |
| 木の葉拾い マツボ拾い 枯木拾い | 松林・山林 | 熊手などを使って、木葉、マツボを拾う。 なたを使って山の中を枯木を倒す。 | 火たきつけ用、たい肥(種肥)、燃料(自家用) |
| 儀礼・禁忌 | 立木を伐り倒した時に、山の神祝いとして山で簡単な酒盛りをする。 釜ぶち祝い―現場で酒肴で祝う。 釜あけ―炭焼き終わった後の祝い事。 | | |
| その他 | 山林のない人は、協同で山の立木を購入する。 山主人を招き祝う。 | | |

第一節 手工業

稲は、食料としての米を得るだけでなく、しなやかな茎(藁)は各種の藁細工に用いられた。わらじ・あしなかと量は大変なものであった。

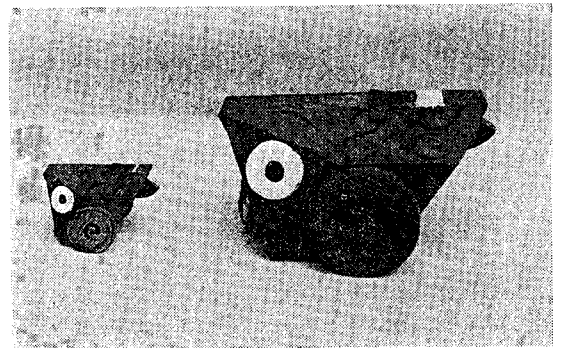
竹細工は、かご・ざる・箕などとして広く用いられたが、一般には自給が出来ず、専門職人の手によった。用いた

| | | | |
|-------|-----------------|---|---|
| 儀礼・禁忌 | 大如来様日に四ツ足を食べない。 | | |
| 大平地区 | 兎追い山 | 山 | 雨の降った日、近隣の若者達が共同で、犬なども使って兎を包囲して捕える。狩人達は猟銃で、きじやかもを射落す。 |
| 兎追い | 山 | | |
| 猟銃狩り | 山 | | |
| 鉄砲ぶち | 山林、野良 | | 肉食・襟巻用。 |
| 兎追い | なだらかな山 | | 仲買いに売る。 自家用として、肉食。皮は防寒用。 |

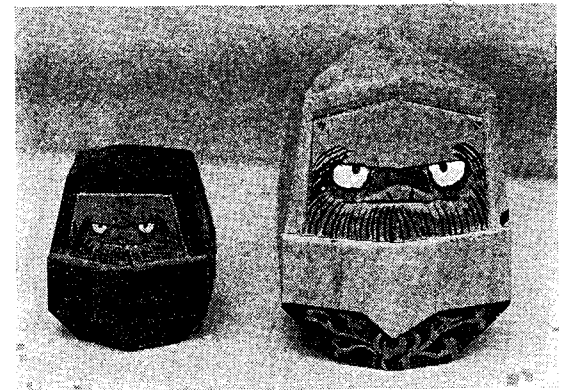
める。
 いたち捕り一夜、竹筒の中はね仕掛をし、その奥に餌を置き、首などをはさんで捕る。
 山鳥、きじ、山鳩猟をする。猟犬によって、鳥を飛び出させて鉄砲で撃つ。
 大雪の後に、多勢が竹棒を持ち、一つの山を囲み、竹棒を木々に叩いて兎を追いつめる。兎がすくんだところをつかむ。

狩猟の中心は、熊狩・猪狩・鹿狩で、槍・弓・矢・鉄砲による狩猟法がとられた。古くは弓矢を用いたが、銃も早くから使用された。もっとも銃の所持制限が厳しかったので、専業者以外の多くは槍を使用した。
 しかし、このほかにも、兎その他の小形獣や鳥類には、わな・落とし穴・鳥もち・網などを用いる狩猟があった。なかでも鳥もち猟は、漁業における延縄と同様に、湖水に鳥もちのついた縄を流して水鳥を捕獲するもので、漁業未分化の典型例である。また、鷹狩や犬山は、漁業における鵜飼いのように、人が直接手をくたさず、動物によって獲物を捕獲する特殊な方法で古くから発達したものである。
 狩人は、山に入るにあたって山の神をまつり、獲物をとるとまず神にささげた。また、山での忌み言葉も発達し、各種の儀礼や禁忌が行われる。
 二本松市内には、古い伝統を持ったまじぎのような狩人は存在せず、本格的な狩猟は行われていない。資料も少ないが、その種類・名称、場所、方法、処分、儀礼・禁忌は、次のようである。

| 種類・名称 | 場所 | 方法 | 処分 |
|----------------------|------------------|-------------------------------------|----------------|
| 塩沢地区 鉄砲うち わんな山 | 山 | 鉄砲で鳥やけものをうつ。 兎の通る道、または鳥の集まる場所にかけ | 町に売る。 町に売る。 |
| 儀礼・禁忌 | 神社・寺院の境内では、うたない。 | | |
| 平石・西荒井地区 | 山のくぼみ | 兎追いをし、落とし穴や木の根っこに追いつ | 本宮・二本松に売る。 |



う ず ら 車



黄門だるま



あだたらの鈴

福まさるは、小さな弓の糸の部分に土鈴を取り付けたもので、土鈴が糸を下る時にいい音がする。「福が勝る」「魔が去る」というのが名前の由来。安達こまは安達地方に古くから伝わる正月用のこま。うるしの色合いが美しい。黒塚人形は、安達ヶ原の鬼婆の伝説に由来する。四角の棒形で、鬼婆の顔が彫刻されていて、左右に割けた口元、歯並びに気味悪さが漂う。これで人間を襲う悪魔を除けるという。黄門だるまは、水戸黄門が岳温泉で湯治していた時に自ら作ったものという。あだたらの鈴は、素焼きの土鈴である。

朴の木の色材をのみ一本で加工して作る。玩具作りを始めたのは、昭和二十四年の冬、安達太良山のふもとにある塩

沢神社の奥の院に、壊れかけたうずら車をつ一つつけたのが縁になった。古くから郷土に伝わるものの忠実な再現をめざし、塗料も昔ながらの緑青、胡粉、すず、そして安達良の黄土を使う。絵付けは、妻のナカも夫に習い作るようになったという。

三 木 工 細 工

二本松は、家具などを作る木工細工の生産地として名高い。二本松市竹田の橋本明(橋本仏具彫刻店)は、県内でも数少ない仏壇や仏具を彫る彫刻師である。木彫刻み、うるし塗り、箔押し、仏壇・仏具の製作を行う。祖父橋本末吉治、本人明と三代続いて木工、漆芸を正業としてきた。一族に、橋本高昇(日展審査員、父の従兄)、橋本朝秀(日本芸術院賞受賞、叔父)がおり、約二五〇年前から続く仏壇や仏具の彫物師としての伝統を支えてきた。

橋本明が彫物をはじめたのは昭和二四年。彫物師としての修業をするため、親子の縁を切られ、その父のもとで七年間の修業をし、七つ道具の手入れからみっちりたたき込まれた。今、長男の和茂が、四代目を目指し、つらく厳しい修業を積んでいる。

仏壇は本来、木地師、彫師、塗師、箔押し師、金具師と分業化されているのが普通だが、それでは魂が入らない、と本地から組み立てまで一貫して作りあげ、個性のある仏具作りをしている。五十〜百年生の松やけやきなどを、用途に合わせて小さく切る。鳳鳥、のぼり竜、からくさ、しし、波など仏画の下絵を書く。糸のこなどを使って、不必要な周りを部分をくり抜き、彫ろうとする物を浮かびあがらせる。このあと本彫りに入る。

また、ここでは獅子頭の特製をし、修理も行う。民俗芸能の維持伝承や復活の一翼をにない、地元はもちろん遠方

- ① 桐の生木の丸太にデッサンして荒彫りする。

総観

地域的特色

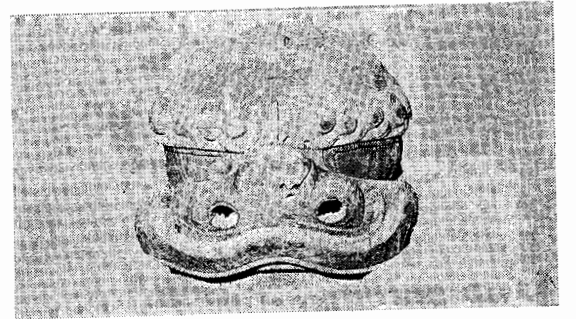
二本松市竹田町は、旧二本松藩城下六町の一つで、寛永二〇（一六四三）年丹羽光重の入封と同時に始まった城下整備に伴って出来た町である。旧奥州街道に沿って整備された城下町の中で、竹田町は一つの特色を持った町を形成している。

『積達大概帳』によれば、竹田町は、街道五町七十二間、その内坂通二町二十九間、平通三町四十三間、家数九十五軒という数字が見られる。この内の坂通りの両側が、藩政時代からの職人町として存在して来た場所で、主として家具製造などの木工職人の町である。

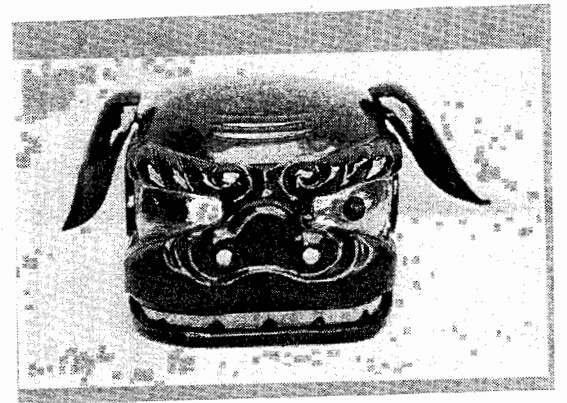
⑨ 金箔を押す。
 ⑩ 漆に朱を混えて、塗り込む。
 さらに、獅子頭のほかに飾り物として、木肌の味を生かした鬼面の彫刻製作も行っている。
 なお、二本松市には伝統的な仏壇・仏具などを製作する同業者に菅野仏具彫刻店（竹田）、橋本仏具店（亀谷）がある。菅野仏具彫刻店では、現在県教育委員会の委託を受け、福島県立博物館のエントランスホールに展示する二本松提燈祭りの太鼓台を製作中である。

付 諸職関係民俗文化財調査票（抜粋）

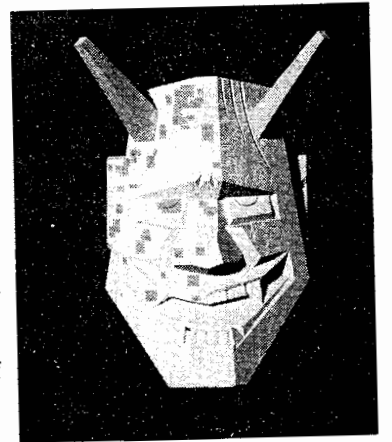
| | |
|--------|------------------|
| 職種・技術名 | 仏壇、各種彫刻 |
| 伝承者氏名 | 橋本 明（三代目「高秀」） |
| 伝承者住所 | 二本松市竹田町一丁目一六六 |
| 調査期間 | 昭和六〇年一〇月二〇日～ |
| 話者 | 橋本 明（大正一二年二月一日生） |



生仕上げの獅子頭



完成した獅子頭



鬼面

- ② 生のまま仕上げ、湯で煮て油を抜き、乾燥する。
- ③ 疵、傷みのある箇所を表裏に布切れを貼り、補強する。
- ④ 漆と砥粉を混えて塗る。でこぼこを直すために砥石でとぐ。
- ⑤ その上に生漆を塗る。
- ⑥ 乾燥したら中塗り漆を塗る。
- ⑦ 朴の木炭でつや消しをする。
- ⑧ 更の上塗り、黒箔下漆を塗る。

| | | | |
|-----|------|----|---|
| 西平 | 荒井 | 菅野 | 明 |
| " " | " " | 喜 | 治 |
| 松平 | 阿部 | 喜 | 四 |
| 本 | 部 | 野 | 二 |
| 正 | 部 | 喜 | 二 |
| 寿 | 部 | 野 | 二 |
| | 儀右衛門 | 清 | 八 |
| | 吉 | 明 | 二 |
| " | 大正 | " | " |
| 二 | 一 | 四 | 三 |
| 二 | 二 | 〇 | 八 |
| 一 | 二 | 一 | 二 |
| 九 | 六 | 〇 | 二 |
| | | | 五 |
| | | | 八 |
| | | | 二 |
| | | | 一 |
| | | | 五 |
| | | | 三 |
| | | | 〇 |

第六章 信 仰

村の鎮守、寺院のほかに家でまつる神としては、屋敷神・氏神があり水神があった。水神は水道ができる前は井戸水や引き水を使っていたのでたいていの家では、幣束を立ててまつっていた。家の神棚にまつるのは多くは大神宮で、台所にはカマド神をまつる。

路傍の神々は、多くは石碑でこれも興味があるが、各論でとりあげられると思われるので省略する。

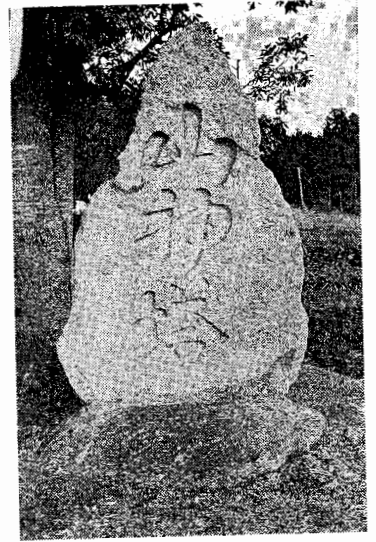
団体を組んで参拝するものには奥参り（湯殿・月山・羽黒）、飯豊山まいり、伊勢まいり、古峯原、成田不動まいりなどが見られ、領内三十三所観音まいりもあった。とくに十三歳になると飯豊山などに登拝する風習があり、十三参りという言葉をよく聞く。

その他の信仰としては雨呼ばり（雨乞い）、旧一月と十月の十七日の山の神講（むしる作神信仰として）、大般若、秋葉・愛宕の火防信仰、疱瘡神送り、コジラ講、子育て地藏の信仰があった。葉山信仰も盛んで、これも作神信仰でハヤマゴモリと呼ばれていた。初午に五色の旗や豆腐、油揚げを稲荷に上げてまつる風習も残っている。

藁人形に五寸釘を打って呪咀する珍らしい例が一つ見られた。

第一節 山の神

山を領する神として全国一般に信じられている。農民のいう山の神は春に山から里に下って田の神となり、秋の収穫がすむとまた山に帰って山の神となる。しかし狐師・炭焼き・木樵など山仕事をする人の信ずる山の神は田の神と



山神塔〔嘉永6年10月〕
(高田八幡神社)

は関係がないという。

山の神は男神だという所と女神だとする所とがある。あるいは木地屋のように夫婦神として信ずるものもある。総じて、山の神を女神とする信仰が最も多い。山の神を女性とする所では女を忌む話がある。二本松市もそうである。田の神を山の神とする所では、春と秋の二回、ほぼ定期的に山の神祭りを催す。祭る月は地方により異なっているが二本松市では旧暦一月一七日と一〇月一七日であったようだ。

御神体がある場合、御神体は、人形・木・山・石・石仏・石碑などさまざまである。また、山の神の性格として、田の神のほかに、産の神・狩猟の神などがある。そして、田の神と山の神の交代の日には山に入ってはいけないなど、山の神に関する禁忌・俗信がよくある。

山の神の供物で特色あるのは、おこぜという海漁で、山の神はこのほかこれを好むという。山の神の御使いとしては狼が御犬の名で信仰されている。山の神の祭は農村では講中でまつるのが多いが、狩人など山稼ぎする人は仲間である。

山の神は一眼一脚だという所が多く、山の神祭の日に入ると一目小僧に会うといわれており、片足のぞうりをあげる風習も広く行われている。

御神体は幣束で性別は女。農作物の神で、祭日は旧暦一〇月一七日。宿は回り番の当番制。神職が祝詞を奏上する。供物は、餅・神酒・魚・野菜。

(二本松地区)

浮内部落の中心の小高い山に山の神がまつられてあり、祭日は一〇月一七日で、餅・酒を供え、一戸一人の一人六人が参加する。回り番の宿に若い人達が集まって餅をつき、掛け軸をかけて拜む。

御神体は石像で、祭日は旧暦一月一七日・一〇月一七日・各屋敷ごとに集って山神講を催す。供物として、餅・酒・魚を供える。各家庭では、飯・魚を山神に供える。

(塩沢地区)

御神体は棟札で、山仕事の神である。祭日は、旧正月一七日・一〇月一七日。魚を供えて、山仕事の安全を祈願する。

(永田地区)

女神神で、寒のうちは山の神で、農作業が忙しくなると田畑に降りてきて田の神になる。祭日は一月一七日。部落の山の神様にお参りし、のちにお神酒などで直会をする。供物として、白飯といわし等の魚を供える。山の神講には必ず男が参加する。昔は料理等も男がした。

禁忌として、山仕事の時は赤飯の弁当を持って行ってはならない、という習慣を守っている人達がいる。

(原瀬地区)

家の近くにある山神、または稲荷様にお参りする。まつり方は家の神と変わらない。

(杉田地区)

祭神は稲荷で、祭日は一月一七日。豊作祈願とそのお礼をする。

講中の一日行事として、朝から各戸の山男が中心になり、もち米一升持参して当番宿に集まり、女性の手を借りずに餅つきをし煮物などをつくる。宿の神棚に、きな粉を餅にかけてふた重を仲間の分だけ供える。さらに神酒・尾頭・燈明をあげて拜む。その後、酒盛りをすると夕刻になり、神棚に供えた餅を各自持ち帰り、家族全員で食べる。

禁忌として、山の神の行事には女性は一切手を出さない。また、一升餅をはじめ、当日の飲食物は一滴も残してな

らない。

(平石地区)

人通りの多い十文字に立てられている道祖神(耳だれ神様)で男性である。耳だれや耳痛みを治すのに、さんてら(兼細作の丸いもの)の中央に穴をあけ、その穴に木盃を付けて吊して拜む。

女にわざわいがあり、結婚式の日には花嫁はその前を通ってはならない。通ると花嫁は不幸な目に会う。また、日頃女性は道祖神に手をつけられない。

(西荒井地区)

御神体は不明だが神狼ともいわれ、祭日は旧暦一〇月一七日である。その日、早朝から一戸一名の働き盛りの男がもち米一升を持ち寄り、男だけで餅をついたり、料理をつくる。そして餅と頭物を供え、年中の無事を願う。

女の参加は禁忌である。

(鈴石地区)

各組ごとの産土神社境内に山神の石塔が立てられている。田畑一般の神であるが、主として田の神である。祭日は旧暦一〇月一七日であったが、近年は新暦一月二三日(勤労感謝の日)に改められている。各戸一名農作業を担当する者が米・酒・魚持ち寄りで参加する。

行事の内容として、当前の家の座敷中央の柱に山津見神社の掛け軸を掛け、仮祭殿とし、燈明をつけ、鏡餅・御酒・魚・野菜を膳に盛って献上する。一同で拝礼、農作物の豊作感謝の祈願をし、終って懇親会に移る。

山神講の祭には女性が入れず、料理等にも口出しさせないのが通例であったが、近年は男女平等に改められている。

(大平地区)

第二節 家についている神

家についている神とは、家の中、または家についている神、家全体を守る神などである。像が有るものも、像が無いものもあり、祭られるものも、祭られないものもあり、言い伝えの伴うものもある。東北地方の例として知られているものに、オコナイサマ・オシラサマ・カギボトケ(岩手)・カバカワ(岩手)・マイリノホトケ(岩手)・オクナイサマ(青森)・オカノカミ・三吉神(秋田)・ザシキワラシ(岩手)などがある。

一般には氏神といっても、本来その家についている血縁的な神だけでなく、勧請神も入り込んでおり、また産土や屋敷神と混同している場合もある。二本松市史の資料もそうである。水神・便所神・厩神などははっきりしている。ことに放牧の盛んな山間地方などでは馬神の信仰があった。火の神は家々の神であるが、荒神となると鍛冶屋を業としている家で祀る火の神をいう場合もあった。また、おかま様(かまど神)と混同して考えられていることもある。次に、地区ごとに家についている神とそのまつり方について記する。

正一位稻荷大明神

やしろに幣束を祭る。初午の日、正一位稻荷大明神の旗一對を立て、油揚げ・豆腐・赤飯を供える。水神様

井戸端に幣束入れの箱を置き、幣束を立てる。

水神と刻んだ小さな石の碑を立て、正月や秋祭りに餅や赤飯を供える。うぶすな様

各家にあり、正月や蚕神(二月一六日)等に、餅・団子を供えておまつりする。

(二本松地区)



産土様 (おぶすな様) (堀 越)



水 神 (安達ヶ原)

水 神
石碑をたておまつりした。

(鈴石地区)

内庭下屋のかまど付近に棚をつくってまつり、正月・春秋の例祭に紙幣・餅・飯を供える。
そうぜん様
庭のトンボ口付近に棚をつくってまつり、正月と馬を売った場合には特別に御飯を上げて拝む。
井戸神様
井戸の付近にまつり、正月とつつこ祭りには幣束と飯を供える。
おぶすな様

(西荒井地区)

屋敷の大家の裏山にうぶすな神をまつり、正月に幣束、つつこ祭りには飯を供える。



水 神 (上 原)

氏 神

屋敷内にあり、家によって、稻荷様・明神様など色々である。農家の休日などに、特別に作った餅・飯・団子などを供える。

水 神

川の水を使っていたので川端に祀っていた。井戸の場合は井戸端。農家の休日に、作ったものを供える。

(塩沢地区)

大神宮様・お釜様・水神様

大神宮様は神棚に、お釜様はかまどの上に、水神様は屋敷井戸の所にまつる。家の中につるべ井がある家ではその井戸の所に。

(笹野地区)

天照皇大神宮・おかま様・だるま様・ねうし様・水神様

おかま様・水神様以外は家の中のイドコロの上部に神棚を造ってまつる。おかま様は台所の流し場にあるクドの近くに棚をつくり、水神様は井戸のそばに仮屋根(葦屋根)の中にまつる。農作業が休みの神事日(各月の一日・二五日・二四日)には御飯を供え、拝む。

(平石地区)

大神宮様

イトコロ間の中央南向きの高いところに神棚をつくり、普通の日には御飯を供えて拝み、正月や神事日には特別に炊いた御飯や餅・神酒をあげる。

おかま様

井戸端に水神と刻まれた石塔があり、正月や産土神の例祭には、神主より御幣を受けて、餅や赤飯とともに供える。また、年に一・二度井戸払いとて、古い水を汲み出して飲料水を清め、清浄を祈願する。かまどの神

屋根裏にあり、火一切の守護神。正月には御幣を供える。火への感謝、火難防除の祈願を込めてまつっている。

(大平地区)

第三節 聖地・森

聖地・モリ(森)とは、村人の間でみだりに入ることを忌んだり、氏神の境内以外で、何かを祭つてある場所など聖地として見られている森や場所のことで、その名称やいわれなどが資料となる。例として、沖繩のオタキ・鹿児島・モイドン・若狭地方のニソノモリ・対馬のシゲなどが知られる。

信仰的に、また伝承的に神聖視されてきた一定の土地である。日常みだりにそこに立ち入ることは禁忌視され、それを犯すと祟りがあると信じられてきた。民間の聖地は、天然の山・丘・森・峠・滝・洞穴・巨石などであるが、天然の地形地物でもすべてが聖地ではなく必ず特定の選択と約束のもとに成立しており、そこに伝わる禁忌や靈威は、元は何らかの祭場であったことに基づいている。また、人工を加えた塚や壇・石形・祠堂・碑などを以て標示する聖地も多い。

東北地方に分布するモリと呼ばれる山ないし丘も、祖霊の群がる山上の聖地という信仰に連なっている。

お旅所と称して祭りのみこしが渡御し祭典の行われる場所も一年に一度しか用いないが、常に芝地などと称して他

の使用を禁じている。そのほか、村境と泉井も聖地となりやすかった。

飯塚

昔、凶作で餓死者が多く出た時に、お年寄り達が若者達を生き残らせるために、自らここに集まって餓死した所という。現在供養塔があり、元はよくここで拝む人があった。

人形壇

特別ないわれがあると聞いているが、具体的なことは記憶に残っていない。

葉山様

(平石地区)

近くの田町地区内で一番高い山を葉山の森と称し、山の神の戻る山という。たたりのある石

西荒井与中内にある道祖神の大きな台石で、その石を動かそうとすると必ずたたりがある。道路拡張のため過去に二・三度そうしたことがあった。

昔は有ったとのことだが、今は開墾されて田畑となっており跡形もない。戦時中、食糧不足の際に取り払われたようである。

(西荒井地区)

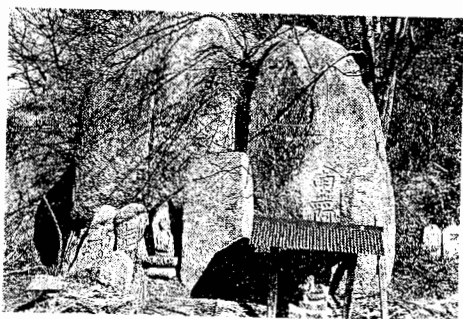
(大平地区)

第四節 便所神

便所神の信仰は全国的で、廁神ともいい、その地方名は地方によりさまざまである。廁というのは川屋の義と思わ



大平八幡神社境内の石塔



道ばたの神仏 (南 町)

場所を集められているものについても対象とし、元あつた場所に注意しなければならない。路傍の石神石仏のたぐいは非常に多く、民間信仰の中心をなし、村人の生活に直結しているものばかりである。大ざっぱに二種に分類すると、一つは社殿の代わりの石神といったたぐいのもの、他の一つはより民間的な小さな雑信仰とでもいったたぐいのものである。

前者を信仰内容からみると、山の神・湯殿・雷神・稲荷・飯豊・伊勢・熊野など、大体作神信仰の系統に属するもの、古峯・愛宕・秋葉など火難盗難に属するもの、牛頭・疱瘡のような疫病よけに関するものが多く、そのほか、水神・廐神などがある。

後者では、庚申などはとくに多く分布しているが、その信仰内容を県内地方別にみると、県北地方の養蚕信仰のほかにさぶる雑多である。二十三夜も多く、浜通り北部では安産、県北では養蚕を祈る。十九夜はいわき地方に多く、もっぱら安産を祈る。馬頭観音は会津のほか白河地方や阿武隈山間に多く分布する。二本松は県北の特色を示している。

路傍の神仏を、その名称・場所・材質と形状・年紀と銘文・祭日と行事と供物・概要と変遷などについて、資料にあるものを地区ごとに示す。

れ、古くは流水の上に建てられ、糞尿が流れ去るようになっていたといわれる。廁に紙を使うのは新しいことで、以前は、チユウギ・シリナギなどといって、竹木片・藁・木の葉・葛の葉などを用いた。

便所神の名称・祭り方・どういう日に祭るか、人形など何か埋めたり、祭ったりしてあるか、が資料となる。厠屋に関する禁忌は眼・歯に関するものが多い。妊婦が厠屋の掃除をよくすると産が軽いかか美しい子が生まれるという地も多く、また関東から甲信越にかけて雪隠参り・便所まわりなどと称して、初外出に便所へ連れて回る習俗があるなど、厠神と出産とは関係が深く、便所神が産神として信仰されていた。

名称は雪隠神様という。雪隠参りというのは、お産の七日後に、鍋墨を指に塗り、生れた子供の額の中央に黒星を付け、頭におしめを被せて丈夫に育つよう雪隠神様にお参りすることである。

(原瀬地区)

せつつん神(雪隠神)といい、赤い色紙を着物型に切って、便所の中に下げ、赤い幣束を立てて、便所の前で正月一六日に餅を焼いて食べる。

赤ん坊が生れて一週間目に、綿帽子をかぶせ、小豆粒三つ・線香三本を持って拜む。年の暮れに、お金を催促された時に、隠れ通すために、正月一四日に赤い幣を立てて拜む。

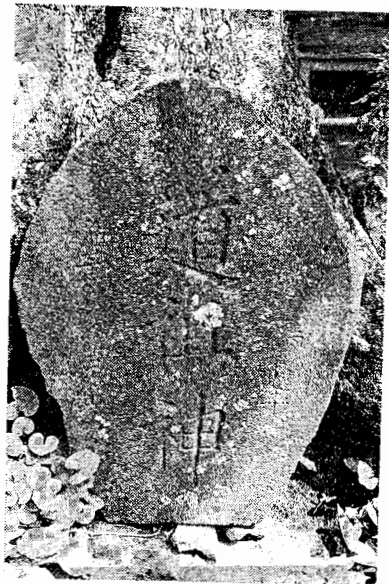
(平石地区)

第五節 路傍の神仏

路傍の石仏とは、石仏・石碑・小祠はもちろん、それ以外のものでも、例えば村はずれに祭られるシヨウキサマ・カシマサマ・サイノカミなどのわら人形・面の類である。過去に路傍にあつた神仏で、神社や寺院の境内、その他の

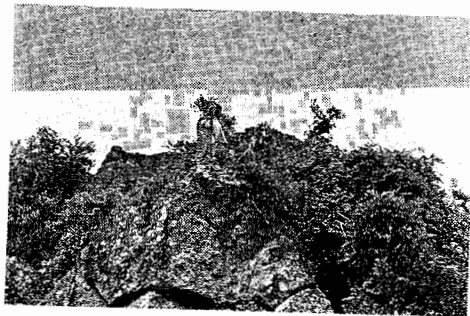


天照皇大神 (古 家)



道 祖 神 [弘化5・5]

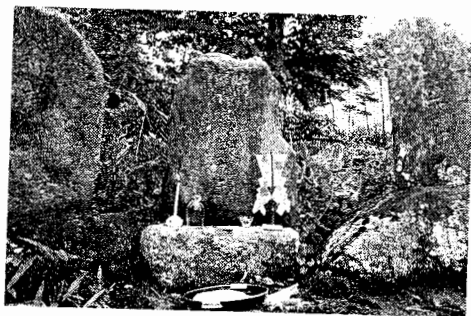
(永田・三渡神社)



地 蔵 尊 (木ノ根坂)



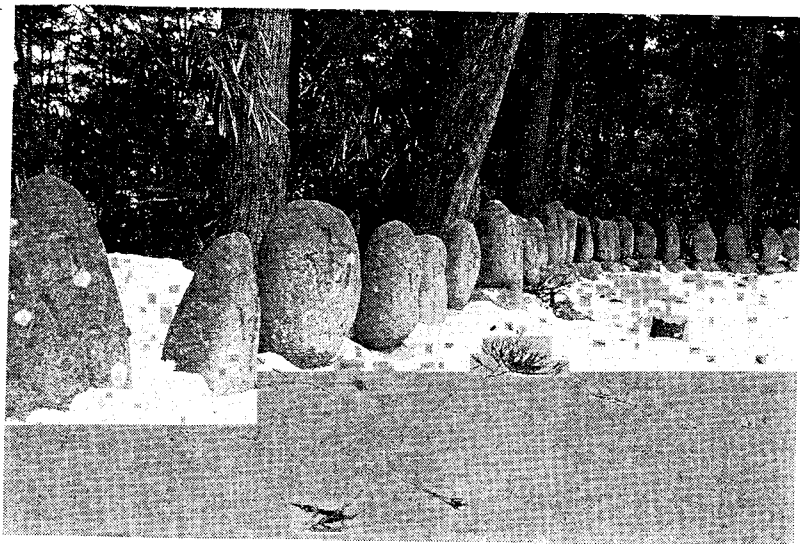
馬 頭 尊 [文化11・12] (大塚)



秋葉山 (中央)・湯殿山 (右)・金剛山 (左)

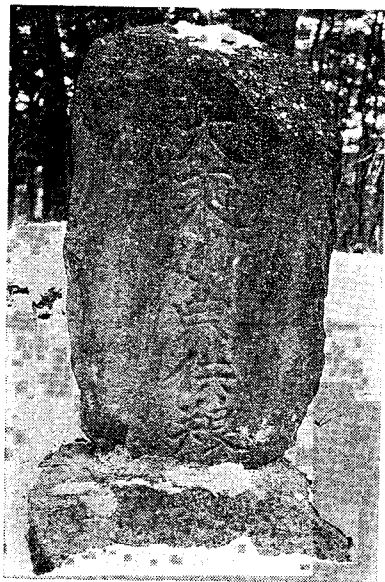
(永田)

| 名称 | 場 所 | 材 質・形 状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事 (供物も) |
|------------------|------------|---------|--|---|
| 塩 沢 地 区 天照皇大神 | 村内各地 | 石碑・平型 | 表 天照皇大神 裏 伊勢参宮に同行した人名 | 伊勢講の日に餅を供えてお参りをす る。毎年オツツ参りをす。伊勢参 宮は一生に一回だったので、同行し た人で必ず石碑をたて、参宮の日に 集って伊勢講を催し、お参りをした が、今の人は伊勢講はしても、碑は たてなくなった。 |
| 百 庚 申 | 上原 (長者窪) | 石碑・平型 | 明治の中期、滝にあったもの を移した。 大きな親庚申があり、たくさ んの庚申塔がある。 | 旧暦の初庚申の日に甘酒を作り参詣 者にふるまった。参詣者は米を供え てお参りをした。 |
| 大 黒 天 | 不動平 (くみ塚山) | 石像 | 十文字岳温泉が繁昌したころ、 温泉の守り神としてたてられ た。 | 春秋二回 (期日不定) 塩沢長寿会主 催で祭りが行われるようになった。 不動平の大黒天は、近年塩沢長寿会 によって塩沢温泉湯川荘に移され、 長寿大黒天として、毎年春秋二回祭 りが行われる。 |
| 忠 魂 碑 | 上原 (長者山) | 石碑・平型 | 表 忠魂碑 裏 戦没者の氏名 | 八十八夜に在郷軍人会主催で招魂祭 が行われた。 なし |
| 地 蔵 尊 | 木ノ根坂 | 石像 | 天岳遭難者の霊をまつるため にたてられたという。 | |
| 高 越 地 区 | | | | |
| 秋 葉 山 | 山 田 | | 安政二年二月一五日 秋葉山 | |
| 明神様 (蛇神) | | | みかげ石・長方形割石 | |
| 十九夜様 | | | 天然石・笠 台石はみ かげ石 | 旧九月九日・餅新米のふかし |
| | | | 不明 | |



百 庚 申

(館野神社)



大乘妙典供養塔【宝暦8・9】

(館野神社)



青面金剛尊(庚申)【元禄13・2・2】

(館野神社)

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事(供物も) |
|---------------|-------------------|-------------------------|--|--|
| 永田地区 大黒天 | 長土路 | 石材 | 風化により不明 | |
| 原瀬地区 二十三夜様 | 部落への入り口に あたる位置 | 石・石台座上に石仏像 | | ぼた餅を供え、流行病をよける祈願をする。 |
| 甘酒清水観音 足尾様 | // | 石・ // | | 女・子供の安全と健康を祈る。 |
| 太子様 | おぶすな(屋敷内) | 石・石宮 | | 神酒をあげ、健脚を祈願する。 |
| 阿彌陀様 | 屋敷内 | 石・石仏像 | 明治三年一〇月一七日 不詳 | 神酒をあげ、家内安全・子供の丈夫な成長を祈願する。 |
| 山の神 山の神 | 戈木 山口 | 石 | 文化七年十一月吉日 安政五年天三月吉日 | ぼた餅を供え、家内安全・子供の丈夫な成長を祈願する。 |
| 羽山権現 | 葉山前原 | 石・屋形(三基) | 不明 | 昔は裸参りの習慣があった。 ほら貝等をふき乍ら登った。 (権現堂山) |
| 雨降り石 | 川原 | 巨石で梵字が掘られている。 | 明治元年 嘉永七年甲寅 | 雨乞石といわれている。 |
| 大黒様 | 小塚前 | 石・高さ約一メートル、 素朴な顔である。 | 他三基 | |
| 石 仏 石 仏 | // | 石 石(五基) | 山ノ神、大正元年一〇月一七日、寛保元酉天、享保一九寅天 考白、延享三寅天(大小・二基) | |

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事(供物も) |
|---------------|--------------|---|------------------------------|---|
| 庚申 大乘妙典塔 | 法徳寺 | 加工・ 自然石・丸形長方形 | 万延元年・庚申 宝暦八年・大乘妙典塔 | |
| 庚申 南無阿弥陀仏 | 〃 | 加工・ 自然石・〃 | 明和七年・庚申 宝暦五年・南無阿弥陀仏 | |
| 十八夜供養 | 桐ノ木内(猫稻荷) | 〃 | 宝暦九年・十八夜供養 | |
| 甲子塔 | 鹿野前 | 加工・ 自然石・〃 | 明和辰天八月・甲子塔 文化六巳年九月・三十三観世音 | |
| 三十三観世音 | 〃 | 〃 | 文化(年不明)・南無阿弥陀仏 | |
| 南無阿弥陀仏 | 〃 | 〃 | 文字判読不明 | |
| 平石地区 飯塚供養塔 | 九鬼(ウチユウとも呼ぶ) | みかげ石・墓型、約八〇×四〇センチメートル | | 餓死年に年寄りがこの山深い場所を選んで死んだ所と言う。山伏坊が供養したので、この近くに地名「山伏坊」と行屋がある。 |
| お姫様 | 一盃森 | 木造のお堂の中にまつられていて。本尊は背負って歩いたといわれているが、現存しない。 | | このお姫様は背負って行者が各戸をまわったといわれてるとう。 |
| 産様地蔵 | 桑原氏宅(トロウミ) | 木造・戦前多くの信者に削られて変形している。 | | 安産の地蔵と称され、他地より来て拜む。桑原氏所有とのこと。 |
| 地蔵坊田(二組) | 小高内八坂神社 | 木造・約八〇センチメートルの立像二体 | | 元吉祥院坊が思濟会主催による四方弓固め行事として供養を行う。 |
| 粟ノ須供養塔 | 沖 | みかげ石・自然石 | | |

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事(供物も) |
|-------------|--------|--------------------|----------------|--------------|
| 舘野地区 地蔵尊 | 甘酒地蔵 | 加工石 | 安永九年一〇月一〇日 | |
| 湯殿山 | 〃 | 自然石 | 文政元年一月八日 | |
| 二十三夜供養 | 日向 | 〃 | 明和九年四月八日 | |
| 地蔵尊 | 壇の原 | 加工石 | 安永九年一〇月一〇日 | |
| 大乘妙典供養 | 舘野神社境内 | 〃 | 宝暦八年九月吉日 | |
| 二十三夜塔 | 〃 | 〃 | 嘉永六年九月二三日 | |
| 十九夜様 | 〃 | 〃(二対) | 嘉永六年九月一九日 | |
| 大黒天 | 山の神 | 自然石 | 文化元年一二月吉日 | |
| 金剛山 | 〃 | 〃 | 安政六年一月 | |
| 南無阿弥陀仏 | 〃 | 〃 | 延享四年一月二三日 | |
| 〃 | 甘酒地蔵 | 〃 | 天保九年八月二七日 | |
| 箕輪地区 山の神 | 坂ノ上 | 加工 | 文化(年不明)・山神 | |
| 馬頭尊 | 〃 | 自然石・長方形 | 万延元年一〇月・馬頭尊 | |
| 庚申勢至 | 新田 | 加工・ 〃 | 天保一三年一〇月・庚申勢至塔 | |
| 庚申 | 〃 | 〃 | 明和九年・庚申 | |
| 南無阿弥陀仏 | 〃 | 自然石・縦二メートル横一、五メートル | 天保一四年・南無阿弥陀仏 | |
| 湯殿山 | 〃 | 〃 | 文化九年・湯殿山 | |
| 勢至 | 〃 | 〃 | 明和七年・勢至 | |



青面金剛尊 [延享3]

(高田八幡神社)



庚申塔 [延享3]

(高田八幡神社)



蚕供養塔 [天保2・10]

(神)



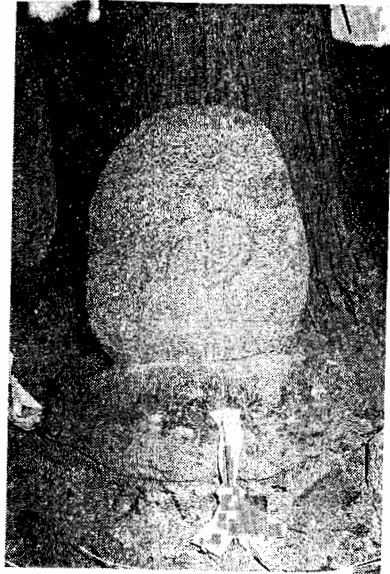
廿三夜塔 [文政8]

(神)

※ 高田八幡・妙見尊・お姫様・神明社・各地蔵堂六カ所・八坂神社・豊年社・將軍
 地蔵・大黒天・山神・青面金剛・勢至塔・己巳塔・青蘇尊・マリステン神・十九
 夜塔・延命地蔵・緬羊靈塔・大聖文珠尊・養蚕神・愛宕山・古返供養塔・馬頭
 尊・二十三夜塔・秋葉山様
 等が境内・路上脇にお堂などに約一二カ地区内に所在。

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事 (供物も) |
|--------------|------|---|---|--------------------|
| 西荒井地区 馬頭尊 | 上敷内 | 石材・長方形、九〇×五〇cm | 昭和初期に馬の飼主が馬を亡して建てた供養碑 安政(年不明)一月九日 | |
| 万 靈 塔 | 与中内 | 花崗岩・卵形長方形、九五×五〇cm | 明治四〇年一月吉日 | |
| 馬 頭 尊 | 〃 | 〃・自然形の長方形、九〇×四〇cm | 元文二巳年一〇月五日 | |
| ミミダレ神 | 〃 | 長方形 | | 耳ダレを治すのに祈る。供物、サンテラ |
| 立石岩明神 | 立石 | 花崗岩の自然の山があり、大小奇岩が四〇数個あり、その自然石に立っている仏碑。大きいものは、二・三×一・二メートル、小さいものは、六〇×一〇センチメートル。 | ①文殊菩薩・明治二七年正月 ②古峯神社・明治二三年九月 ③養蚕大明神・安政六年二月 ④己巳供養・宝曆一年 ⑤庚申塔・文化七年 ⑥甲子塔・安政五年 ⑦甲・天保二年 ⑧馬頭尊・明治四一年九月 ⑨地神・不明 ⑩山神・不明 ⑪十九夜浮彫像・文化三年 ⑫甲(大小四七基) ⑬大黒天・不明 ⑭弁財天・不明 | |
| 鈴石地区 石 塔 | 五間目田 | みかげ石 高サ 〇・五尺 幅 〇・九尺 | 不詳・湯殿山塔 | |
| 草 林 | 〃 | 〃 | 不詳・庚申塔 | |
| 大 門 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・九尺 幅 〇・八尺 | 文之四年・大神宮 | |
| 〃 | 〃 | 自然石 高サ 二・〇尺 幅 二・五尺 | 不詳(庚申の像)・庚申供養塔 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・一尺 幅 一・三尺 | 文政三年・山神 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・一尺 幅 一・三尺 | 文久三年・熊野山 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・七尺 幅 〇・六尺 | 文政一〇年・大黒天 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・六尺 幅 〇・三尺 | 弘化二年・ほこら | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 不詳・庚申(二体) | |
| 後 田 | 〃 | 自然石 高サ 一・五尺 幅 〇・四尺 | 不詳・弘法大師(像) | |
| 神ノ前 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・三尺 幅 〇・六尺 | 文化一二年・竹之塔 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 弘化四年・妙見尊 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 文政元年・山神 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 文政一一年・金毘羅大権現 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・二尺 幅 〇・六尺 | | |

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事 (供物も) |
|--------------|------|---|---|--------------------|
| 西荒井地区 馬頭尊 | 上敷内 | 石材・長方形、九〇×五〇cm | 昭和初期に馬の飼主が馬を亡して建てた供養碑 安政(年不明)一月九日 | |
| 万 靈 塔 | 与中内 | 花崗岩・卵形長方形、九五×五〇cm | 明治四〇年一月吉日 | |
| 馬 頭 尊 | 〃 | 〃・自然形の長方形、九〇×四〇cm | 元文二巳年一〇月五日 | |
| ミミダレ神 | 〃 | 長方形 | | 耳ダレを治すのに祈る。供物、サンテラ |
| 立石岩明神 | 立石 | 花崗岩の自然の山があり、大小奇岩が四〇数個あり、その自然石に立っている仏碑。大きいものは、二・三×一・二メートル、小さいものは、六〇×一〇センチメートル。 | ①文殊菩薩・明治二七年正月 ②古峯神社・明治二三年九月 ③養蚕大明神・安政六年二月 ④己巳供養・宝曆一年 ⑤庚申塔・文化七年 ⑥甲子塔・安政五年 ⑦甲・天保二年 ⑧馬頭尊・明治四一年九月 ⑨地神・不明 ⑩山神・不明 ⑪十九夜浮彫像・文化三年 ⑫甲(大小四七基) ⑬大黒天・不明 ⑭弁財天・不明 | |
| 鈴石地区 石 塔 | 五間目田 | みかげ石 高サ 〇・五尺 幅 〇・九尺 | 不詳・湯殿山塔 | |
| 草 林 | 〃 | 〃 | 不詳・庚申塔 | |
| 大 門 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・九尺 幅 〇・八尺 | 文之四年・大神宮 | |
| 〃 | 〃 | 自然石 高サ 二・〇尺 幅 二・五尺 | 不詳(庚申の像)・庚申供養塔 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・一尺 幅 一・三尺 | 文政三年・山神 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・一尺 幅 一・三尺 | 文久三年・熊野山 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・七尺 幅 〇・六尺 | 文政一〇年・大黒天 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・六尺 幅 〇・三尺 | 弘化二年・ほこら | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 不詳・庚申(二体) | |
| 後 田 | 〃 | 自然石 高サ 一・五尺 幅 〇・四尺 | 不詳・弘法大師(像) | |
| 神ノ前 | 〃 | みかげ石 高サ 〇・三尺 幅 〇・六尺 | 文化一二年・竹之塔 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 弘化四年・妙見尊 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 文政元年・山神 | |
| 〃 | 〃 | 〃 | 文政一一年・金毘羅大権現 | |
| 〃 | 〃 | みかげ石 高サ 一・二尺 幅 〇・六尺 | | |



庚申塔 (大平八幡神社)



青面金剛尊 (庚申) [元文2・10・5]
(大平八幡神社)

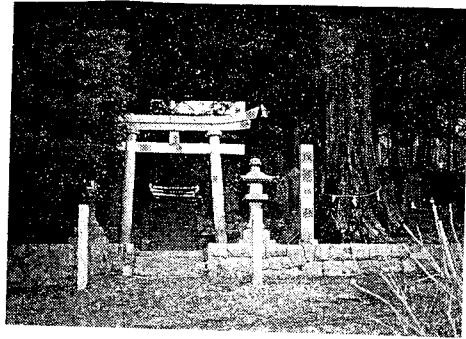


二十三夜塔 [天保14・10・23]
(大平三島神社)

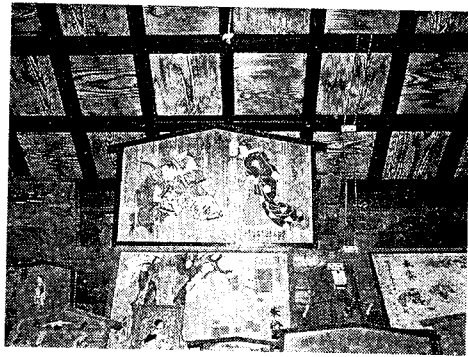


已待供養塔 [天保5・9・19]
(大平三島神社)

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年 紀・銘 文 | 祭 日・行 事 (供物も) |
|-------|-------|-------------------|--------------|---------------|
| 石合 | 観音寺境内 | 高さ 一・二尺 幅 一・〇尺 | 嘉永四年・庚申塔 | 観音寺境内に百体の観音様 |
| 万海壇 | | 高さ 〇・三尺 幅 〇・五尺 | 不詳・地藏様 | |
| 井戸ノ上 | | 高さ 〇・八尺 幅 〇・八尺 | 天保一四年・庚申塔 | |
| 〃 | | 高さ 〇・四尺 幅 〇・九尺 | 不詳一三年・己巳待供養塔 | |
| 〃 | | 高さ 〇・八尺 幅 一・八尺 | 大正九年・四義民碑 | |
| ふくわら石 | | 高さ 〇・九尺 幅 〇・九尺 | 二七〇年前・百観音 | |



八幡神社 (大平地区蓬田)



奉納された絵馬 (龍泉寺観音堂)

参考までに、『福島県宗教学人名簿』（福島県・一九七八年）によると、二本松市における宗教学人としての神社は、神社神道五六社・金光教一社・三五教一社の計五八社である。

仏教は仏陀の説いた教えで、世界的大宗教の一つであり、前五世紀頃インドのガンジス川中流地方に興った。仏陀釈迦牟尼の説法に基づき、人間の苦悩の解決の道を教える。修行に専心する出家教団のほかには在家信者達も多かった。アショーカ王の入信

まつりしたのをいう。後に、特別の関係ある神とか、自分の信仰する神をも、一族のつながりがなくなるとも氏神と称するようになった。例えば、清和源氏の源頼義はその長男の義家を八幡太郎と名付けたほど八幡を深く信仰し、その結果、源氏の氏神は八幡というようになった。産土神というのは、その人が生まれた土地の神を指したのが転じて、それぞれの土地の神すべてをウブスナの神というようになった。また、これに対し鎮守神は、もともと国や村や地域などをお護り下さる神をいった。

ところが、氏神も産土神も本来の意味がだんだんと混同されるようになり、今では、一般に「氏神様」と呼ばれて、等しくその土地の神を称するようになった。そして、それぞれ神社のある土地に住む人を氏子（うぢこ）といった。また鎮守神にしても、今日では氏神や産土神と同じ意味に信仰されており、「鎮守の森」とか「鎮守さま」とかいつて親しまれている。

第六節 神 仏 信 仰

神社は大きな社から小さな祠までさまざまあるが、古くからの民間信仰は小さな祠の祭りに残っている。例えば、阿武隈山地にある葉山信仰は、東北地方に多い作神信仰の一つで、山の祭場に神を降し、潔斎した村人達が託宣を告げるノリワラから作の豊凶を聞く作占の神事が祭りの中心をなしている。

神道は日本の民族的宗教であり、日本民族の固有本来の信仰であり、外来の思想信仰に対して民族の性格を端的に示すものである。氏神は、もともと先祖を同じくする一族の人達が集団生活をする中で、その守護神として祖先をお

| 名称 | 場所 | 材質・形状 | 年紀・銘文 | 祭日・行事(供物数も) |
|---|----------------------------|--|--|--|
| 大平地区 馬頭尊 足尾山の石塔 大黒神 弁財天 湯殿山 成田山 妙見山 古華山 金山 山の神 庚申 廿三夜 | 各組毎の産土神 境内に主として立てられている。 | 川原等に有る自然石に字だけ刻まれてあり、大きさは一メートル位のから小さいのは三〇センチメートル位のものもある。 地藏尊の形を刻んだもの。 大きな岩石に観音像が刻まれてあり信仰の盛んな往時がしのばれる。 | 建立年紀も刻まれてあるが、多くは風化しており鮮明を欠く。江戸時代中期が多く、明治、大正、昭和のは見当らない。 | 講中者一同で建てられたものや個人で立てたものなど種々あり。 定められた祭日もなく、産土神の例祭の時御幣や赤飯が供えられる。 |

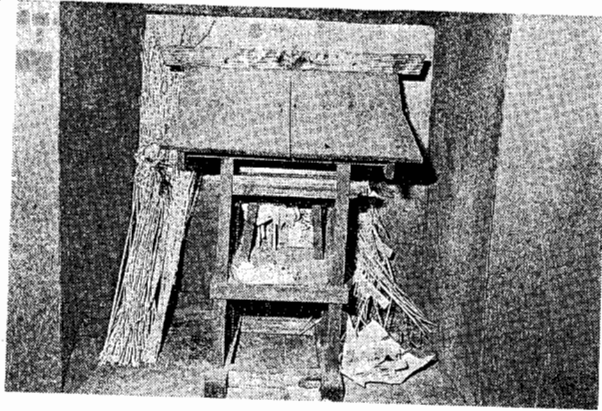
| | | | | | | | | |
|------------------------|---------------------|-------------|--------------------------------|---|------------------|----------------|-------------------|--|
| 田中明神 竹の花稲荷 駄子内稲荷 | 新米の飯を供える。 〃 〃 | 〃 〃 〃 | 九月一九日 九月九日 二月二六日 九月九日 | 幸町(沖田) 上原(竹ノ花) 垣子内(駄子内) | 田中神社 稲荷神社 | 八区 七区 | 一二戸 一二戸 一三戸 | オツツ参り 〃 〃 |
| 八阪様 | 家内安全を祈る。 | 〃 | 二月二六日 八月二六日 | 上原(滝) | 八阪神社 | 五区 | 三二戸 | オツツ参り 魚を供える。 オツツ参り |
| 中里稲荷 山神様 | 新米の飯を供える。 山の災難よけ | 〃 〃 | 九月九日 一〇月二七日 | 表一丁目(中里) 上原 | 中里神社 山神祠 | 一区 七区 | 一〇戸 二二戸 七戸 | オツツ参り 魚を供える。 |
| 浮内稲荷 大日様 | 新米の飯を供える。 | 〃 〃 | 九月九日 一月八日 | 表二丁目(浮内) 細野 | 稲荷神社 | 二区 | 四三戸 | 〃 |
| 観音様 | | | | 表二丁目(七廻) | 金剛山宝泉院 浅間山塩沢寺 | 一区、二区 一区、二区 | 四三戸 四三戸 | 〃 |
| 高越地区 羽黒神社 | 信仰家内安全 五穀豊穣祈願 | 旧 旧 | 四月二九日 九月九日 (現在は三月二九日) | 新座に鎮座して あった(昭和六 年に現在地正法寺 町に移した。) | 羽黒神社 | 高越全戸 | 氏子 | 区内をみこしが ねり歩き家内安 全を祈願する。 |
| 大磐若 | 家内安全、五穀豊 穣祈願 | 旧 | 三月二四日 (現在は四月二四日) | 正法寺町 | 地蔵尊 | 正友会 | 正法寺 | 正法寺住職が磐 若経を唱えて祈 願をする。 |
| 念仏講 | 信仰と親睦を図る。 | | 春秋彼岸、旧盆 (現在八月盆) | 当前制(輪番) | | | 部落 | 数珠を回しながら 念仏を唱えて 祖先の霊を供養 し親睦を図る。 |
| 不動尊 | 信仰(火伏の神) | 旧 | 八月二八日 (現在は三月二八日) | 仲の内 (現在は不動) | 不動尊 | 仲の内、中 里部落 | 正法寺 | 昔は刀鍛冶の祈 願所とされた。 |

| | | | | | | | | |
|--------------|---------------------------------|----|------------------------|---------------------------|--------|-------------|------------|--------------|
| 塩沢地区 八合明神 | 新米の飯を供える。 | 旧曆 | 四月一日 九月九日 | 末広町(大郎山) | 安達太良神社 | 七区・八区 | 七〇戸 | オツツ参り |
| 雷神堂 | 家内安全を祈る。 夜ごもりをして家 内安全を祈る。 | 新曆 | 五月六日 三月一五日 八月一五日 | 表二丁目(浮内) 塩沢町二丁目 (館) | 雷神社 | 一区・二区 三区 | 四三戸 一九戸 | 〃 |
| 三島様 | 家内安全を祈る。 | 旧曆 | 三月二〇日 八月二〇日 | 伊佐沼町一 (伊佐沼) | 三島神社 | 四区 | 三一戸 | 〃 |
| 羽山様 | おこもりの行者が 参拝 | 〃 | 十一月二七日 | 古家(羽山) | 羽山神社 | 六区 | 三〇戸 | 行者が揃って参 拝 |

によってインド全土から国外へも広まり、一世紀頃から東アジアの諸方に及んで現在に至る。インドにおいて大乘・小乗の区分が生じたが、中国や日本では風土的特色を加味した種々の宗派が発生・発展した。さらに、日本仏教として定着してきた間に、彼岸の仏供養にことよせて、先祖まつりという我国固有の先祖まつりの信仰を採り入れたり、絵馬や民俗芸能の奉納など民俗信仰的な要素も加わって現在に至っている。

寺は仏像を安置し、奉仕する僧侶や尼僧が居住する所で、支配関係から本寺―末寺、本山―末山、境内地にある小寺は子院・支院・寺中・塔頭、住職を設けない兼務寺は通坊・通寺・支坊、本山の支坊は別院・御坊、信徒の宿泊所は宿院・宿坊などといひ、規模・創立の由緒から寺格・寺班によってそれぞれ格式等級を持つ。

『福島県宗教法人名簿』によると、二本松市における宗教法人としての寺は、曹洞宗五・真言宗豊山派三・新義真言宗一・浄土宗二・浄土真宗本願寺派二・天台宗八・天台寺門宗一・臨済宗妙心寺派二・真宗大谷派三・時宗二・本門仏立宗一・顕本法華宗二・修験宗一の計三三三寺である。



竹の花稻荷神社
初午参り
(上原)



オシメン様・採物 (原セオ木)



熊野様 (中町)

| 名称 | 目的 | 期日 | 場所 | 社寺名 | 組織 | 管理 | 内容 |
|-------------------------|----------------|-----------------------|-----------------|--------|------------------------|-----|--|
| 地蔵尊 (延命地藏尊) | 信仰 (病門除け) | 旧 三月二四日 (現在四月二四日) | 正法寺 | 地蔵尊 | (現在是不動 中里部落) 正友会 | 正法寺 | (現在は家内安全 火伏せ祈願) 二本松藩主畠山 侯から土地が与 えられ、応永二 年に龍泉寺三世 が建立した。 |
| 樽井観音 (本尊は如意輪 寺観音) | 信仰、親睦 | 旧 二月二日 (現在は二月三日) | 高越松ヶ作 | 樽井観音 | 高越松ヶ作 部落 | 正法寺 | 二本松藩主畠山 侯の姫守りの本 尊と伝えられて いる。 |
| 三宝荒神 | 信仰 (火伏せの神) | 旧 九月八日 | 槻の木 | 三宝荒神 | 正法寺氏子 | 氏子 | 主に鍛冶職人が 信仰したと伝え られている。 |
| 地藏尊 (延命地藏尊) | 信仰、家内安全、 親睦 | 旧 二月二四日 (現在は二月二四日) | 中里 | 地藏尊 | 中里部落 | 正法寺 | 正法寺住職の祈 禱により家内安 全五穀豊穣を祈 願する。 |
| 永田地区 | | 旧 四月一五日 旧 九月九日 | 県道岳温泉線 永田停留所 | 三渡神社 | 氏子総代 | 神職 | |
| 大日山 | | 旧 正月八日 | 永田道内 | 正覚寺大日山 | 団信徒 | 住職 | |
| 愛宕権現 | | 旧 七月二四日 | 愛宕山 | 愛宕堂 | 氏子総代 | 住職 | |

| | | | |
|--|------------------------------------|---------------|-------------------------|
| 杉田地区 | 権現様 (鬼渡神社とも いった) | 甘酒地藏様 | お諏訪様 (稻荷、熊野、 八幡神) |
| | 部落の信仰の的 年として明治一 四一二月五日建 立 | 越田方部産土神 | 〃 |
| | 五月二日 八十八夜 一月二三日 勤労感謝 | 旧三月二四日 | 〃 |
| | 館野三丁目 (高神) | 館野一丁目 (越田) | 〃 |
| 八幡神社 熊野〃 薬師様(寺) | 館野神社 | 地藏尊 | 諏訪神社 (稻荷、熊野、 八幡神) |
| 世話人五、 六名にて一 定期間一切 の世話をす | 館野在住者 全員 | 越田部落 | 〃 |
| | 総代三名及 び区管理 | 越田屋敷 | 〃 |
| 明治初期以前は 代々名主の産土 神であった。現 集会所付近にあ ったのを明治一 四年一二月五日 現地に祭る。 甘酒地藏尊以下 記するものは古 書(宝永二(一七 〇五)年調へ)に 記載されている 社寺であり、現 在残っていない のは明治末期に 移転した熊野神 社のみである。 | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|------|--|-------------|------|------|----------------------------|-------------|-----------------------|--------------|---------------------|--------------|-------|
| 原瀬地区 | お諏訪様 | 虚空蔵様 | 毘沙門様 | 太子堂 | おしめ様 | 庚申様 | 愛宕様 | 薬師様 | 大日様 | 産土様 | 愛宕様 |
| | 諏訪 | 川原 | 毘沙門堂 | 笠張 | 山神向一〇番地 才木五番地 | 初申 かのえさる | 六月二四日 | 四月八日 | 四月九日 九月九日 | 初午 九月二四日 | 九月二四日 |
| | 諏訪神社 | 虚空蔵 (福満) | 毘沙門堂 | 太子堂 | 神明大神 | 猿田彦 | 愛宕様 | 薬師如来 勢至菩薩 | 大日神社 | 愛宕様 | 諏訪 |
| | 原セ一円 | 部落(組) | 〃 | 組一四軒 | 部落 | 山口組他 | 山口組他 | 大畑一四軒 | 上の内屋敷 | 日照田有志 | 諏訪 |
| | 総代 | 遊佐伝 他二名 | 安田隆治 | 原瀬寅男 | 佐藤末治 | 佐藤末治 | 原瀬寅男 丹野富男 日下部利明 | 日下部利明 | 世話人二人 ずつの持回 り | 信者持回り 宿回り | 宿回り |
| | 天正二二年畠山 氏の建立とい う。 わに口があった が盗難により紛 失した。 正徳年号入りの わに口あり。 | | | | 昔はわに口があ ったが戦争で供 出した。 | | | | 祭りの前夜にお こもりをする。 | | |

| 名 称 | 目 的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|--------------|--------|-----------------|------------------|--------|---|---------------|--|
| 山の神様 | 館野全体 | 一月一七日 | 館野四丁目 (高神) | 山津見神社 | 館野全員 | 館野区 | 年(一四九四)九月九日白山原に建立とある。 寛延四(一七五二)年建立 |
| 箕輪地区 三渡神社 | | 四月三日 | 箕輪一丁目 (宮ノ脇) | 三渡神社 | 箕輪部落全 員が社総代 | 箕輪部落 | 明治初期の建立 であろう。 建立年代は不明 だが過去帳によ ると寛永のもの も見受けられ る。三五〇年前 位に焼けたので あろうか、焼け て再建したと言 い伝えられてい る。 |
| 法徳寺 | | 八月二二日 一二月二二日 | 箕輪二丁目 | 箕輪山法徳寺 | 箕輪・館野・ 原瀬等壇家 二八〇戸あ り、壇頭・ 総代・世話 人がいる。 | 任職及び壇 家の人々 | |
| 八王子様 | 神として信仰 | | 箕輪二丁目 (寺の裏山) | 八王子様 | 箕輪地区 五戸 | 箕輪内全員 | |
| 猫稻荷様 | 豊作 | | 箕輪一丁目 (桐木内屋敷) | 稻荷神社 | 桐木内部落 | 桐木内全員 | 猫がいなくなっ た場合、この神 様に祈願すると 帰ってくる。 |
| 熊野様 | | | 箕輪三丁目 (西ノ内屋敷) | 熊野神社 | 西ノ内部落 | 西ノ内全員 | |

| 名 称 | 目 的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|--------------------------------|--------------------|----------------|----------------|--|--------------|-------------|--|
| 春日様 | 本多紘宇家氏神 | 八月二七日 | 館野一丁目 (越田) | 春日神社 | 老僧内中島 部落 | 本多紘宇 | 安永四年建立 |
| 地藏様 (諏訪) | 老僧内中島方部 産土神 | | 館野二丁目 (老僧内) | 地藏尊 (諏訪様) | 老僧内中島 部落 | 老僧内中島 氏子 | |
| 明神様 (愛宕様) | 久木田方部産土 様 | 四月一日 | 館野三丁目 (戸ノ内) | 明神様 (愛宕様) | 久木部落 | 久木 | |
| お姫様 | 戸ノ内方部産土 様 | 二月二〇日 八月二〇日 | 館野四丁目 (日向) | お姫様 | 戸ノ内部落 | 戸ノ内 | |
| 観音様 (ほうそ神) | 坊屋敷その他方 部産土様 | | 館野四丁目 (日向) | 観音尊 (像は明和三 十七(一七六六)年 の作)(十一面 観音菩薩) | 坊屋敷その 他部落 | 他 | この観音像は奉 仏性十一面観音 菩薩で安達三十三 観音二十七番 札所である。また 経石が多数出土 する。 |
| 八幡様 | 日向方部産土様 | 八月一五日 | 館野四丁目 (日向) | 八幡神社 | 日向部落 | 日向 | |
| 稻荷様 | 下久保方部産土 神(五穀豊穣) | 初午及び一〇月 一〇日 | 館野三丁目 (戸ノ内) | 稻荷大明神 | 下久保部落 | 下久保 | |
| 熊野様 | 上久保方部産土 様 | | 館野四丁目 (熊野) | 熊野神社 | 上久保部落 | 現在なし | |
| 愛宕様 (白山権現 (天王様) (稻荷様) | 館野全体 | 七月二七日 | 館野二丁目(館 野) | 愛宕様 (稻荷様) (白山明神合詞 さる) | 館野全員 | 館野区 | 大音坊(安達家) 尊家、寛文五年 (一六六五)建立 とあり、また白 山明神は曆応三 |

| 名称 | 目的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|-------|-----------|-------|------|-------|---------|--------|---------------------------------|
| 稻 荷 様 | 五穀豊穣 | 二月初午 | 仲の作 | 氏 神 | 六戸 | 〃 | 応師が祈とう。 |
| 地 神 尊 | 〃 | 不明 | 仲の作 | 氏 神 | 四戸 | 〃 | 春、秋祭日に参拝 |
| 子守地蔵 | 子授・子育 | 不明 | 仲ノ作 | 氏 神 | 五戸 | 〃 | 山の神、お堂あり |
| 熊 野 様 | 家内安全・五穀豊穣 | 三月四日 | 太三郎内 | 氏 神 | 一八戸 | 〃 | 子授けの時に特に拝む、宮あり。吉祥院坊が祈とう。大平神楽あり。 |
| 八坂神社 | 〃 | 三月八日 | 小高内 | 南平石村社 | 一一〇戸 | 惣代、世話 | 神主祈とう、大平神楽、余興、直会 |
| 豊稔神社 | 〃 | 三月八日 | 三丁目 | 南平石村社 | 四五戸 | 惣代、世話 | 二本松神社神主祈とう、大平神楽、おこもり、直会、余興 |
| 子守地蔵 | 子授・子育 | 九月九日 | 小高内 | 氏 神 | 六戸 | 当番 | 煮物して酒盛 |
| 延命地蔵 | 長命 | 九月九日 | 田 町 | 氏 神 | 三戸 | 〃 | その都度参拝 |
| 熊野神社 | 五穀豊穣 | 三月四日 | 藤治内 | 氏 神 | 一八戸 | 世話人 | 大平神楽、直会 |
| 神明社 | 〃 | 四月一日 | 山伏坊 | 氏 神 | 三〇戸 | 〃 | 〃 |
| 吉祥院 | 家内安全・五穀豊穣 | 八十八夜 | 応平 | 吉祥院 | 有縁信者数 | 住職、世話人 | 大日大聖不動明、祈とう、酒盛 |
| 西荒井地区 | 〃 | 二月四日 | 殿 城 | 村 社 | 地区氏神全戸数 | 惣代人四名 | 春秋例祭、神楽 |
| 八坂神社 | 氏子長寿と五穀豊穣 | 六月一四日 | 殿 城 | 村 社 | 戸数 | 惣代人四名 | 春秋例祭、神楽 |

| 名称 | 目的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|----------|--------------|-----------------|------------------|-------|--------------|---------|--------------------------------|
| 平石地区八幡神社 | 五穀豊穣 家内安全 | 三月一五日 | 宮ノ脇 | 村 社 | 氏子三〇〇戸惣代世話人制 | 惣代五% | 春の祭礼には獅子神楽。秋はつつこを供える。 |
| 薬師如来 | 目の悪い人の信仰 | 四月八日 | 古内 | 氏 神 | 六名氏子 | 氏子全員 | おこもり、翌日顕法寺住職が祈とうする。 |
| 妙見尊 | 田・蚕倍增・家内安全 | 四月二二日 一〇月二二日 | 仏ヶ平 | 北平石氏神 | 北平石氏子約二〇〇戸 | 総代人、世話人 | 吉祥院坊の祈とう、大平獅子神楽、おこもり、酒盛り |
| 地 神 様 | 五穀豊穣 | 九月九日 | 中条(トロウミ)石神(トロウミ) | 氏 神 | 九戸氏子四戸 | 廻り番役 | おこもり、直会 |
| ホウソウ神 | 病気神(ホウソウ) | 不明 | 高田・杉内 | 氏 神 | 一〇戸 | 〃 | 八幡様神主による祈とう。 |
| 子守地蔵 | 子安尊 | 不明 | 沖の権現宿 | 氏 神 | 四戸 | 〃 | 不明 |
| 権現様 | 五穀豊穣 | 九月九日 | 栗ノ須 | 氏 神 | 六戸 | 〃 | オサガを持参し拜む。戦前は参拝多かった。旧地より現地に移す。 |
| 粟ノ神社 | 五穀豊穣とハシカ神 | 九月九日 | 栗ノ須 | 氏 神 | 六戸 | 〃 | 地蔵堂にあり、光伝寺法師と秀 |
| 將軍地蔵 | 子授・子育・身代地蔵 | 四月一五日 一〇月五日 | 〃 | 氏 神 | 八戸 | 〃 | 〃 |

| 祭神・本尊 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|-------------|-------|------|-------|-----------------|------|---|
| 鈴石地区 菩提寺 | 五月二日 | 寺の前 | 観音寺 | 壇家三四〇戸総代 評議員 | 住職 | 八〇〇年前に建立 菩提寺 |
| 般若経 | 四月二〇日 | 大門 | 大王院 | 鈴石区民 | 鈴石区民 | 九月九日、四月二〇日の祭り には鈴石全戸がお参りする。 永徳二年建立。 |
| 大碓命 | 九月九日 | 井戸ノ上 | 鈴石神社 | 渡辺儀右衛門外一三八 | 鈴石区民 | 十二神楽も奉納される 元徳元年 |
| 壇安姫命 | 〃 | 岩ノ作 | 地神社 | 渡辺太惣治外三 | 氏子 | |

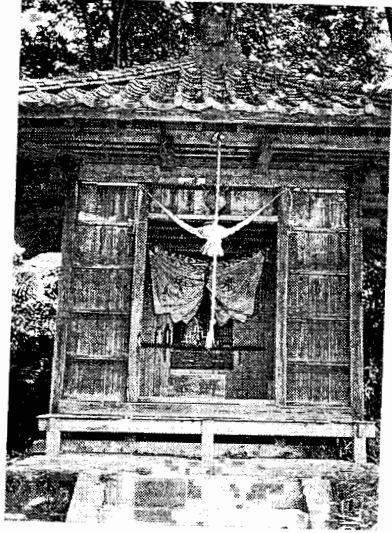
| 羽山籠り | 作 神 | 一〇月一七日 | 田町(山)地蔵堂 | 羽山様 | 小組一〇名 男性 | なし |
|------|-----------------|--------|----------|-----|-------------|---|
| 十三参り | 子供の成人祝と 良縁念願 | | | | | 前日の一六日夜 にモチ米一升持 参し附近の小川 の水で体を清め 地蔵堂でお籠り をする。翌朝早 く新しいワラジ を履き、田町の 羽山様に唱え事 をして参拜、そ の後酒盛と余興 で過す。 |

| 名 称 | 目 的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|------|--------------|-----------------|-----------------|--------------|-----------------|-------------|---|
| 明神様 | 〃 | 三月二五日 九月一五日 | 立石 | 元村社 | 〃 | 寺世話人四名 | 奉納、氏子の長 寿と五穀豊穣祈 禱(神楽) |
| 吉祥寺 | 葬式、仏行事 | 葬式日・盆 | 古屋場 | 屋敷寺 (西荒井) | 〃 | 〃 | ツッコ、正月春 に氏子が自参参 拜 |
| アタゴ様 | 頭痛みなおしの 神 | なし | 志戸内 (木ノ根元) | アタゴ様 | なし | 松本正寿 | 葬式寺としての 役目 |
| 耳ダレ神 | 耳痛みなおしの 神 | 〃 | 与中内 | 道祖神 | 〃 | なし | 春・秋に紙幣束 を供え、ご飯を 供える。 |
| 十九夜様 | 嫁の安産 | 〃 | 仙中内 (池のへり) | 安産の神 | 〃 | 〃 | サンテラに木盃 を付けて供え る。 |
| コジラ講 | 蚕の豊作 | 二月初午 | 廻り宿 (一〇年に一度) | 蚕神様 | 主婦一〇名 (各戸一名) | 宿の主婦中 心を | 嫁たちが集まっ て甘酒を飲む。 主婦が集り赤飯 を煮て供える。 |
| 山の神講 | 無難に作物豊穣 | 正月一七日 一〇月一七日 | 〃 | 明神様境内 | 男一〇名 | 宿主が中心 | 山津見神社の掛 軸を掛け、餅一 升掲ぎ酒盛をす る。女性の手伝 い禁ずる。 |
| 二十三夜 | 養蚕豊作 | 一〇月二三日 | 仙中内 | 観音様 | 女一〇名 | なし | 甘酒を飲み、月 を拝む。 |

| 祭神・本尊 | 目 的 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|---------------|---|---|-----------------------------|-----------------|-----------------------------------|---|--|
| 大平地区 大山津見命 | 大平村一円鎮守 護 | 祭典 毎年一〇月八日 | 矢ノ戸地内 | 三島神社 (旧村社) | 大平村在住 者全員氏子 (戦後日蓮宗 信者脱退) | 氏子中より 惣代人選出 管理に当る。 | 社有農地も解放と なり、維持費は氏 子の拠出による。 祭典日には十二神 楽を奉納参詣人多 数あり。 |
| 本尊阿弥陀如来 | 仏教の趣旨を宣 伝、布教につと め、社会の浄化 に貢献する。 | 毎年三月一〇日 信徒総会を開き 予算決算を承認、 計画を定める。 | 大平供中 | 真弓山観世寺 (天台宗) | 壇信徒数 一四〇名 | 信徒総代人 七名を選出 し、住職と 共に管理に 当る。 | 毎年一二月一〇日 宗祖伝教大師法要 を行い、一〇月一 〇日には先祖供養 虫供養を行う。 |
| 本尊は阿弥陀如 来 | 那智観世音の分 霊部落鎮護の仏 と信じて崇敬し ている。 | 毎年四月一七日 | 安達ヶ原 | 白真弓観世音 | 大平西部の 住民二四〇 名が氏子 | 信徒惣代人 八名を選出 し、観世寺 住職と共に 管理する。 | 鬼婆さん退治と由 緒ある観音様で名 高く、参詣客も多 い。 |
| 大平遠山 | | | 龍頭山長命寺 (天台宗) (境内に薬師堂) | 壇信徒 一五〇名 | | | |

| | | | | | | | |
|-------|------|-----|-----|-----------|--------------|------|--|
| 薬師如来 | 九月九日 | 観音堂 | 観音堂 | 村松清之 渡辺勘一 | 村松清之 渡辺勘一 | 嘉吉三年 | |
| 四月二一日 | | 畑中 | 薬師堂 | | | | |

| 祭神・本尊 | 期 日 | 場 所 | 社 寺 名 | 組 織 | 管 理 | 内 容 |
|-------|-------|------|-------|------------|-------|------|
| 中筒男命 | 四月二〇日 | 大門 | 住吉神社 | 橋本善左衛門外五 | 〃 | 明応二年 |
| 稻倉魂 | 九月九日 | 別当内 | 稻荷神社 | 渡辺源右衛門外三 | 〃 | 文亀三年 |
| 月読命 | 〃 | 井戸ノ上 | 疤瘡神 | 渡辺儀右衛門外一三八 | 鈴石区民 | 永禄七年 |
| 大黒主命 | 〃 | 栗ノ木内 | 大黒神社 | 渡辺勘之丞外三 | 氏子 | 永禄二年 |
| 埴安姫命 | 〃 | 竹ノ花 | 地神社 | 斉藤幸十郎外五 | 〃 | 永禄五年 |
| 水雲命 | 〃 | 神ノ前 | 三渡神社 | 鈴石源兵衛外五 | 〃 | 慶長二年 |
| 伊邪那岐命 | 〃 | 熊ノ入 | 熊野神社 | 渡辺介右衛門外八 | 〃 | 元和元年 |
| 伊邪那美命 | 〃 | 明珍前 | 神明社 | 渡辺儀右衛門外一六 | 〃 | 寛文三年 |
| 大日靈貴命 | 〃 | 金井神 | 荒神社 | 内藤又十郎外七 | 〃 | 延宝六年 |
| 金山比古命 | 〃 | 箕坊内 | 八幡神社 | 前森重次郎衛門外六 | 〃 | 正徳元年 |
| 譽田和氣命 | 〃 | 引目内 | 熊野神社 | 渡辺法作外四 | 〃 | 正徳二年 |
| 伊邪那岐命 | 〃 | 西勝内 | 稻荷神社 | 菅野介左衛門外六 | 〃 | 享保元年 |
| 伊邪那美命 | 〃 | 五間目田 | 八幡神社 | 鈴木弾治衛門外六 | 〃 | 不詳 |
| 稻倉魂命 | 〃 | 宮ノ脇 | 神明社 | 大内兵右衛門外五 | 〃 | 不詳 |
| 大日靈貴命 | 〃 | 天田 | 八坂神社 | 伊藤辰之助外二一 | 〃 | 不詳 |
| 素盞鳴命 | 〃 | 養堂屋敷 | 稻荷神社 | 渡辺平治外二 | 〃 | 不詳 |
| 稻倉魂命 | 〃 | 寺ノ前 | 毘沙門堂 | 〃 | 観音寺住職 | |
| 毘沙門天 | 正月の初寅 | 寺ノ前 | 観音堂 | 鈴石 | 〃 | |
| 四月二〇日 | | | | | | |



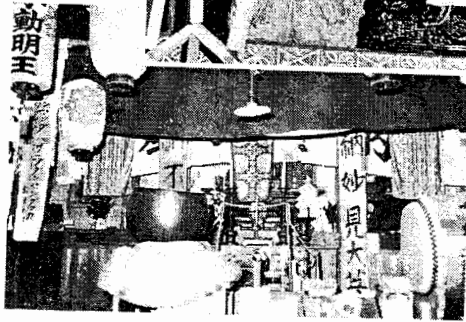
甘酒地藏様 (館野・地藏尊)



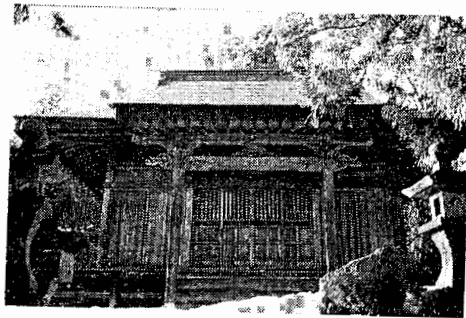
薬師如来 (鈴石・薬師堂)



毘沙門様 (原瀬・毘沙門堂)



吉祥院 (平石)



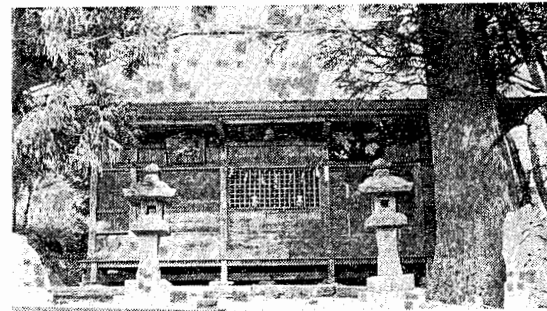
八坂神社 (平石・小高内)



塩沢不動尊 (木ノ根坂)



八幡様 (塩沢・八幡神社)



三渡神社 (永田)

| | |
|-----------------|---------------------|
| | 神本・祭尊 |
| | 目的 |
| | 期日 |
| | 場所 |
| 大平島寺 (阿武隈沿い) | 社寺名 あり 島寺毘沙門堂 |
| | 組織 |
| | 管理 |
| 慶長七年建立 | 内容 |

二 本 松 市

| | |
|---------|-------|
| 教 派 別 | 法 人 数 |
| 神 社 本 庁 | 56 |
| 金 光 教 | 1 |

| 包括団体 | 名 称 | 代 表 役 員 | 所 在 地 | 認 証 番 号 | 認 年 月 日 |
|------|--------|---------|------------|---------|----------------|
| 神社本庁 | 愛宕神社 | 穂積豊秋 | 大平字作155 | 635 | S 28. 7. 29 |
| " | 稲荷神社 | " | 羽石165 | 632 | 28. 7. 29 |
| " | 稲荷神社 | " | 亀谷1丁目77 | 638 | 28. 7. 29 |
| " | 稲荷神社 | " | 根崎1丁目281-2 | 2,726 | 29. 2. 2 |
| " | 稲荷神社 | " | 大字永田字越戸6 | 3,783 | 29. 2. 23 |
| " | 稲荷神社 | " | 大平字外内折167 | 3,788 | 29. 2. 23 |
| " | 稲荷神社 | " | 大平字浅川290 | 3,792 | 29. 2. 23 |
| " | 稲荷神社 | " | 大平字木ノ崎13 | 3,790 | 29. 2. 23 |
| " | 稲荷神社 | 松本正 | 竹田2丁目58-1 | 3,787 | 29. 2. 23 |
| " | 隠里神社 | 穂積豊秋 | 穂里134 | 2,731 | 29. 2. 2 |
| " | 鹿島神社 | " | 成田字1丁目118 | 3,785 | 29. 2. 23 |
| " | 唐木神社 | " | 北杉田字長者宮2 | 1,121 | 28. 10. 8 |
| " | 貴船神社 | " | 成田字1丁目548 | 3,784 | 29. 2. 23 |
| " | 熊野神社 | " | 成田字柵平1 | 888 | 28. 9. 2 |
| " | 熊野神社 | " | 大平字橋本48 | 3,781 | 29. 2. 23 |
| " | 熊野神社 | " | 安達ヶ原5丁目10 | 3,791 | 29. 2. 23 |
| " | 熊野八幡神社 | " | 上竹1丁目361 | 630 | 28. 7. 29 |
| " | 五柱神社 | " | 市海道109 | 2,730 | 29. 2. 2 |
| " | 五柱神社 | 安藤信 | 字五社17 | 1,125 | 28. 10. 8 |
| " | 五社稲荷神社 | 穂積豊秋 | 竹田1丁目162 | 898 | 28. 9. 2 |
| " | 養神社 | " | 亀谷2丁目200 | 894 | 28. 9. 2 |
| " | 塩沢神社 | 滝本京司 | 上原53 | 7 | 27. 6. 17 |
| " | 神明神社 | 安藤信 | 平石字上本木11 | 4,737 | 29. 4. 16 |
| " | 神明社 | 松本正 | 根崎2丁目83 | 882 | 28. 9. 2 |
| " | 神明石神社 | 穂積豊秋 | 大平字神明石127 | 889 | 28. 9. 2 |
| " | 菅原神社 | " | 郭内1丁目75-1 | 3,789 | 29. 2. 23 |
| " | 菅田神社 | " | 南杉田字十神31 | 1,907 | 28. 12. 5 |
| " | 鈴石神社 | 伊藤正勝 | 鈴石字井戸ノ上1 | 1,133 | 28. 10. 12 |
| " | 諏訪神社 | 穂積豊秋 | 杉田駄子内154 | 1,124 | 28. 10. 8 |
| " | 諏訪神社 | " | 原瀬字諏訪175 | 3,786 | 29. 2. 23 |
| " | 館野神社 | " | 館野字高神76 | 4,300 | 29. 3. 8 |

58 法 人

| | |
|-------|-------|
| 教 派 別 | 法 人 数 |
| 三 五 教 | 1 |
| 計 | 58 |

| 包括団体 | 名 称 | 代 表 役 員 | 所 在 地 | 認 証 番 号 | 認 年 月 日 |
|------|---------------|---------|-----------|---------|---------------|
| 神社本庁 | 積内神社 | 穂積豊秋 | 永田字積内51 | 899 | S 28. 9. 2 |
| " | 二本松神社 | 安藤俊夫 | 本町1丁目61 | 2,735 | 29. 2. 2 |
| " | 五柱神社 | 穂積豊秋 | 南杉田仲之内8 | 1,122 | 28. 10. 8 |
| " | 三渡神社 | " | 高越屋戸浦75-1 | 1,906 | 28. 12. 5 |
| " | 羽黒神社 | " | 大字高越字寺町57 | 3,937 | 29. 2. 27 |
| " | 羽山神社 | " | 大平字羽山441 | 891 | 28. 9. 2 |
| " | 八幡神社 | " | 南杉田字宮前42 | 4,299 | 29. 3. 8 |
| " | 八幡神社 | " | 岩崎46 | 1,123 | 28. 10. 8 |
| " | 八幡神社 | " | 蓬田259 | 890 | 28. 9. 2 |
| " | 八幡神社 | " | 若宮1丁目255 | 639 | 28. 7. 29 |
| " | 八幡神社 | 安藤信 | 平石字宮脇88 | 1,127 | 28. 10. 8 |
| " | 布留杉神社 | 穂積豊秋 | 村社前49 | 1,905 | 28. 12. 5 |
| " | 豊稔神社 | 安藤信 | 平石字二又36 | 4,738 | 29. 4. 16 |
| " | 三島神社 | 穂積豊秋 | 木藤次郎内83 | 897 | 28. 9. 2 |
| " | 三島神社 | " | 矢ノ戸261 | 3,927 | 29. 2. 26 |
| " | 三渡神社 | " | 永田字積内117 | 886 | 28. 9. 2 |
| " | 三渡神社 | " | 箕輪字宮脇1 | 3,782 | 29. 2. 23 |
| " | 八坂神社 | 安藤信 | 松岡73 | 1,158 | 28. 10. 26 |
| " | 八坂神社 | " | 西荒井字七合22 | 1,126 | 28. 10. 8 |
| " | 八坂神社 | " | 平石字八坂山2 | 4,739 | 29. 4. 16 |
| " | 八坂神社 | 穂積豊秋 | 冠木97-1 | 892 | 28. 9. 2 |
| " | 八坂神社 | " | 永田字上四斗内12 | 631 | 28. 7. 29 |
| " | 八剣神社 | " | 大平字丑子内95 | 887 | 28. 9. 2 |
| " | 雷神社 | " | 茶園1丁目34 | 633 | 28. 7. 29 |
| " | 雷神社 | " | 安達ヶ原7丁目57 | 885 | 28. 9. 2 |
| 金光教 | 金光教会 二本松教会 | 樋口美栄子 | 根崎町1丁目159 | 1,700 | 28. 11. 25 |
| 三五教 | 三福島主教会 | 吉田和助 | 郭内2丁目8-4 | 4,803 | 32. 3. 19 |

二 本 松 市

| 宗 派 別 | 法 人 数 |
|-----------------|-------|
| 曹 洞 宗 | 5 |
| 真 言 宗 豊 山 派 | 3 |
| 新 義 真 言 宗 | 1 |
| 浄 土 宗 | 2 |
| 浄 土 真 宗 本 願 寺 派 | 2 |
| 天 台 宗 | 8 |
| 天 台 寺 門 宗 | 1 |

| 包 括 团 体 | 名 称 | 代 表 役 員 | 所 在 地 | 認 証 番 号 | 認 年 月 日 |
|-----------------|---------|---------|---------------|---------|------------|
| 曹 洞 宗 | 光 現 寺 | 鈴木 一雄 | 亀谷 2 丁目 186 | 2,888 | 29. 2. 6 |
| " | 少 林 寺 | 渡辺 道雄 | 若宮 1 丁目 174 | 294 | 28. 6. 2 |
| " | 大 隣 寺 | 高松 祖堂 | 成田 1 丁目 532 | 293 | 28. 6. 2 |
| " | 龍 泉 寺 | 武田 喚三 | 成田字西谷 29 | 2,873 | 29. 2. 5 |
| " | 正 法 寺 | 矢吹 道裕 | 正法寺町 29 | 945 | 28. 10. 8 |
| 真 言 宗 豊 山 派 | 正 覺 寺 | 内山 信 | 永田字道内 97 | 2,884 | 29. 2. 6 |
| " | 長 泉 寺 | 平田 英倫 | 根崎 1 丁目 251-1 | 2,868 | 29. 2. 4 |
| " | 遍 照 尊 寺 | 菅野 信然 | 根崎 2 丁目 86 | 3,670 | 29. 2. 23 |
| 新 義 真 言 宗 | 吉 祥 寺 | 五十嵐 昌司 | 錦町 2 丁目 381 | 3,675 | 29. 2. 23 |
| 浄 土 宗 | 善 性 寺 | 漆間 瑞雄 | 根崎 1 丁目 249 | 3,666 | 29. 2. 23 |
| " | 台 運 寺 | 大内 淳兮 | 竹田 2 丁目 142 | 205 | 27. 10. 24 |
| 浄 土 真 宗 本 願 寺 派 | 顕 法 寺 | 高橋 義弘 | 竹田 1 丁目 198 | 311 | 28. 6. 5 |
| " | 善 性 寺 | 岡部 玄 | 中山田 80 | 4,533 | 29. 3. 18 |
| 天 台 宗 | 観 音 寺 | 中村 義応 | 五月町 3-65 | 3,687 | 29. 2. 23 |
| " | 観 世 寺 | 中村 智明 | 安達ヶ原 5 丁目 1 | 2,886 | 29. 2. 6 |
| " | 鏡 石 寺 | 川名 勝頭 | 亀谷 1 丁目 110 | 564 | 28. 9. 8 |
| " | 光 恩 寺 | 梅津 明覚 | 北杉田字滝ノ尻 2 | 3,686 | 29. 2. 23 |
| " | 善 応 寺 | 佐藤 頭照 | 北杉田字舟形石 74 | 179 | 27. 9. 18 |
| " | 長 命 寺 | 林 俊堯 | 遠山 132 | 2,887 | 29. 2. 6 |

33 法 人

| 宗 派 別 | 法 人 数 |
|---------------|-------|
| 臨 濟 宗 妙 心 寺 派 | 2 |
| 真 宗 大 谷 派 | 3 |
| 時 宗 | 2 |
| 本 門 仏 立 宗 | 1 |
| 顕 本 法 華 宗 | 2 |
| 修 験 宗 | 1 |
| 計 | 33 |

| 包 括 团 体 | 名 称 | 代 表 役 員 | 所 在 地 | 認 証 番 号 | 認 年 月 日 |
|---------------|----------|---------|---------------|---------|------------|
| 天 台 宗 | 宝 泉 院 | 中村 俊雄 | 塩沢字細野 1 | 2,880 | 29. 2. 5 |
| " | 法 德 寺 | 高橋 清孝 | 箕輪仲 2 丁目 115 | 2,876 | 29. 2. 5 |
| 天 台 寺 門 宗 | 吉 祥 院 | 茅原 秀栄 | 沖 1 丁目 411 | 3,697 | 29. 2. 23 |
| 臨 濟 宗 妙 心 寺 派 | 法 輪 寺 | 千坂 精一 | 松岡 36 | 3,689 | 29. 2. 23 |
| " | 松 岡 寺 | " | 松岡 77 | 4,683 | 29. 4. 10 |
| 真 宗 大 谷 派 | 光 覚 寺 | 白江 成 | 亀谷 1 丁目 45 | 291 | 28. 5. 28 |
| " | 真 行 寺 | 佐々木昇一 | 竹田 1 丁目 192 | 3,679 | 29. 2. 23 |
| " | 正 慶 寺 | 古渡 義秀 | 竹田 2 丁目 136 | 2,881 | 29. 2. 6 |
| 時 宗 | 香 泉 寺 | 岩井 隆元 | 若宮 1 丁目 243 | 3,693 | 29. 2. 23 |
| " | 称 念 寺 | " | 本町 1 丁目 154 | 3,692 | 29. 2. 23 |
| 本 門 仏 立 宗 | 岳 泉 寺 | 柏森 清緑 | 永田字櫛平 1 | 269 | 27. 12. 26 |
| 顕 本 法 華 宗 | 本 久 寺 | 内海 勇叔 | 根崎 1 丁目 267-2 | 1,269 | 28. 10. 27 |
| " | 蓮 華 寺 | 中島 元道 | 亀谷 1 丁目 3 | 3,694 | 29. 2. 23 |
| 修 験 宗 | 吉 祥 院 | 高島 元 | 正法寺町 115 | 931 | 28. 9. 11 |
| 天 理 教 | 天理教安積分教会 | 三保 好夫 | 市海道 80 | 43 | 27. 7. 15 |
| " | " 石井分教会 | 橋本 四一 | 平石町 163 | 50 | 27. 7. 15 |
| " | " 二本松分教会 | 安齐 清六 | 根崎 2 丁目 35 | 35 | 27. 7. 9 |
| " | " 安達分教会 | 荒井 益昭 | 若宮 1 丁目 86 | 32 | 27. 7. 9 |

総 教 法

| 系統別 教宗派別 | 市 郡 別 | | | | | | | | | | 市 部 計 |
|-------------|-------------|-----------------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|-------------|------------------|------------------|-------------|
| | 市 | | | | | 部 | | | | | |
| | 福 島 市 | 会 津 若 松 市 | 郡 山 市 | 白 河 市 | 原 町 市 | 須 賀 川 市 | 喜 多 方 市 | 相 馬 市 | 二 本 松 市 | い わ き 市 | |
| 神 道 系 | 224 | 120 | 195 | 50 | 47 | 53 | 94 | 61 | 58 | 330 | 1,232 |
| 仏 教 系 | 118 | 112 | 101 | 29 | 12 | 44 | 48 | 25 | 33 | 203 | 725 |
| キ リ ス ト 教 系 | 9 | 5 | 5 | 4 | 1 | 4 | 3 | 1 | 2 | 9 | 43 |
| 諸 教 系 | 18 | 15 | 15 | 2 | 3 | 2 | 8 | 2 | 4 | 22 | 91 |
| 合 計 | 369 | 252 | 316 | 85 | 63 | 103 | 153 | 89 | 97 | 564 | 2,091 |

| 系統別 教宗派別 | 市 郡 別 | | | | | | | | | | 市 部 計 |
|---------------|-------------|-----------------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|-------------|------------------|------------------|-------------|
| | 市 | | | | | 部 | | | | | |
| | 福 島 市 | 会 津 若 松 市 | 郡 山 市 | 白 河 市 | 原 町 市 | 須 賀 川 市 | 喜 多 方 市 | 相 馬 市 | 二 本 松 市 | い わ き 市 | |
| (神道系) 神 社 本 庁 | 222 | 116 | 191 | 47 | 40 | 51 | 88 | 55 | 56 | 325 | 1,191 |
| 金 光 教 | 1 | 2 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | 7 |
| 出 羽 大 社 | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 神 道 大 教 | | | 1 | | 1 | 2 | | | | 2 | 7 |
| 神 禊 教 | | 1 | | | | 2 | | | | | 3 |
| 御 実 行 教 | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 |
| 扶 桑 教 | | | | 1 | | | | | | 1 | 2 |
| 心 陸 教 | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| 神 理 教 | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| 大 和 教 | | | | 1 | | | | 2 | | | 3 |
| 大 道 成 教 | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| 大 道 五 成 教 | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 大 三 道 修 派 | | | | | | | | | 1 | | 1 |
| 神 道 誠 光 教 | | | | | | | | | | | 1 |
| 大 信 和 教 | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 道 系 単 立 | | 1 | | | 4 | 1 | 2 | 2 | | | 10 |
| 神 道 系 の 計 | 224 | 120 | 195 | 50 | 47 | 53 | 94 | 61 | 58 | 330 | 1,232 |

人 総 括 表

昭和53年1月1現在

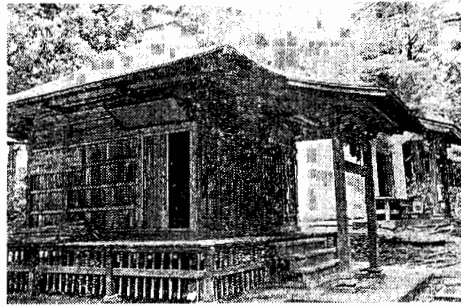
| 郡 | 部 | | | | | | | | | | 郡 部 計 | 総 計 | | | |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|------------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|------------------|-------------|
| | 伊 達 郡 | 安 達 郡 | 岩 瀬 郡 | 石 川 郡 | 田 村 郡 | 西 白 河 郡 | 東 白 川 郡 | 北 会 津 郡 | 耶 麻 郡 | 河 沼 郡 | | | 大 沼 郡 | 南 会 津 郡 | 双 葉 郡 |
| 228 | 163 | 46 | 52 | 187 | 87 | 125 | 25 | 305 | 142 | 107 | 204 | 112 | 98 | 1,879 | 3,111 |
| 125 | 53 | 26 | 32 | 81 | 36 | 43 | 19 | 107 | 91 | 85 | 39 | 42 | 27 | 806 | 1,531 |
| 4 | 1 | — | — | 2 | 1 | 1 | — | 4 | 1 | 1 | — | 1 | 2 | 18 | 61 |
| 7 | 5 | — | 1 | 7 | 1 | 2 | — | 3 | 2 | 2 | 4 | 6 | 4 | 44 | 135 |
| 364 | 222 | 72 | 85 | 277 | 125 | 171 | 44 | 417 | 236 | 195 | 247 | 161 | 131 | 2,747 | 4,838 |

| 郡 | 部 | | | | | | | | | | 郡 部 計 | 総 計 | | | |
|-----|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|------------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|------------------|-------------|
| | 伊 達 郡 | 安 達 郡 | 岩 瀬 郡 | 石 川 郡 | 田 村 郡 | 西 白 河 郡 | 東 白 川 郡 | 北 会 津 郡 | 耶 麻 郡 | 河 沼 郡 | | | 大 沼 郡 | 南 会 津 郡 | 双 葉 郡 |
| 223 | 163 | 46 | 52 | 185 | 87 | 124 | 25 | 299 | 141 | 101 | 204 | 108 | 91 | 1,849 | 3,040 |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 9 |
| | | | | | | | | | 2 | 1 | | | 1 | 6 | 13 |
| 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 3 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | 2 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 | 1 |
| | | | | | | | | | | 6 | | | | 5 | 12 |
| | | | | | | | | | | | | | 5 | 12 | 22 |
| 228 | 163 | 46 | 52 | 187 | 87 | 125 | 25 | 303 | 142 | 107 | 204 | 112 | 98 | 1,879 | 3,111 |

| 系統別 教宗派別 | 市郡別 | | 市 郡 | | | | | | | | | | 市 部 計 | | | | | |
|-------------|-------------|-----------------------|-------------|-------------|-------------|------------------|------------------|-------------|------------------|------------------|--|--|-------------|--|--|--|--|-----|
| | 市 | | 郡 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 福 島 市 | 会 津 若 松 市 | 郡 山 市 | 白 河 市 | 原 町 市 | 須 賀 川 市 | 喜 多 方 市 | 相 馬 市 | 二 本 松 市 | い わ き 市 | | | | | | | | |
| (仏教系) 曹 洞 宗 | 46 | 25 | 31 | 8 | 3 | 7 | 19 | 5 | 5 | 36 | | | | | | | | 185 |
| 真言宗豊山派 | 8 | 21 | 25 | 7 | 2 | | 8 | 4 | 3 | | | | | | | | | 78 |
| 真言宗智山派 | 2 | 2 | 2 | 2 | | 4 | 2 | | | | | | | | | | | 91 |
| 真言宗醍醐派 | 4 | 6 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | — |
| 真言宗室生寺派 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 16 |
| 真言律宗 | | | | | | | | | | 6 | | | | | | | | 6 |
| 新義真言宗 | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 3 |
| 高野山真言宗 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 8 |
| 浄土宗本派 | 6 | 13 | 2 | 2 | | 1 | 12 | 1 | 2 | 36 | | | | | | | | 75 |
| 浄土宗本願寺派 | 7 | 10 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | | | | | | | | 1 |
| 天台宗 | 9 | 8 | 16 | 2 | 1 | 19 | 2 | 1 | 8 | 1 | | | | | | | | 25 |
| 天台寺門宗 | 6 | | 1 | | | 1 | | | 8 | 1 | | | | | | | | 67 |
| 臨済宗妙心寺派 | 9 | 6 | 6 | 3 | 1 | | 1 | | 8 | 1 | | | | | | | | 17 |
| 臨済宗建長寺派 | | | | | | | 1 | | 2 | 19 | | | | | | | | 47 |
| 臨済宗円覚寺派 | | | 1 | | | 3 | | | | | | | | | | | | — |
| 真宗大谷派 | 1 | 9 | 1 | 1 | 1 | | | 2 | 3 | 4 | | | | | | | | 4 |
| 真宗高田派 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 22 |
| 日蓮宗 | 3 | 5 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 日蓮本宗 | 4 | | 1 | 1 | 1 | 2 | | 1 | | 8 | | | | | | | | 22 |
| 日蓮正宗 | 1 | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | 5 |
| 日蓮法華宗 | 4 | | | 1 | 2 | 1 | | | 4 | | | | | | | | | 11 |
| 時宗 | 1 | 4 | | | 1 | 1 | | | | 4 | | | | | | | | 4 |
| 本門仏立宗 | 2 | 1 | 2 | | | 1 | | 2 | | | | | | | | | | 10 |
| 法華宗本門流 | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 6 |
| 中山妙宗 | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 2 |
| 修験宗 | 1 | | | | | 2 | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 黄檗宗 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 6 |
| 在家日蓮宗浄風会 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 原始真宗 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| 顕本法華宗 | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | — |
| 単立 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 4 |
| 仏教系の計 | 118 | 112 | 101 | 29 | 12 | 44 | 48 | 25 | 33 | 203 | | | | | | | | 725 |

| 伊達郡 | 安達郡 | 岩瀬郡 | 石川郡 | 田村郡 | 西白河郡 | 東白川郡 | 北会津郡 | 耶麻郡 | 河沼郡 | 部 | | | | | 郡部計 | 総計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-------|----|
| | | | | | | | | | | 大沼郡 | 南会津郡 | 双葉郡 | 相馬郡 | | | |
| 50 | 14 | 8 | 14 | 37 | 16 | 13 | 4 | 46 | 29 | 32 | 8 | 5 | 7 | 283 | 468 | |
| 19 | 8 | | | 6 | 13 | | 10 | 29 | 20 | 9 | 12 | 11 | 6 | 143 | 221 | |
| | | 8 | 10 | 5 | 2 | 18 | 2 | 1 | 11 | | 1 | 5 | | 63 | 154 | |
| | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | 1 | |
| 2 | | | | 2 | | | | 5 | 1 | 5 | | 3 | | 18 | 34 | |
| | | | | | | | | | | | | | | — | 6 | |
| | 6 | 1 | 1 | 2 | | | | | | | | | | 10 | 13 | |
| | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 9 | |
| 8 | 4 | | | 9 | | 3 | 3 | 18 | 18 | 10 | 2 | 7 | 3 | 85 | 160 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| 5 | 1 | | | 2 | | | | 2 | 1 | 2 | 3 | 4 | 4 | 24 | 49 | |
| 14 | 13 | 5 | 1 | 1 | 4 | | | 1 | 2 | 23 | 1 | 1 | 3 | 69 | 136 | |
| 2 | | | | 5 | | | | | | | 1 | | 2 | 10 | 27 | |
| 4 | 1 | | 3 | 7 | | 5 | | 3 | 5 | 2 | | | | 30 | 77 | |
| | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | | 2 | | | | | | | | | | | | 2 | 6 | |
| 5 | | 1 | | | | 2 | | | 1 | | 1 | 3 | 1 | 14 | 36 | |
| | | | | | | | | | | | 8 | | | 8 | 9 | |
| 3 | | | 2 | 1 | | 1 | | | 1 | 1 | | 2 | | 11 | 33 | |
| 4 | | | | | | | | | | | | | | 4 | 9 | |
| | | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | 4 | 15 | |
| 3 | | | | | | | | | | | | | | 3 | 7 | |
| 1 | | | | 1 | | | | | | 1 | 2 | | | 5 | 15 | |
| | | | | | | | | | | | | | | — | 6 | |
| 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 | 4 | |
| | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | 2 | |
| | | 3 | | | | | | | | | | | | 3 | 9 | |
| | | | | | | | | | | | | | | — | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | — | 1 | |
| | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | |
| 4 | 1 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 5 | |
| | | | | | | | | | | | | | | 9 | 15 | |
| 125 | 53 | 26 | 32 | 81 | 36 | 43 | 19 | 107 | 91 | 85 | 39 | 42 | 27 | 806 | 1,531 | |

| 種 類 | 名 称 | 参加の範囲と人数 | 内 容 | 経 路 | 場 所 | 期 日 | 期 間 | 装 束 | 持 物 |
|-------|---------------------|--------------------|--------------------------------|--|----------|-----|--------|------------|------|
| 二本松地区 | 安達三十三観音めぐり | | 安達郡内の寺院で、観世音をまわつてるところを回って祈願する。 | 当調査地区(旧二本松町)内の札所 一七番聖観世音(根崎・遍照尊寺) 一八番千手観世音(亀谷) 一九番聖観世音(亀谷・光現寺) 二〇番(本町・称念寺) 二一番千手観音(松岡・松岡寺) 二四番聖観世音(松岡・法輪寺) | 宿屋とまり | 二月 | 八日～十五日 | 袷、羽織、二重、下駄 | 風呂敷袋 |
| 塩沢地区 | 伊勢参り お山参り(おくまいり) | 屋敷一〇人、一五人(他の団体と組む) | 伊勢参宮の後、四国、中国近畿方面遊覧 | 伊勢―山陽―四国、山陰―近畿 | 宿房 宿屋 | 二月 | 三日～四日 | ゆかた、わらじ | 風呂敷 |
| | | | 出羽三山を巡拝 | 月山―湯殿山―羽黒山 | 宿房 宿屋 | 秋 | 三日～四日 | ゆかた、わらじ | 風呂敷 |



安達三十三観音・22番札所 (龍泉寺観音堂)

第七節 参 拜 ・ 巡 礼

ここでいう参拝は、遠方の社寺にお参りすることで、個人で行く場合と講中を結んで代表が代参する場合とがあった。当地では、奥参りと称する出羽三山参り・えいで参りの飯豊山参り・古峯が原参りの古峯神社参り・山の神参りの山津見神社参り・伊勢参り・成田山参りなどが盛んに行われた。飯豊山参りのお山がけは伝統的な成人式と関係があり、若者が足場の悪い危険な山道を踏破し抜いてお参りをなすとげることによって、地域社会から一人前の大人になったと認められたのである。

巡礼は、信仰を目的として、仏教上の聖跡を一定の巡路で参詣すること、西国三十三カ所巡礼・四国八十八カ所遍路が古くから行われ、最も名高い。後になって民間の需要に応じて各地に小規模なものが始まった。当地のは安達三十三観音参りで、観音の靈験を得るための祈願を目的として安達郡内の観音を巡拝する。巡礼者の服装はもともとは白装束に負摺・札ばさみ・笠・金剛杖といった特殊なもので、いこれは修験の山伏の服装と似てる。目的の寺に至ると、各自持参の納札をおさめ、経を上げてから持参の納経帳に寺の宝印を押してもらう。巡礼の季節は、春の彼岸の頃である。

付記
二本松市内で、宗教法人として登録されている神社と寺について、参考までに『福島県宗教法人名簿』(福島県総務部文書学事課・一九七八年)より該当部分を掲げた。

いずれも、氏子や檀徒とその総代・役員とがきちんと決っており、一定規模以上の神社と寺である。こうした神社の祭礼や寺の法会等で、全国的に共通なものは民俗調査の対象外であるが、古くから伝えられている伝統行事で、独特の要素のあるものは貴重な民俗資料である。奉納される民俗芸能や特殊な神饌・幣束などがその例である。

| 種 類 | 名 称 | 参加の範囲と 人数 | 内 容 | 経 路 | 場 所 | 期 日 | 期 間 | 装 束 | 持 物 |
|-------|-------------|------------------|----------------------------|--|--------|-----------|---------|-----|---------------|
| 出羽三山 | 奥参り | 人員不定 | 講中を作り(三〇〇名あり)年一回四〜五名代参させる。 | 二本松―北山形―岩根沢―先達―湯殿山―羽黒山―湯路 | 山形出羽三山 | 七月八日 | 三泊三日 | 普断着 | 笠 ゴザ 油紙 |
| 山津見神社 | 佐須の山の神様参り | 〃 | 〃 (年二回とし二〜三名代参) | 二本松―松川―飯野―佐須―湯路 | 相馬郡飯館 | 祭日及びその前二日 | 日帰り | 〃 | 〃 |
| 成田不動尊 | 成田山参り | 〃 | 〃 | 二本松―東京―成田山―湯路 | 千葉県成田市 | 期日不定 | 一泊又は日帰り | 〃 | 〃 |
| 古峯神社 | 古峯ガ原参り | 〃 | 〃 | 二本松―宇都宮―鹿沼―古峯神社―湯路、大体日光も参拝す | 栃木県鹿沼 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 飯豊神社 | 飯豊山参り | 〃 | 〃 (年一回)代参 | 二本松―郡山―野沢― | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 文珠菩薩 | (山形糖ノ目逃げ参り) | 〃 | 家族にわからぬ様に家をだまして出る(逃げ参り)。 | 二本松―矢吹―水戸―成田山―東京 (水郡線ぞいに) | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 伊勢神宮 | 伊勢参り | 明治一三年の道中日記あり人員六名 | 詳細に記入してある。 | 二本松―矢吹―水戸―成田山―東京―横濱―東海道―伊勢―琴平―大阪―京都―仙道―善光寺―日光―棉宅 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |

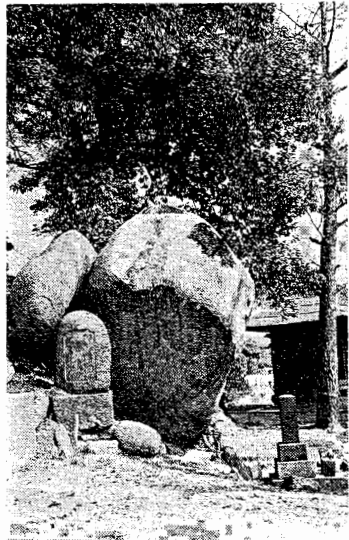
| 種 類 | 名 称 | 参加の範囲と 人数 | 内 容 | 経 路 | 場 所 | 期 日 | 期 間 | 装 束 | 持 物 |
|------|--------|-----------------------|---------------|----------------------|-----|----------------|---------|----------------------|-----|
| 永田地区 | 奥参り | 屋敷一〇人(他の一五人(他の団体と組む)) | 飯豊山参拝後、若松市内見物 | 野沢―飯豊山―若松 | 宿屋 | 秋 | 二日〜三日 | ゆかた、わらじ | 風呂敷 |
| 原瀬地区 | 古峰神社 | 二人(部落三〇軒位) | 部落代表で毎年二人 | 電車又はバスを利用し、案内人により参拝。 | 〃 | 三山詣り又は七月又は八月初め | 一泊または二泊 | 戦前三山参拝は白装束を着たが、現在は自由 | 〃 |
| 杉田地区 | 三山講中 | 希望者五〇〜六〇人 | 特筆すべき事はない | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 三山参拝 | 古峯神社参拝 | 一五人位の代参 | 災害除去祈願のため | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |

| 種 類 | 名 称 | 参加の範囲と人数 | 内 容 | 経 路 | 場 所 | 期 日 | 期 間 | 装 束 | 持 物 |
|----------------|-----|----------|---|---|-----------------------|-----|-----|------------|-----|
| 鈴石地区 出羽三山参り | | | 家内安全豊作祈願のため代参にあたる人は一週間前から自分で炊事をして食べ魚類は食べない。 | 奥羽本線で山形まで行き、昔は三山まで歩いたそうだが大正時代からバスで行くようになった。 | 講中の人は人達は氏神様に集り、酒などを飲み | 七月 | 三日 | 白装束 わらじ | 笠、杖 |

・伊勢参り、奥参り、飯豊山参りは出発前の一週間不浄物や生ぐさに注意し、吉祥院坊主にお払いを受け、幣束は母屋の煙出しの上に差し、ひで(紙の幣束に似たもの)は水神様にはる。
 ・出発には早朝井戸で水ごうりをとり、すべて新しい白装束着とし、前夜は女性の手を借りずに食事、弁当を準備する。留守の者と講中や肉親は、山にかける時は水ごうりをして無事を祈る。
 ・講中の場合は代参であるためお札を受け、経費を出し合う場合もある。

| | | | | | | | | | |
|---------|-----------|---------|-------------------------------------|-----------------------------|----------|-----|-----|------------|---------|
| 飯豊山参り | えいでい参り | 信心者八名 | 米で山を積みあげるように祈願 作物万作 | 本宮より虚空蔵様、一之木剣ヶ峯、オストウ、飯豊山、御西 | 会津 新潟 | 八月九 | 三日間 | 白装束 | 引綿 |
| 古峯神社参り | こぶぐら様参り | 講中一〇名 | 火事にならないように、火傷にならないように祈願 作物豊作、蚕豊作 | 川俣・保原・山津見神社 | 栃木県 | 五月 | 二日間 | 旅支度 | 芋 |
| 山津見神社参り | 山の神参り | 講中四〇名 | 先祖の供養、仏がうかばれるように | 安達地区内(約一週間くらい、自宅より出発) | 伊達 | 五月 | 二日間 | ケサ掛 | 特にな |
| 三十三参り | 安達三十三観音参り | ご詠歌講中二名 | | | 安達地区 | 四月 | 一週間 | ケサ掛 ワラジ | 鈴 |
| 十三詣り | 木幡弁天様 | | | | 木幡 | | | 履 | 鉦 経本 |

| | | | | | | | | | |
|------------------|-----------|----------|--|------------------------------|-----------------------|-----------|---------|-----|-------------------------------|
| 種 類 | 名 称 | 参加の範囲と人数 | 内 容 | 経 路 | 場 所 | 期 日 | 期 間 | 装 束 | 持 物 |
| 箕輪地区 出羽三山 | 奥参り | 人員不定 | 元は講中あり 現在なし | 二本松―北山形―岩根沢―先達―山形―湯殿山―羽黒山―山形 | 山形出 羽三山 | 七月、八 | 三泊三日 | 普断着 | 笠 ゴザ 油紙 |
| 山津見神社 | 佐須の山の神様参り | 〃 | 〃 | 二本松―松川―飯野―佐須―帰路 | 相馬郡 飯館 | 祭日及びその前一日 | 日帰り | 〃 | 〃 |
| 成田不動尊 | 成田山参り | 〃 | 〃 | 二本松―東京―成田山―帰路 | 千葉県 成田山 | 期日不定 | 一泊又は日帰り | 〃 | 〃 |
| 古峯神社 | 古峯ヶ原参り | 〃 | 〃 | | | | | | |
| 平石・西荒井地区 三宮参り | 伊勢参り | 信心者五名 | 一家繁栄・武運長久・五穀豊穡・善行・烏天狗が三に化身悪人退散 金に運があるように、縁組祈願(金で山を積みあげるように) | 伊勢、熊野、金毘羅 | 伊勢、三重県 熊野様 和歌山県 | 二月 | 二七日間 | 白装束 | わらじ 金剛杖 着こぎ 笠 その他 |
| 月山参り | 奥参り | 講中三七名 | | 山形より刈川・千人沢・湯殿山・月山・羽黒山 | 山形 | 八月九 | 三日間 | 〃 | 〃 |



松岡寺の雨乞石

寛文8年7月大岳和尚が祈願し雨を呼んだ話は有名で、その所を雨乞石と呼んでいる。

法が資料となる。

神がかり、託宣、たたり、憑きもの筋、きつねつき、河童、天狗、妖怪などで、その種類、名称、様相、防除の

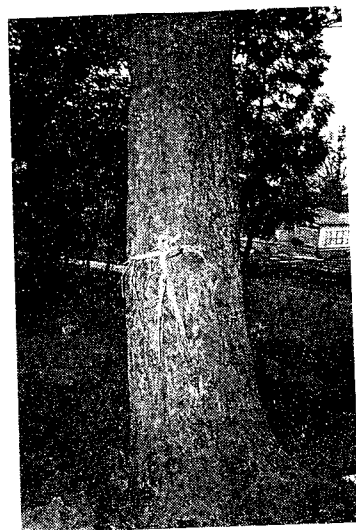
第八節 憑霊現象・霊異現象

| | | | | | | | | | |
|---------------|-------|--|-------|---------------------|---------------------|--|--|--|--|
| 金華山参詣 古峰神社 | 講社もあり | | 交際する。 | 日時をかけて参拝したので思い出も深い。 | 廻りに宿とし、思い出を語り宴会を行う。 | | | | |
|---------------|-------|--|-------|---------------------|---------------------|--|--|--|--|

沖縄県のユタや東北地方のイタコ、ゴミンといった巫者だけでなく、各地域社会には、神がかりをする祈禱者たちがかなり多くいる。神がかりの技術を師匠から習得したのか、あるいは自身で突然そうなったのかの違いは重要である。

シャーマニズムは、霊魂を体内から脱出させ、空中や地下を飛翔させる現象と、霊魂を自分に依り憑かせる現象とに分類されているが、一般には、第三者には区別がつかない。むしろ表面的には異常な神がかりの

| 種類 | 名称 | 参加の範囲と人数 | 内容 | 経路 | 場所 | 期日 | 期間 | 装束 | 持物 |
|---------------|-------|--------------------------------------|-------------------------------------|------------------------------------|-----------------|------|----|------------|----------------|
| 古峯神社参り | | 講中一〇人位からなり年に二人ずつ代参する。 | 火の神であり無火災祈願をする。 | 東北本線で宇都宮まで行き、それよりバスで神参りをなし神社で一泊する。 | おこもりなし | 春秋 | 二日 | 普通 | なし |
| 大平地区 出羽三山講 | おやま参り | 五、六人から二、三〇人任意加入の団体 | 先達として永い経験の有する者が指導役、講中のうち順番に交替にて参詣する | 毎年一定金額を積立て経費とする。 | | 二泊三日 | | 行衣を着て笠ゴザ用意 | 宿舎が定めており懸意である。 |
| 安達三十三観音巡拝団 | | 近隣同好の人を誘い二、三〇人の団体で年齢は五〇、七〇歳位で男女を問わず。 | 一番から三番まで定められており、巡拝する。 | 安達郡東部より南部へと路順を考えて回る。 | 自動車で行き分けして巡拝する。 | | | 任意 | |
| 伊勢講 | | 伊勢参宮の同行者全員 | 伊勢兄弟等と言って生涯仲良く | 交通不便な時代に、歩いて長い | 一行の家を順 | | | | |



丑の刻参りの薰人形

状況になつて目立つ。そうした状態は、巫者と依頼者との関係の上に成り立っているわけだから、信者が神がかりの祈禱者に一体何を期待しているのかも探り出す必要がある。当地方でも、丑の刻参り・コックリさん・雨乞いなどが行われたと伝えられる。ここでは、手元にある資料が少ないので、靈異現象などの意味を広くとって幾つか並べる。

狐 火 一個または二個の時もあり、一列にたくさん火が並ぶこともある。一列に並ぶのを狐の嫁入りと伝える。
(塩沢地区)

恨 み 恨み相手を困らす法で、相手の田や畑に、餅・団子・握り飯等を見つからないように埋めておく。
火の玉 明治の中期に、作田稲場より火の玉が飛ぶと言ったという。
(館野地区)

お姫様 お姫様を背中に背負って、幣束を振りながら祈る。願い事によって祈り方が大小異なる。
ポックリさん ポックリさんや占い方は当地区に三、四名いる。

狐 狐に馬鹿にされたという話が五件位ある。
(平石地区)

丑の刻参り 女(主婦)が、丑の刻(午前二時頃)に、かみそりを口にくわえて近くの神社にお参りし、神木に五

寸釘を打って相手をのろう。

主婦が薰人形を作り、髪の毛を長く前に垂らして、丑の刻に近くの神社の木に薰人形をゆわえつけ、頭・目・足に釘を打つ。その時、他の人に見つけられるとろいの効果がなくなる。こうしたのろい所はこの地区に五ヶ所ある。

卵埋めののろい 相手の屋敷に近い所の畑の中に、生卵と御飯を深く埋め、皿をかぶせてのろう。埋めた品物が見つかるとのろいが効かない。防除法として吉祥院で祈とうし、のろいをよけてもらう。

狐 近所の山に白装束姿の狐が現われて、用事に行った帰りの途中で、自宅と方向違いの沢の方に連れられていった。狐は尻尾をくるくる回してから白装束になった。

御祝儀の帰りに、手に持っていたお包の中味がすっかり無くなっていったという経験を二、三名の男がしている。

狐に化かされることの防除法として、煙草の火で狐をおっ払った。

(平石・西荒井地区)

丑の刻参り 憎い人を不幸に落しめるための薰人形の釘打ちである。薰人形を作り、それに憎い人の名と年齢とを記入し、丑の時刻、神木に五寸釘で打ちつけた。のろわれた人は不幸があったという。薰人形を取り除く場合には祈とうしてもらってから取り除かなければならない。

(鈴石地区)

雨呼ばり 雨呼ばりと称して雨乞いをしたことがあった。

(大平地区)

| 名称 | 目的 | 参加者 | | 講元・やど | 行事 |
|------------------------|----|--------------|------------|------------------|---|
| | | 人数 | 加入脱退 | | |
| 念仏講 | | 男四〇名 女一六名 | 一戸一人 | 大日様 観音さま | 正月一六日、彼岸、お盆、虫供養(一〇月一〇日) |
| 二本松地区 三山参り (奥参り) | | 男 | 夏 | 湯殿山 羽黒山 月山 | 五〇戸〜七〇戸の講中で、 代参人が参拜してきて、 お札を講中に配る。 留守家族も殺生を禁じ、 参詣予定日には陰膳を据 えて道中の安全を祈願し た。 伊勢参拜は生涯一回は参 拜することが念願であつ た。 代参は一回三名〜一〇名 程度で年二回(秋・冬) 行われた。 組によっては、四〜五年 位に一度は必ず行けるよ うにしていた。 |
| 古 峯 講 | | 男 | 年二回 秋・冬 | 古 峯 原 | 信仰、敬神、招福 |
| 三 峯 講 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 成 田 講 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 金 華 山 講 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 金 毘 羅 講 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 竹 駒 詣 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 笠 間 詣 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 山の神講 (野沢・佐須) | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |
| 伊 勢 講 | | 男 | 秋・冬 | 秩父三峯 | 信仰、敬神、火伏 |

第九節 講

信仰的講集団については、第五章の社会生活との関連が深く、第六章の信仰と重なる性格を持つが、本巻では主としてこの章で扱うことにした。
 福島県内においても講の種類は多いが、どの地方に何の講が特に多いとも言えない。比較的密度の高いものに、伊勢・古峯原・湯殿講のように参拜(代参)を目的とする講と、庚申・山の神・熊野・お籠・えびす・蚕神・地藏・観音・東堂山・羽山講・念仏講のように、部落内で行うもの、それも宿に集まって共同で行うものと個人で行うものといろいろある。大般若や百万遍も講の形で行なっているところがある。たのもし講・無尽講のような経済的な講も多い。

県教育委員会の民俗資料緊急調査によると、以上の講の他にも次のような多様な講の存在が報告されている。
 三山 天神 八日 権現 天王 白神 淡島 秋葉 金華山 那須 三峯 白湯 御嶽 柳津 初午 観音 念仏 無常 馬頭 カガラツキ 珠数まわし みつまるこう 太子 寄合 女寄合 お日待 妙義 とういも 出しあい おがみ 殿様 不動 東堂山 つちんぼ 女念仏 成田山 二十三夜 巳待 甲子 十九夜 寝待ち 小午 田山 神 えびす

山岳信仰関係の講で最も多いのは、湯殿山・月山・羽黒山の三山講で奥参りともいい、五穀成就祈願が主であった。行く前に数日間潔斎小屋で水ごりをとる。飯豊山講は会津に多い。おこもりと水ごりがある。一五歳から一七歳までと一九歳で登って一人前になると言われた。白湯山講が県南に多いのは那須山信仰で、村の一六歳の男子が七月三日の出発を前に七日間おこもりをした。

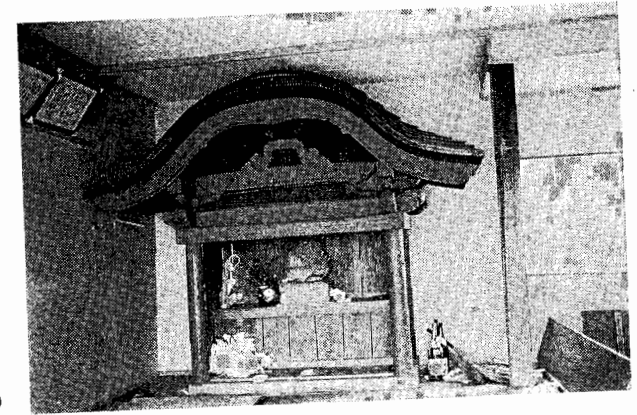
このほか県内の多くの村にハヤマ講があつて、潔斎してハヤマに登り、神おろしをして作の豊凶を占うことが多かつた。

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|-------------------------|----------|----|---------------------------|-------------------|------------------------------|--|--------|
| 十九夜講 甲子講 | 〃 | 女 | 年一回 | 〃 | お産の神を祀る。 甲子大黒天を祀る。 | 夕食を共にする。 茶を飲む。 | 飯 酒 |
| 庚申講 金毘羅講 | 〃 | 男 | 年一回 | 〃 | 庚申様を祀る。 金毘羅様を祀る。 無火災祈願 | 夕食後、酒宴 | 〃 |
| 古峯方原講中 | 屋敷の希望者 | 〃 | 年二回 | 古峯神社 | | まわり番に二人の代参をたてる。 | 金 |
| 高越地区 天皇講 | 部落つきあい範囲 | 男 | 旧二月 旧五月 旧九月 旧一五日 | 宿まわり | 部落つきあいの協議をした。信仰と冠婚葬祭、儀式の修得。 | 部落つき合い。全戸から一人ずつ当前の家に集り、千本きねで餅をつき、生母神社に供え、全員が参拝し、冠婚葬祭の儀式を練習し、神酒をいただき餅を会食した。 (昭和四十六年に廃止された) | |
| 奥参り講中 (三山参り) | 部落全戸 | 男 | 旧七月 | 山形県月山・ 羽黒山・湯殿山 | 信仰。家内安全、豊作祈願をした。 | 講中をつくり掛金をして代参(四名位)制で実施した(大平洋戦争で廃止された。近年また復活しつつあるが現在希望者で実施している) | |
| こぶがはら講 中 (古峯神社参拜) | 部落全戸 | 男 | 旧正月 | 栃木県古峯神社 | 信仰。火伏祈願をした。 | 〃 | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|--------------------|-------|-----|-----------|------|-------------------------------------|--------------|-------|
| 伊勢講 十九夜講 山神講 | 〃 | 男 | 春・秋 | まわり宿 | 山神を祀り、山の事故を防ぐ。 阿弥陀仏を拝み念仏を唱える。 | 餅をついて、酒宴を催す。 | 酒、餅 |
| 念仏講 区(組) | 〃 | 〃 | 年六回 | 〃 | | | |
| 念仏百万遍 | 屋敷 | 女 | 年二回 | 行屋 | 天照皇大神をおがむ。 | 餅をついて酒宴を催す。 | 飯 |
| 伊勢講 屋敷(伊勢参仲間) | 屋敷 | 男女別 | 年一回 | まわり宿 | 部落内の神々を歩いておがむ。 権現様を祀る。 蚕神を祀る。 | 餅をついて供える。 | 酒、餅 |
| お供え | 〃 | 男 | 年一回 | 〃 | | | 餅 |
| おこもり | 屋敷 | 〃 | 〃 | 行屋 | | | 餅 |
| 二十三夜講 | 屋敷の一部 | 〃 | 毎月二 三日 | まわり宿 | | 夕食後酒宴 | 酒、餅、飯 |

| 名称 | 目的 | 人数 | 加入 | 脱退 | 講元・やど | 行 |
|------|----|-------------|-------|----|------------------|-------------------------------|
| 伊勢講 | | 一戸一名 四〇名 | 一戸の戸主 | | の会計 掛物 | 酒を飲んでさわぐのみ。若連という。 (昔あった) |
| 十九夜講 | | 一六名 | 一戸一人 | | 代表者が相馬の山の神参りに行く。 | 回り番の宿に若い人達が集まって餅をつき掛け軸をかけて拜む。 |
| 山神講 | | | | | | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|--------------|---------|-----|-----------------|------|-----------------------------|---|------------------|
| 永田地区 山神講 | 組内 | 男女 | 一月一七日 一〇月一七日 | 宿めぐり | 親睦のため | 山仕事の安全祈願 | |
| 天王講 | 〃 | 〃 | 二月一五日 | 〃 | 〃 | 火難除去祈願 | |
| 不動講 | 〃 | 女 | 一月七日 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 秋葉講 | 〃 | 男女 | 六月一日 | 〃 | 〃 | 先祖の供養 | |
| 念仏講 | 〃 | 女 | 春秋彼岸 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 原瀬地区 山の神講 | 部落 | 男 | 一月一七日 | 宿まわり | 〃 | 〃 | |
| 天王講 | 部落 | 男 | 二月一五日 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 念仏講 | 部落信者 | 男 | 春秋の彼岸 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| おなじ念仏講 | 〃 | 女 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 伊勢講 | 伊勢参り同行者 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 十三夜講 | 部落信者 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 二十三夜講 | 〃 | 男女共 | 春秋の彼岸 | 〃 | お月様の十三夜様を拝んだ。 二十三夜様を拝んだ。 | 八人〜一〇人位で宿まわりに集まり、米五合位と重話を持って集まり、会費制で酒などを飲む。 昔は行儀見習、部落のしきたり、上下の区別などの教育を若者にする場でもあった。 | 世話人二人ずつの交替制で続ける。 |
| 靈神講 | 〃 | 男女共 | 春秋の彼岸 | 〃 | 〃 | 〃 | |



伊勢屋
(塩 沢)



秋葉講の参拝(永 田)

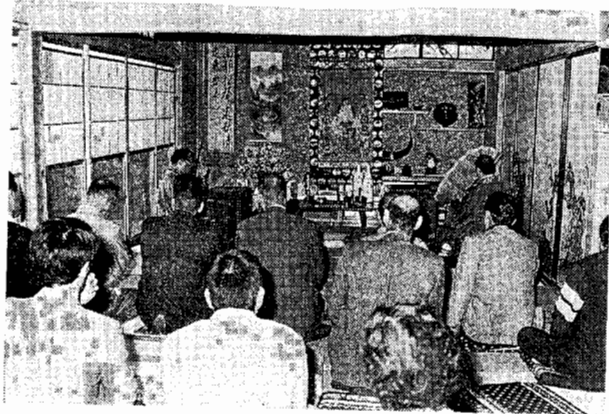


天王講のもちつき
(館 野)

| 庚申講 | 伊勢講 | 念仏講 | 山の神講 | 山の神講中 | 出羽三山講中 (奥参り) | 飯豊 | 古峯ガ原 | 成田山 | 三夜待講 | (二十三夜様) | 箕輪地区 | 天王講 | 甲子講 | 庚申講 | 伊勢講 |
|-------|------------------------|---------------------------------------|------|-------|-----------------|------|------|------|--|--|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 人員不定 | 女二〇名内外二組 | 男一〇名内外一組 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 | 若き既婚者 | 若き既婚者 | 現在一組六名 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 | 人員不定 |
| 男 | 女 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男女 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男 | 男女 |
| // 庚申 | 伊勢参拝の日 | 春秋彼岸 | // | 春秋 | 春秋 | 夏 | 春秋 | 春秋 | // | 春秋 | 春秋 | 春秋 | 春秋 | 春秋 | 伊勢参拝の日 |
| // | // | // | // | // | // | // | // | // | 順宿 | 順宿 | 順宿 | 順宿 | 順宿 | 順宿 | // |
| // | // | // | // | // | // | // | // | // | この夜の子供は奇型児となる。 | この夜の子供は奇型児となる。 | 部落の融和親睦・敬神 | 部落の融和親睦・敬神 | 部落の融和親睦・敬神 | 部落の融和親睦・敬神 | // |
| 現在なし | 当前念仏 各家を回り座敷で念仏を上げて回る。 | 祈禱念仏 宿のみで念仏を上げる。男 宿のみで念仏を上げる。二名〜四名位代参 | 現在なし | 現在なし | 現在なし | 現在なし | 現在なし | 現在なし | この夜若い男子(既婚者)は宿に集まり一泊して、早朝月の出を拝む様になっていたと言う(明治初期)。 | この夜若い男子(既婚者)は宿に集まり一泊して、早朝月の出を拝む様になっていたと言う(明治初期)。 | 現在六名で実施しているが、その外の人には念仏講だけである。 | 現在六名で実施しているが、その外の人には念仏講だけである。 | 現在六名で実施しているが、その外の人には念仏講だけである。 | 現在六名で実施しているが、その外の人には念仏講だけである。 | 現在六名で実施しているが、その外の人には念仏講だけである。 |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|-------------|-----------------|-----|-------------------|----|----------|------|----|
| 杉田地区 念仏講 | 二〇名内外 現在二組あり | 男のみ | 二月一五日 (現在二月一日) | 順宿 | 部落の融和・敬神 | 現在なし | |
| 天王講 | 二〇名内外 現在二組あり | 男のみ | 二月一五日 (現在二月一日) | 順宿 | 部落の融和・敬神 | 現在なし | |
| 館野地区 天王講 | 二〇名内外 現在二組あり | 男のみ | 二月一五日 (現在二月一日) | 順宿 | 部落の融和・敬神 | 現在なし | |
| 甲子講 | 人員不定 | 男 | 其の年の甲子の日 | | | 現在なし | |

| 名称 | 目的 | 参加者 | | 講元・やど | 行事 | 備考 |
|------|----------------|-----|---------|-------------|-----|----------------------|
| | | 人数 | 加入 | | | |
| 殿様講 | 屋敷神を祀る | 七人 | 字山口一戸一人 | まわり番 | 餅の会 | トウメイ講ともいう。女子は参加資格なし。 |
| 天王講 | 神仏を祀る | 九人 | 字上平一戸一人 | まわり番 | 餅の会 | トウメイ講ともいう。女子は参加資格なし。 |
| 三夜講 | 豊作祈願 | 有志 | 自由 | まわり番 年二回 | 餅の会 | トウメイ講ともいう。女子は参加資格なし。 |
| 山の神講 | 山の神を祀る (信心) | 有志 | 自由 | まわり番 年二回 | 餅の会 | トウメイ講ともいう。女子は参加資格なし。 |
| 伊勢講 | 伊勢神宮参拝 | 有志 | 自由 | まわり番 年二回 | 餅の会 | トウメイ講ともいう。女子は参加資格なし。 |



大 般 若
(館 野)



山の神講の参拝 (平石高田)



念 仏 講 (平石高田)

| 名 称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目 的 | 内 容 | 供 物 |
|---|------------------|----|------|------|----------------|---|-----|
| 念 仏 講 山の講 出羽三山講中 (奥参り) 古峯ガ原 成田山 山の神 | 男女一組ずつあり 人員不定 | 男女 | 春秋彼岸 | 〃 | 部落の融和親睦・ 敬神 | 念仏講が男女とも一組ずつあり、春秋の彼岸に寺宿で行う。 現在講中は何も実施していない。 | |
| 平石地区 しやり講 | 屋敷の若者 | 男 | 九月 | まわり宿 | 稲の信仰 | 産土神・稲荷様をお参りする。米を三合各自持参し、油揚げ御飯と煮物などで酒盛りをする。 餅米持参し、酒盛する。氏神の地神様参拝し、おこもりをする。当日は大平の神楽がきた。 | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|--------------------|--------|--------|-------------|-----------------|------------|--|----------------------------------|
| もちっ講 (熊野講、葉山籠り) | 農家の山大人 | 男 | 九月一日 | 地藏堂 | 葉山詣、仏の神 | 地藏堂に集まっておこもりをし、朝薄暗いうちに葉山にボンデンを持って参拝する。 道中の唱え文句「ナムチヨウライ サンケサンケ ミネヤクシ フジユウ神社 ジユウウライ ハイ ヤツコンミヨウライ アカイタイシヨウ カクシヨウカ」近くの井戸で体を清める。前夜のおこもりには、餅・酒肴・煮物で祝い事をする。女性の手を借りられない。 翌日、葉山参り後に近所の子供達が餅をもらいにくる。 大じゅずを左回しに一〇〇回をまわす。 中央に年長者が入り太鼓と鉦をたたく。 数え用の木札を回数確認に使用する。 じゅずの結びが自分の所に来た時は首を下げて拜む。 田植のしぐさを、若い男と女が踊る。 仮面をして七福神が舞込む。 節分の豆まき行事に関連して行うしぐさ。 | 白御飯 お吸物 魚 掛け軸 掛軸をかける |
| 念仏講 | 小組 | 男 女 | 春秋彼岸 葬式日 | 男一宿まわり 女一吉祥寺 | 先祖の供養・虫の供養 | | |
| 田植踊り | 組全体 | 男女 | 正月一四 | 厄年と近所の家 | 稲の豊作予祝 | | |
| 七福神 | 組全体 | 男 | 正月一四 | 〃 | 招福の予祝 | | |
| 鐘馗舞 | 組全体 | 男 | 正月一四 | 〃 | 悪魔退散 | | |
| 鈴石地区 | | | | | | | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|---------------|-----------|----|-----------------|-------------|----------------------------------|--|----------------------------------|
| 山の神講 | 農家で山男が中心 | 男 | 二月一七日 一〇月一七日 | 講中の家を順番に回り宿 | 山の仕事をする時けがの無いように作神に豊作であるようにと祈禱す。 | 山の神と恵比須がかけをした。「山の神は木の本数、恵比須様は魚の数でどちらが多いか」その結果山の神がかけに勝った。この日は山の神が木の数を数える月であるから、山に入った木を切ってはならない。 講中に入っている者は米一升持参し、女性の手を借りず、男だけの力で酒肴をつくり酒盛をし歌をうたう。 「二升めしを食えないようでは一人前の仕事ができない」と言う。 | 白御飯 お吸物 魚 掛け軸 掛軸をかける |
| こじら講 (蚕飼講) | 蚕を中心に行う主婦 | 女 | 二月八日 二月初午 | 宿まわり | 養蚕を祈る。 | 年三回の行事をする。 あずき粥で萩の箸、きなこ(豆粉)御飯、大根飯とカヤ箸箸の長さは二本とも長さが違うものを使う。豆腐汁と煮物を供える。きなこをこぼすと中風になると言う。 赤い御飯に尾頭付きの魚と豆腐汁を供え、鯛三匹を小鉢に入れて、神酒と灯明をあげる。 | |
| 大師講 | 家族全員 | なし | 一月一四日 一月一四日 | 各家庭 | 弘法大師を祀る。 | 恵比須、大黒を祀る。 招福・五穀豊穡を祈る。 | |
| えびす講 | 〃 | なし | 一〇月二〇日 一月二〇日 | 家庭 | | | |

| 名称 | 目的 | 参加者 | | 講元・やど | 行事 |
|------|----|-----|------|-------|----|
| | | 人数 | 加入脱退 | | |
| 地蔵講 | | | | | |
| 観音講 | | | | | |
| 熊野講 | | | | | |
| 山の神講 | | | | | |
| 成田講 | | | | | |
| 三山講 | | | | | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|-------------|---|----------|--------------|--------------------------|--------------------------------|---|----|
| 大平地区 念仏講 | 菩提寺を中心に女信徒 五〇歳〜八〇歳位の希 望者を以って構成する。 | 男女混 合 | 農繁期を 除き随時 | 安達ヶ原 観世寺 遠山長命 寺 | 信仰心の高揚・家内 安全・家業繁栄を祈 願する。 | 時折集合し僧侶より説教 を聞き、和賛を勉強し、 会員相互の親睦を計る。 | |

| 名称 | 加入範囲 | 性別 | 時 | 所 | 目的 | 内容 | 供物 |
|------|-----------------|----|---|-------|--------|---|--------------------|
| 報恩講 | 一戸一名一五戸 よりなる | なし | 一二月一日 | 鈴石説教所 | 仏の信仰 | 明治七年より始めたもので一五 戸の講中が集り、石井、大戸、 小浜の信者に案内状を出し、お 坊さんを頼み説教をきく。明治 時代には二日間開催したという。 | 親鸞上人の 掛軸餅菓 子 |
| 玆善念 | 報恩講の講中と 同じ。 | なし | 四月一日 | 鈴石説教所 | 死亡者の供養 | 五、六、七、八組の一年の中に 亡くなった方の戒名を掛軸に記 帳、お坊さんを頼み供養する。 | 戒名記帳の 掛軸 菓子 |
| 念仏講 | 一戸一名 | なし | 一月一六日 二月一六日 三月二一日 七月一六日 九月二三日 一〇月一〇日 | 各家まわり | 死亡者の供養 | 鉦太鼓に調子を合わせ一〇八の 仏の数珠を三〇回まわす。期間 中に亡くなった方一人につき一 〇回まわし念仏を唱え供養する。 | 十三仏掛軸 |
| 十九夜講 | 一戸一名 (主に嫁さん) | 女 | 一月一九日 三月一九日 九月一九日 一〇月一七日 | 各家まわり | 安産祈願 | 鉦に合せ十九夜和讃を唱える。 | 十九夜掛軸 菓子 |
| 山神講 | 一戸一名 山男 | 男 | 一〇月一七日 | 各家まわり | 豊作祈願 | 一戸一名の山男よりなり、朝五 時頃より米一升を持参し、男だ けで餅をつき、料理をつくり、 餅、頭物を山神に供え、年中の 無事と豊作を願う。 | 山神掛軸 餅、頭物 |
| 地神講 | 一戸一名 山男 | 男 | 春の社日 三月二〇日 | 各家まわり | 豊作祈願 | 地神様に、頭物、酒を供え豊作 を祈願する。 | 頭物、酒 |

自然暦。暦の発達しなかつた頃には、山に消え残る雪の形によって種まきなどの時期を知ったり、その年の作のよし悪しをうらなつた。例えば、安達太良山の雪が駒形にとけ、それがはっきりした時に苗代の種まきをするとか、安達太良山の雪が舟形にとけると作物のできが悪いとかである。

また、どこそこの山にこのような雲ができれば雨になるとか、それも入道雲がでると麦三把刈らないうち

また、夕立が来るなど、経験がものを言う。

また、朝鳩鳴いたら川越すな（雨となる）、夕鳩聞いたら空見るな（必ず晴れる）のように自然現象によつてその日の天候を予知したり、その年の作のよしあしを知る風はひろい。

占い。十二月に分けて豆をいろりの火の周囲に並べて、こげ具合によつて天候や作物の豊凶を占うことは、今もわずかに行なわれており、小正月に鴉からすを呼んで早稲、中稲、晩稲ときめて置いた米をついばま

せて、植える種類をきめる方法なども近年まで行なわれたことであつた。

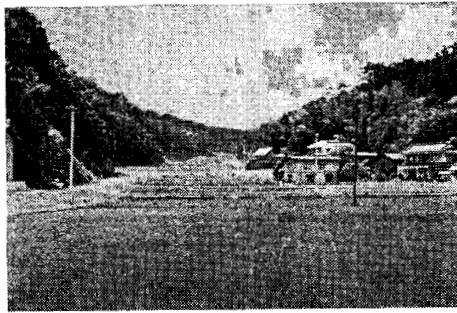
呪いまじな。ノメ（モノモライ）を治す法、もつれた糸をほぐす法、落とした針を見つける法、樹木に実のな

らせる法、歯痛を治す法などにはみな呪文がついている。その他、古い時代ほど呪いは多かつた。

民間療法。腹痛の時葉草を煎じて飲むなどの方法ではなく、呪術や俗信といわれるような療法をとりあげてみたい。例えば、ノメを治すのに小豆を井戸や川へ落とすとか、正月送りの赤飯を十八日までとつておいて粥とし、顔や手足につけるとブヨや蚊にさされない、歯の痛む時ホウガク坊（虫歯の神様）にさわつてくるとよい、酒に酔わないまじないに南天の葉をへそに当てるなどの類である。夜泣き、カンの虫よけ、歯痛み、寝小便、はやり風邪などによく利くまじないがあつたものだ。

| 地区名 | 氏名 | 生年月日 | 地区名 | 氏名 | 生年月日 |
|-----|--------|-----------|-----|-------|------------|
| 二本松 | 渡辺 弥一 | 明治二七・三・一八 | 杉田 | 岩本 逸作 | 大正四・三・一〇 |
| 塩沢 | 東條 幹文 | 二八・一・一四 | 菅野 | 国分 茂 | 大正六・一・二一 |
| 高越 | 加藤 与吉 | 三三・二・一九 | 平石 | 菅野 喜明 | 明治四二・二・二八 |
| 永田 | 加茂 元藏 | 四〇・四・五 | 阿部 | 菅野 長吉 | 大正一・八・二九 |
| 原瀬 | 久保 雄藏 | 四二・一・一〇 | 茅原 | 秀榮 | 明治四二・一〇・一九 |
| 石川 | 中国 重雄 | 四二・九・一〇 | 遠藤 | 清 | 明治三八・二・二五 |
| 内山 | 穂積 重吉 | 三一・一・七 | 渡辺 | 平 | 大正一・一〇・一 |
| 原山 | 矢吹 祐治 | 三三・二・二四 | 渡辺 | 吉 | 大正一・一一・二六 |
| 原山 | 石川 慶子 | 大正六・八・一 | 渡辺 | 見 | 明治三七・九・一一 |
| 原山 | 内山 信永 | 昭和九・一・一〇 | 渡辺 | 弥治 | 大正四・二・一五 |
| 原山 | 原山 寅藏 | 明治三五・二・二五 | 渡辺 | 久 | 大正一・一・五 |
| 龍石堂 | 原山 寅藏 | 明治三五・二・二五 | 佐藤 | 弘久 | 明治三〇・一・五 |
| 佐藤 | 龍石堂 | 三六・八・一 | 佐藤 | 利 | 明治三〇・一・五 |
| 佐藤 | 末治 | 四二・八・二四 | 渡辺 | 政 | 大正二・二・二六 |
| 鈴木 | 平治 | 大正八・九・二八 | 渡辺 | 章 | 大正二・二・二六 |
| 鈴木 | 清四二 | 九・三・三一 | 渡辺 | 樹 | 大正九・五・二六 |
| 原 | 平治 | 八・四・二 | 中村 | 孝純 | 昭和一八・八・一〇 |
| 鈴木 | 清四二 | 八・四・二 | | | |
| 大正 | 八・九・二八 | | | | |
| 昭和 | 八・四・二 | | | | |
| 大正 | 八・九・二八 | | | | |
| 昭和 | 八・四・二 | | | | |
| 大正 | 八・九・二八 | | | | |
| 昭和 | 八・四・二 | | | | |

第七章 民俗知識



伊 佐 沼

◆ 居蛇沼の龍
 今の伊佐沼は昔は沼であった。三四〇年前頃の見取図によると、岳下村の古伊佐沼に当る部分に居蛇沼とあり、沼であったことを示している。塩沢村の伊佐沼は元は居蛇沼と呼んでいた。その頃この沼に大蛇が住んでいたが、年古くなってついに龍と化し、ここから岳下村の古居蛇沼を往来し、付近の田んぼを荒していたので、里人は恐れおののき困っていた。たまたまここを通りかかった雲水禪僧が里人の難儀を救うため、秘法をもって呪文を唱え、一心に祈りをささげて、ついに鉄鉢の中に巨大な龍を封じ込めてしまった。お陰でそれから後は、沼の水が引け、田となって米が実った。禪僧は、その鉄鉢を龍泉寺に頼んで再び諸国行脚の旅に出たという。

二本松市の伝説については、『ふるさとの伝え語り』(二本松市教育委員、会・一九七六年)、『続ふるさとの伝え語り』(二本松市教育委員、会・一九七七年)、『鈴石のむかしがたり』(鈴石小郷土クラブ、一九八四年(合本発行))、『はらせむかしばなし』(原瀬小郷土クラブ、四年生、(共同・一九七三年・稿本))、『むかし話を集めて』(岳下小四年一組)等が出ている。いずれも純粋な伝説集ではないが、その殆んどは伝説と世間話であり、さすがに戊辰戦争で名高い二本松藩の地だけあって、史話に高い関心があるのが大きな特色となっている。『鈴石のむかしがたり』(2)だけは昔話が主となっている。それに、今回の『二本松市史第八巻・民俗』のために、一〇名の民俗基礎調査員の方々が精力的に市内一二地区について資料集収にあたった。その中に伝説が数多く収められた。

二本松市の隣接地区の資料としては、『白沢の文化財第一集民俗芸能と伝説』(白沢村文化財調査委員、員会・一九七四年)、『安積地方の民俗』(福島県教育委員、会・一九六七年)、『郡山市史第七巻民俗』(郡山市、二)が参考になる。

六 二本松市の伝説

民俗基礎調査員による収集伝説を主に、次の市内一三地区の順に並べ記することにする。

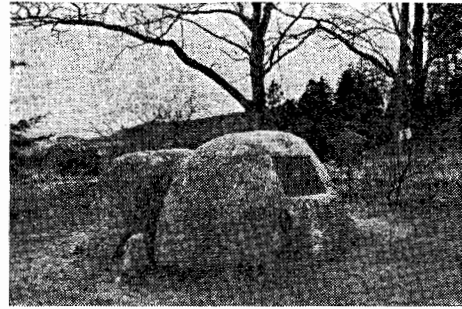
牛 石

- ① 二本松 ② 塩沢 ③ 高越 ④ 成田 ⑤ 永田 ⑥ 原瀬 ⑦ 杉田 ⑧ 館野
- ⑨ 箕輪 ⑩ 平石 ⑪ 西荒井 ⑫ 鈴石 ⑬ 大平(ただし、地区を除く。④)

(1) 二本松

◆ 牛 石 (県立霞ヶ城公園内)

智恵子台にある樹下の二人の詩碑をはめ込んだ自然石は牛石といわれ、天正一三



今、龍泉寺にその鉄鉢があり、乾物となったタツノオトシゴ様のものが入っているが、これが禅僧によって封じ込められた龍の化身であると言ひ伝えられている。

◇ 鴨 壇

昔、ある年の秋、一人の郷士が居蛇沼（今の伊佐沼）の汀（今の小山）を通ると、渚に雌雄一つがいの鴨が泳いでいたので、岸に近い雄鴨を、郷士は手練の早わざで抜き打ちにして殺した。たしかに首を切ったのだが、その首は飛んでどこへいったかわからなかったので胴体だけを持ち帰った。その翌春、郷士がまたここを通ると一羽の雌鴨が泳いでいるので、前のように抜き打ちにした。そして鴨を捕えてみたら、翼の下から小さいものが転がり落ちたので、怪しんで調べてみると、なんとそれは雄鴨の頭の骨だった。これが先に自分が殺した雄鴨の首であったかと、その夫婦愛の深さを思つて非情を悔い、僧を招いてねんごろに供養しようと、付近の民家で賽米を買おうとした。が、貧家のため、わずか七合の米しかなかった。そこで更に古居蛇に行き米を求めようとしたが、ここは前以上の貧家で二合だけしかなかったという。

この土地は、今も七合田、二合田という地名が残っている。俗に九合田という、小山近くの地名は、郷士が僧を招いて供養した所で、鴨を殺したという地は今でも鴨壇と呼んでいる。

◇ 雨乞不動尊

寛文九（一六六九）年六月、安達の郷は毎日炎天続きで、百姓は困りはて、各地で雨乞いの祈禱が行われたが、いっこうにそのかいがなかった。その頃、一寸八分の不動尊を背負った山伏姿の権大僧都藤原の一族滝本の姓春印法師が、陸奥の国巡礼の途中これを聞き塩沢に向かった。当日塩沢の村人は機織御前様で雨乞いの水掛け行事をしていたが、法師はこれを止め、一心に呪文を唱えて不動尊に祈りをささげた。すると一天にわかにかき曇り、大粒の雨が降り出し三日も続いたので、村人は法師の秘法に感嘆し、不動尊の靈験に恐れ入った。

その後、法師は再び巡礼の旅に出ようとしたが、村人はこれを止め、宅地や田畑を寄進し、家を建て、永代機織御



春印法師像

前の社家として住んでもらうことにした。法師の前歴は不明であるが、一説には京都の公卿であったといわれている。

かくて法師は、元禄二（一六八九）年一月にこの世を去ったが、一寸八分の不動尊は、今もなお滝本家に安置され、法師の像は塩沢神社の石段のもと、向って右側にたてられている。法師の社宅は、その後改造され、明治初年までは、村民の出費で修復していた。なお、秘法の雨乞い行事は、地方の雨乞い行事がすべて靈験のない時にのみ行い、一代一回に限ると、子の滝泉法師は遺言されたという。

◇ 赤目鱧主

昔、油井村の長谷堂に、長谷堂大尽という長者がおり、その屋敷の裏沼に赤目鱧主という年とった淡水魚が住んでいた。ある時、長者の家が火事になり、消火のために沼の水がなくなった。仕方なく美しい少女に姿をかえて、一人とぼとぼと土湯街道を西にのぼった。塩沢村の休石を過ぎた頃、雑木林の中に一つの沼を見つけたので、そこに身を隠した。その後、雨のため湯川がはらんし、沼は押し流されたので、赤目鱧主は再び住むところがなくなってしまう。

ある日の昼過ぎ、土湯帰りの馬子が馬をひいてここを通ると、一五歳ぐらいの美しい娘が姿を現わし、土湯まで送って欲しいと願ひ出た。年若い馬子は娘の美しさに心をひかれ、馬に乗せて二里の山道を土湯まで引き返した。やがて馬からおりた娘は「うそを言つてすみませんでした。私は魚ですから、この上の沼に住みます。ご恩は一生忘れません。」とていねいに礼を述べて夕やみの中に姿を消した。その後、土湯の男沼には水底深く遊泳する赤目鱧主の姿を見た者があるという。

赤目鱈主の一時の宿となった休石の牛沼は、今は水がかれたが春ともなれば、れんげやつつじの花が咲き乱れ、わずかに当時のおもかげを残している。

◇ 木の根坂

仙台多賀城の国主は色好みで、日頃国中の美女をあさっていた。たまたま田治ヶ岡の城主安達太郎の奥方照日御前が、飯坂の富豪佐藤家の娘で、絶世の美人であることを知り、さっそく佐藤家を通じて差し出すよう命じた。佐藤家では思い余って、婿の太郎を殺して娘を差し出すより仕方がないとあきらめ、重病といつわって太郎夫婦を飯坂に招いた。そこで、時を移さず飯坂に赴いた。ここに照日御前付添いの月夜姫という賢い腰元が早くもこのわるだくみを見破り危急を知らせた。太郎は大いに驚き、照日御前を連れて田治ヶ岡に帰ろうとした。が、ここはすでに多賀城の家来に占領されていたので、やむをえず会津に落ちのびようと馬を走らせ、途中坂の下で一休みした。折りしも初夏

の候であったので、ふもとは緑に包まれていたが、ここは気候の違いで木の芽がようやく出始めたばかりだった。奇禍の夢からさめきれない照日御前の目にはこの自然現象がどうしても理解出来なかったという。

以後、人呼んでここを木の芽坂といったが、なまあって木の根坂となったと伝えられている。

◇ 元岳温泉と梵字石

大同二（八〇七）年に安達太良連峰にはじめて道が開かれ、それから約七百年後に里の狩人が鉄山の下に湯が出てのを見つけ、いろいろの病気に試してみたら効があった。そこで、ここに湯治場を開こうとしたところ、遍照尊寺同山木食雲堂法印という諸国行脚の僧がこの話を聞き、湯治場は山を汚すからと、大石に梵字を刻み、今から一五〇年の間歌舞音曲を許し給えと、山神に祈願した。今



梵 字 石

もその梵字石がある。

その後、この地は元岳温泉として栄えたが、文政七（一八二四）年八月のある夜、矢筈ヶ森から鉄山にかけて、天馬に乗った巨人が飛んで行くのを見た人があったという。ところがたちまち烈風暴風が起こり、鉄山が中腹から崩れ落ちて、浴室はことごとく埋まり、浴室の無残な死がいはいは、遠く木の根坂付近まで流れたという。後、官の力を借りて一里程下まで湯樋を引き継ぎ、十文字岳温泉として繁栄を極めたが、明治戊辰の役後焼失したので、その後は岳温泉に移され、今は二、三基の遊女の墓が昔のおもかげをしのばせているに過ぎない。

鉄山の頂上と木の根坂の巨岩の上に祀つてある地藏尊は、元岳温泉遭難者の供養のために建てられたものであるという。

◇ 足利の七本桜

昔、田治ヶ岡に足利某という武士が居て、百姓とともに楽しむために七本の桜を植えた。そのうちの一本が今残っている上原桜で、あとの六本は枯れてしまった。ある年の春、上原の西にある家の後ろの桜の木に鷹が巣を作り、雛を育てた。当時の人はこれを吉相とし、その家を単守りと名付けたので今もそのとおりに呼んでいる。享保四（一七一九）年、この桜の根元に地藏尊を祀り、信仰の印として御祝儀と葬式の行列と馬に乗って通ることはしないように決めた。ある時、馬に乗った武士がここを通ったが落馬して腰を打ったので、その後は再びこの掟を破るものがなかったという。

上原行屋が建てられてからは、上原屋敷の守り神として、地藏尊はそこに移され、子育て地藏と名付けられた。行屋は子供達の遊び場となったが、その後もこの掟は厳重に守られていた。しかし、終戦後は今までの風習を守ることが薄れ、いつからとはなしにこの道を通るようになった。上原の西街道を今でも不通道（トウセンドウ）と呼んでいるのはこの掟の名残であろう。

◇ 二機織御前（羽衣伝説）



乳地蔵

塩沢村沖田の田中神社(加茂明神)は、はじめ明堂であったので明神堂と言われていた。その後、坦子森の出鼻の小高い丘(通称デッコ森)に移されたが、大神は元の地を懐かしんで常に帰ることを考えた。馬に乗って下の道を通る者は必ず落馬せしめて、ひそかに神意を知らしめていたので、里人が相談して元の明堂

◇ 田中神社の由来

塩沢村沖田の田中神社(加茂明神)は、はじめ明堂であったので明神堂と言われていた。その後、坦子森の出鼻の小高い丘(通称デッコ森)に移されたが、大神は元の地を懐かしんで常に帰ることを考えた。馬に乗って下の道を通る者は必ず落馬せしめて、ひそかに神意を知らしめていたので、里人が相談して元の明堂



長者窪

その後、息子は父の遺言は守らないで、毎日遊んでばかりいたが、ふと封書のことを思い出し、開いてみたら「朝日さす夕日かがやく山肌によしとうつきにこがね花咲く」という歌が書いてあったので、それからは毎日山を歩いて、金を埋めた場所を探した。が、ついに見つけることが出来ず、そのうちに年をとり、一生貧乏暮しで淋しくこの世を去っていった。

昔、田治ヶ岡に安達太郎という殿様がいた。ある日、天から舞いおろした天女の美しさに心をひかれ、天女の羽衣を奪って館に引き入れ、無理に夫婦の契りを結んでしまった。天女は毎日泣きながら、機を織っていたがそのうちに一人の女の子が生まれた。その子が五歳の時、ついに羽衣の在りかをつきとめたので、我が子を一室に呼び入れて、機の杼を渡し、ここから北の方角にこれを祀り、母と思ってお参りせよと言ひ残し、泣き呼ぶ我が子に別れを告げ、羽衣を身につけて天に上った。太郎は娘からこのことを聞き、北の方の山にこれを祀り機織り御前と名付け、女の守り神として、村内はもちろん、近村の信仰を集めた。

◇ 黄金長者(朝日長者伝説)

田治ヶ岡の北の方に小さな村里があり、そこに一人の男が住んでいた。早く妻に死に別れ、一人の息子を相手に働き、たくさん金をためていた。里の人は黄金長者と呼んで尊敬していた。長者は田を耕し、稲を作り、毎年もみをひいたぬかを一ヶ所に捨てていたので、今も小高い丘になって残っている。今でもこの地を長者窪と呼び、丘を米糠塚と呼んでいる。やがて、長者も年をとり、死期の近づいたのを知ったが、金を残しては息子が働かなくなること恐れた。ある日、山を掘って金を埋め、目印に三ツ葉うつきと片葉のよしを植えた。そして、息子を一室に呼び入れて、これからは自分で働いて暮せ。しかし、困ったことがあったらこれを見よ、と一通の封書を渡して死んでいった。

塩沢字原から渋川字山ノ入に行く道のわきに、山肌からわずかに出ているみかげ石がある。昔、一組の夫婦がここを通った時、突然山から大きな石が転がり落ち、二人はその下敷きになって死んでしまった。その後、この石はいつでも水にぬれていたもので、里の人はこれは死んだ二人の涙だと信じ、泣き石と名付けて二人の供養のために御祝儀はここを通らないように申し合せた。

◇ 泣き石

その後、御祝儀には鶴巻田の方を遠まわりして細い道を通り、この申合せは厳重に守られていた。

◇ 乳地蔵

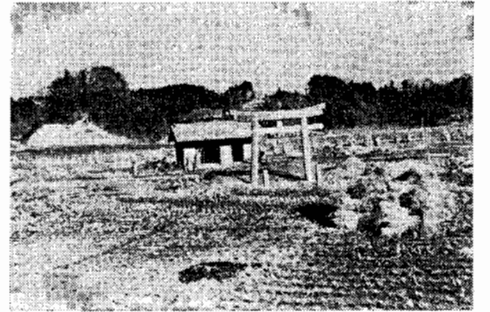
田治ヶ岡の安達太郎を育てた乳母が死ぬ時に、太郎を枕元に呼んで、死体は東の方に埋めるよう言い残した。そこで太郎は乳母の遺言を守り、東の方を調べて見たら長福寺というお寺があったので、その付近に埋めた。そのあとに銀杏木を植え、下に地蔵尊を祭ってねんごろに供養した。

その後、里の人はこれを乳地蔵と名付けた。乳の足りない母親がそこにお参りすれば乳が出るようになると言い伝えられ、遠くの人までお参りに来た。そして、お参りには、甘酒をつくって地蔵尊の頭からかける習わしとなっていた。

銀杏木はすくすくと育ち、いつとはなしに、ここの地名が銀杏木と呼ばれるようになった。

◇ 田中神社の由来

塩沢村沖田の田中神社(加茂明神)は、はじめ明堂であったので明神堂と言われていた。その後、坦子森の出鼻の小高い丘(通称デッコ森)に移されたが、大神は元の地を懐かしんで常に帰ることを考えた。馬に乗って下の道を通る者は必ず落馬せしめて、ひそかに神意を知らしめていたので、里人が相談して元の明堂



田中神社とデッコ森 (左後方)

にお帰りいただこうとした。が、その時すでに明堂には蔵王大権現を祭ってあったので、神官の占いによって、沖田こそ大神の鎮座する最適の地と定め、そこに奉安したという。

その後デッコ森には弁財天を祭ったので、弁天山と呼ぶようになった。田中神社の祭神は大物主神で、神威が殊に顕著であったため、遠方から参詣する人が多かった。

◇ 鷹 森 山

田治ヶ岡の東北に高森山という山がある。大高森、小高森と二つの山が並んでいる。昔、ここに沢山の鷹が住んでいたため、ある日のこと殿様は多くの家来を連れて鷹狩りに出かけた。狩に夢中になっているうちに、いつしか夕暮れとなり、真赤な夕日が山の木々を染め、その美しさは例えようもなかった。殿様はとった鷹を家来に持たせて、しばらくこの風景に見入り、「美しい山だ。これが鷹の森か。」と言われた。

当時、この山には名が無かったので、鷹森山と呼ぶようになり、それが高森山になったと言われている。

◇ 熊野宮の由来

昔、塩沢村宇通坂の里人が、紀伊の熊野権現に参詣に行った時、ここまでお参りに来るのは容易でないから、と相談し奥の院の下から一握りの土を盗んで持ち帰り、これを館の八幡神社に祭ったと伝えられていた。

このため、宇通坂生れの人は、神の怒りに触れることを恐れて、伊勢参りに行っても、紀伊の熊野権現にはお参りすることが出来ない、と言われていた。そこで、毎年餅をついて神前に供え、身を清め、夜籠りをして、神の許しを乞うという習わしがあった。

この熊野社と八幡社は、その後分祀されて、一度は油井村字鶴巻(当時州崎といった)に移されたが、再び遷座さ

れ、二本松神社として栗ヶ柵まに祀られたのである。

(3) 永 田

◇ 湯坂の由来

昔、永田御堂内に安達東九郎盛長という人がいた。そこへ妻の梅がいがたずねて来た。身重であったので湯坂の所に来て湯がこぼれ、礎石の所で子を産んでしまった。そうして、その梅がいは東九郎の所に来た。その前にはそこは名もない道だったが、梅がいが通った坂なので、後に梅谷の坂といい、子供を生んだ所は礎石というようになり、湯のこぼれた所を湯坂という様になったという。

◇ 木 の 旗

才木屋敷の久納一族は木幡山の下にあったお寺なので、男の子の初節句はつせきごに幟のぼりを立てる事を禁じられ、日の丸を立てている。昔、木幡山の杉の木を木旗に見せ、戦いに関係があったという伝説が伝えられている。

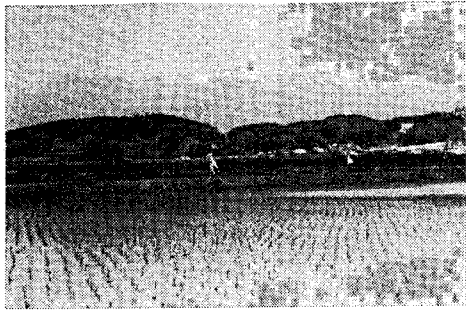
◇ 縁切り松

字梅谷の山中の道は、昔から九尺道で、二本松に行く道である。この梅谷の山道で、昔、八幡太郎義家という人が松の木の下で妻と縁を切ったという話が今も伝えられている。

今でも花嫁はここを通らない。その松は今はない。

◇ 硯すずり 石

字高越高平の山中には、昔、八幡太郎という人が硯すずりに使ったという石がある。この石のある所を硯石という。



岳山 (あだたら山)

名主様や村人たちに励まされて、大三は勇んで出かけて行った。重い荷物をえっちらおっちらかついで岳街道を登った。もうちよつとで坂の上さ出る所まで来た時、大三は一服しっぺと思つて、道ばたにあつた石に腰を下して休んだ。大三は、汗をふきふき、あと一息でこの坂を登りつめつと、鬼に会えつかなく立ちあがつた時、向かいの谷川の方から、ガサ、ガサ、ピチャ、ピチャという音が聞こえてきた。大三は、「はて、なんだべ。」と、胸が騒いで、音のする方をじつとす

昔々、原瀬の才木は、西鬼ともゆわれて、おつかねえ鬼が住んでいた。岳街道を通る村人たちや旅人が、この鬼の話に苦しめられる話を聞いてからは、だれもここを通る人がなくなつてしまつた。そうなつと、鬼はいたずらは出来ねえし、人の物をとることも出来なくなつたから、しょうがなくて、岳山から人里近くまで出てきた。「さあ、大変だあ。鬼が出てきたぞう。」と、村中大さわぎになつた。そして、なじよにかなんねべかと、村中の人が名主様の家さ集まつて、鬼退治の相談をした。んだぎんじも、いつまでたつても、いい考えは出てこねえし、みんなほとほと困つてしまつた。そんな時、だれかが、「鬼さ、酒をこつこつおうして、よっぱらつて寝むつたところ、しばちまつたらどうだべない。」と言つたんだと。「んだ、んだ。それは名案だ。」と村中の人はみんな賛成したんだと。んだぎんじも、だれがその役を引き受けつかという話になつと、みんな、しいんと黙つてしまつた。その時、でっけえ声で、「おらが行くべ。」と言つて、立ち上がったものがいたんだと。大三という二十二歳になつた若者で、村では力持ちのうえに頭もいいので有名だつた。村人たちは、ほつと安心したものの、「なんぼ力持ちで、頭がいくても、こんな若造で、大事な役がつとまっぺか。」と心配したんだと。そんな、大三に頼むきりねえので、急いで酒やさかな、そのほか食い物や着物まで、いっぱい集めて用意した。「んじや、大三。しつかり頼んだぞ。」

◇ 大三の鬼退治

昔々、原瀬の才木は、西鬼ともゆわれて、おつかねえ鬼が住んでいた。岳街道を通る村人たちや旅人が、この鬼の話に苦しめられる話を聞いてからは、だれもここを通る人がなくなつてしまつた。そうなつと、鬼はいたずらは出来ねえし、人の物をとることも出来なくなつたから、しょうがなくて、岳山から人里近くまで出てきた。「さあ、大変だあ。鬼が出てきたぞう。」と、村中大さわぎになつた。そして、なじよにかなんねべかと、村中の人が名主様の家さ集まつて、鬼退治の相談をした。んだぎんじも、いつまでたつても、いい考えは出てこねえし、みんなほとほと困つてしまつた。そんな時、だれかが、「鬼さ、酒をこつこつおうして、よっぱらつて寝むつたところ、しばちまつたらどうだべない。」と言つたんだと。大三という二十二歳になつた若者で、村では力持ちのうえに頭もいいので有名だつた。村人たちは、ほつと安心したものの、「なんぼ力持ちで、頭がいくても、こんな若造で、大事な役がつとまっぺか。」と心配したんだと。そんな、大三に頼むきりねえので、急いで酒やさかな、そのほか食い物や着物まで、いっぱい集めて用意した。「んじや、大三。しつかり頼んだぞ。」



酒頭童子の絵馬 (原瀬諏訪神社)

(4) 原瀬
◇ 鬼面石

霞ヶ城址から西に四キロほど隔てた原瀬才木に鬼面石があつて、酒頭童子の故事を伝えており、また、原瀬諏訪神社には酒頭童子の絵馬が奉納されている。昔、この地の人々が安達太良山へ萱刈りに行つた。ひとりの若者が、水を飲み谷川へおりと赤い魚が泳いでいる。若者はこの魚をとつて帰り、火にあぶつた。あとで皆と一緒に食うつもりであつたが、あまりに香ばしいので一口つまんでみると大変にうまい。知らぬ間に自分一人で平らげてしまつた。なにげない顔で萱を刈つてみると、みなが若者の顔を見て口々に、「真つ赤な顔をしているが、どうした」という。顔がほてつて仕方がないので、谷へ降りて顔を洗つた。ところがますます赤くなるばかりである。

皆の所に戻ると、誰かが「や、角が生えている」と驚きの声をあげた。角の生えた顔はみるみる恐しい形相に変わり、若者はその場から飛ぶようにして走り去つた。この若者こそ、かの酒頭童子である。

その後、童子は大江山から故郷をめざして逃げてきた。奥州街道をひた走つて、ようやく本宮を出はすれた所で追いついた源頼光に首をはねられる。首は原瀬の才木へと飛んだ。その落ちたところに村人が首塚を築いて弔うたという。鬼面石は童子の首が化したものだといわれる。

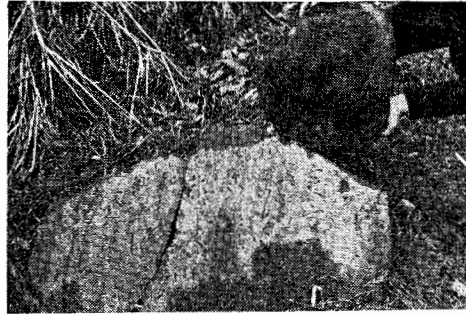
(「福島の伝説より」
角川書店より)

かして見たんだと。そしたら、赤銅色をした鬼の顔が、ぬうっと木の間から出てきた。なんぼ力自慢の大三でも、重い荷物はしょってるし、逃げることも出来ず、アツと息をのんだまま、つつ立っているだけだった。やっと我に返って、よっくと鬼を見てつと、頭の毛も髪もぼうぼうで、ぼろぼろの着物を着て、力なく沢の水をガブガブ飲んでいる。「ああ、鬼の奴め。何日もなんにも食わねえで、体がまいっているんだべ。」と大三は急に鬼がもごくなって、鬼退治に来たのも忘れて、鬼のいるめえさ飛び出した。そして、持ってきた食い物を全部広げて、鬼にくれてやった。

鬼は、ちよっくらの間、びっくりしたようだったぎんじも、目の前に食い物が山盛り置いてあるので、夢中になって食い始めた。やっと満腹になった鬼は、大三の情けが身にしてみても、大粒の涙を流して、何度も何度もお礼を言った。大三はすかさず、「これ、鬼よ。おめえが今までしたきたのは、悪いことだったんだぞ。んだから、村の人や旅の人は、どれだけ難儀したかしんねえぞ。俺は、お前をつかまえに来たんだぎんじも、なじよしたらいいべな。」とさとすように言った。

鬼は、何遍も謝ってから、両手を揃えて大三のめえに出した。自分を縛って、村さ連れて行ってくれと言ってるんだなど分かっていても、鬼ごと村さ連れていけば必ず殺されると思って、大三は鬼を縛る気になんねかった。そして、「なあ、鬼よ。これからは、決って人里に出て来たり、いたずらしてはなんねえぞ。さあ、早く遠くさ逃げて行け。」と言った。鬼は、名残り惜しうに、何遍も何遍も後ろを振り向いて、岳山の方さ登って行って見えなくなった。さて、大三は、このまま村さけることは出来ねえし、どうしっかなと考えていって、さっき、岳山の方さ登って行った鬼が、でっけえ石を持って戻って来た。よっく見ると、その石は、鬼とそっくりの形をしていた。この石をここさ置くと、鬼退治した証拠になると、大三と鬼はにっこり笑って別れた。村にけえった大三は、さっそく名主様に、鬼退治したことを知らせた。

次の日、村人達は、大三の案内で、おっかなびっくり、退治した鬼を見に来た。村人達は、道ばたに、でっかい鬼



七夜桜の碑

の形をした石がごろんと転っているのをひと目見ると、みんなたまげて顔色を変えて、後ろも見ねで、村さ逃げ戻った。

それから、鬼は人里に現れなくなり、雨や風にさらされながら、鬼石は、いつまでも同じ所さ転っている。(「福島のむかし話」福島県「国語教育研究会編」より)

(5) 杉田

◇ 七夜桜

現杉田町三丁目の旧国道わきにあった。昔の奥州街道(現鈴木製材所右の方)に当時立てられた石碑は四号国道改修時移転された。七夜桜は根のみ土中にある。石碑には藤原実房の詠んだ「七夜桜はるばるここに北杉田やがて都にかえる身なれど」と刻まれている。藤原実房が当地に来たりし時、延命寺の娘と桜の下で七夜語り合つたと伝えられる。文政九(一八二六)年丙戌(ひつね)九百四十有余年といわれる。

今も寺の名、地名を延命寺と呼んでいる。

◇ 石塚

八幡太郎義家が奥州討伐の折、一夜の宿を願つたところ、ことわられ、石塚より火の弓矢をはなら虎丸長者屋敷を焼き払つたといわれる。討石(たらいし)ともいわれた。

昭和五十二年、区画整理により石塚は取り去られた。

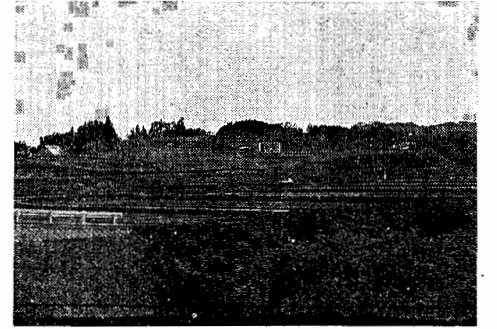
◇ 姫小松

昔、旅をしてしていた病身の娘が来て杉田橋の近くで死んだ。当地の丘に供養の石碑がある。倒れており、手をつけられれば不治の病になるというので誰も手をつけななし、供養もしない。現在、小高い草山である。



発掘された寺院の塔跡

奥州で、安倍氏が朝廷に対抗して勢いを振るっていたころ、長者は安倍氏の軍勢の兵糧などを一手にひきうけて、安倍氏のおしをしていたといわれる。後三年の役（一〇八三年）で、朝廷の命をうけた源義家は、奥州を攻めるため、八百人の家来をひきつれて、長者官を通りかかった。雨もよりの空は、夕がたになると、すっかりあたりを暗くしていた。義家は、連日の戦いで疲れている家来たちを、今夜は野宿でなく、人家でゆっくり休ませたいと思った。ちょうど、むこうに大きな屋敷の並んでいるのが見え、明かりがちらち



郡山台・長者宮

◇ 虎丸長者（朝日長者伝説）

昔、二本松杉田の郡山台から長者宮にかけての広い土地に、虎丸長者という金持ちが住んでいた。長者の屋敷は、八町（約八七〇メートル）四方にもおよび、長者宮のひろびろとした平地には、大きな屋敷や沢山の倉庫が並び、郡山台の台地には、立派な寺院が建てられ、観音様がおまつりしてあった。

沢山の倉庫は、たいていが米倉で、あふれるようにお米を持っていることから、虎丸長者のことを、米長者とよぶ人もいた。

この虎丸長者が、米長者といわれるようになったのには、次のような話がある。

米を持ってやってきた。そして、

「どうか、お米を買ってください。お米が売れなければ、わたしは家に帰れないのです」

といった。長者は、どこかさびしさがただよっている娘の様子をみて、かわいそうに思った。そこでその米を袋ごと買い取ってやった。

それから、庭にむしろを敷いて、袋の米をあけてみた。すると、不思議なことに、袋から、あけてもあけても、米があふれ出て、むしろいっぱい広がった。長者は驚いて、あたりを見回したが、もう米を売りにきた娘の姿は、どこにも見えなかった。

それからというものの、娘は、毎日決った時刻にやってきては、一袋の米を売りにくるようになった。長者も、毎日、娘から米を買ってやった。そして、米を袋から取り出すと、いつも決ったように、むしろいっぱいの米の山とな

った。

いつのまにか、倉庫には米が満ちあふれ、長者は人びとがうらやむような大金持ちになっていった。

長者は、あまり不思議なことが起こるので、ある日、娘に

「あなたは、どなたですか。どこから米を売りにくるのですか」

と思いきってたずねてみた。娘は、うつむいたまま、消えるような声で、

「それだけは、どうかお聞きにならないでください」

というばかりだった。とうとう、我慢出来なくなった長者は、召使いの者にいつつけて、そつとあとをつけさせた。

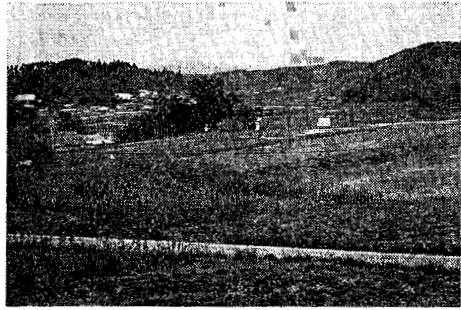
娘は、足早に、どんだん山のほうに歩いていった。山のふもとに、大きな榎（ふの）が茂っている所があった。娘は、その木の陰に隠れるように、ふっと姿を消してしまった。召使いは、あわててあちこちを探しまわったが、娘の姿はどこにも見当たらなかった。

それから、娘は、二度と虎丸長者の家に姿を見せなくなってしまった。いまでも、この地方を隠里（かくれさと）とよび、娘が姿を隠したところを、榎入（いのまり）とよんでいる。

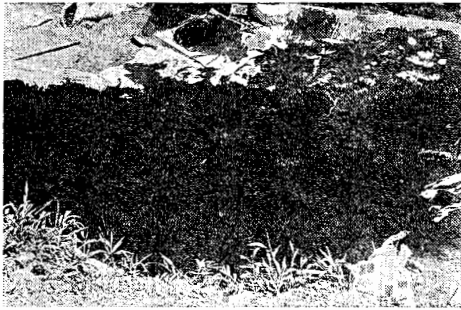
奥州で、安倍氏が朝廷に対抗して勢いを振るっていたころ、長者は安倍氏の軍勢の兵糧などを一手にひきうけて、安倍氏のおしをしていたといわれる。

後三年の役（一〇八三年）で、朝廷の命をうけた源義家は、奥州を攻めるため、八百人の家来をひきつれて、長者官を通りかかった。

雨もよりの空は、夕がたになると、すっかりあたりを暗くしていた。義家は、連日の戦いで疲れている家来たちを、今夜は野宿でなく、人家でゆっくり休ませたいと思った。ちょうど、むこうに大きな屋敷の並んでいるのが見え、明かりがちらち



借宿



掘り出された焼米

た。炎は天を焦がし、何物も然え尽くすように燃えさかっていた。こうして、長者の屋敷は、七日七晩燃え続け、そのあとには、何一つ残らず、荒れはてた焼け野原となってしまった。

このとき義家が、仮屋をつくって野宿したところを借宿（仮宿）と今でもよんでいる。

この出来事から、また何年かが過ぎ去った。

あの、すさまじかった長者屋敷の大火事も、人びとから忘れられようとしていた。

ところが、長者屋敷の焼け跡に、夕暮れになると、一人の見かけない子供が、どこからかやってきて、

「黄金千杯　米千杯　朝日さす　夕日かがやく　三つ葉うつぎの下にある——」

と、悲しげな声で唱えながら、さ迷い歩いているといううわさがたった。

村人の何人かが、焼け跡のあちこちを掘り返してみた。しかし、出てくるのは、まっ黒に焦げた焼き米だけで、宝を見つけた人は一人もいなかった。

◇ 隠れ里

昔、長者より隠里を経て薬師に通ずる道路があった。若い娘が通るのを後をつけて隠里まで来たところ、クスの大木があった。その木の陰になつて娘の姿が見えなくなった。それで、今も隠里と呼んでいる。

クスの大木は今はない。



発掘された建物跡

らしていた。義家は、さっそく家来をやつて、今夜一晚とめてほしいと頼んだ。しかし、安倍氏に味方していた長者は、言葉づかいだけはいいねいに、義家の申し出を断わってしまった。

このとき、ちょうど、雨がパラパラ降ってきた。義家は怒りを押え、長者の本心を知りたいと思つて、ためしに、

「宿を借りられないのは仕方がないが、せめて、笠だけでも、家来全部に渡るよ、貸してもらいたい」と申し出た。

長者は、すぐ召使いの者にいいつけて、倉庫から八百人分の笠と箕を出させて、貸してくれた。まさかと思つていた義家は、虎丸長者の裕福な暮らしに、すっかり驚いてしまった。しかし、長者が、朝廷に対抗している安倍氏に味方していることを見抜いて、長者をこのままにしてはおけぬと思つた。

義家の一行は、東方二町（約三〇メートル）ほど離れた台地に、仮屋をつくり、野宿することにした。きまぐれな雨は、いつのまにか止んでいた。義家の陣屋のあちこちにはかがり火がたかれ、夜も次第にふけていった。

と、ひとつの黒い影が動いて、立ち上つたがと思うと、弓に火の矢をつがえ、長者の屋敷めがけて、ピュウとはながいつせいに動きだすと、火の矢をつぎつぎに射こんでいった。

火の手が、あちからからも、こちらからもあがり、長者の屋敷は、たちまち火の海に包まれていった。風が出てきたのか、火の粉が勢いよく空に舞いあがり、あれよあれよというまに、米を入れた倉庫に燃え移つていった。

しばらくたつても、火の勢いは、いっこうに衰える様子もなく、観音様をまつつてある寺院にまで燃え移つてい



念 仏 太 郎

(6) 館 野

◇ 念仏太郎

昔々、館野に太郎という親孝行の長者がいた。その当時厄病が大流行し、沢山の村人がこの厄病のために死んだ。また、この時太郎の父や弟達も死んでしまい、太郎と母のみが残った。太郎は非常に難き悲しみ、墓地に小さな祠を立ててねんごろに供養した。またその一方、母への孝養も怠らなかつた。とある時、母の歯が急に痛み出したのである。孝心強い太郎がどんな手当てをしても直らず苦しみ続けた。これではと、太郎は神仏の御加護を得たいと思い、土で祭壇を作り、一心不乱に念仏を唱えながら、母の歯の痛みの平癒を祈願すること七日七夜、食をも断って一生懸命に続けた。この思いが天に通じてか、七日目の夜、母の歯の痛みは不思議にも取れたが、同時に太郎は石と化していったのである。この石を人呼んで念仏太郎という。以後、この念仏太郎は歯痛を直す神として戦後まで参拝者があつた。壇の原のすぐ傍の畑の中にある大きな犬が寝た程の石である。

◇ 甘酒地蔵

この地蔵様は甘酒地蔵または別名代掻地蔵ともいう。その昔から赤子を持つ母親が母乳不足の場合、この地蔵様に心願すると必ず乳が出るようになるといわれている。そのお礼参りに甘酒を上げる習わしとなっているので甘酒地蔵という。また、昔、地蔵様前の田を持つ田主が田植をするため、代掻しようとして夜明け前の早朝に倅せがれを起こして先に田に行つた。代掻馬の鼻取をさせるためである。やがて倅が来て上手に鼻取をし代掻を終つた。ところが家に帰って見ると、倅はまだ夢中で寝ていた。田主は驚き、これはと思ひ地蔵様のところへ行つて見ると、地



舟 形 山

◇ 青麻三光宮常陸坊大権現略記

当山(舟形山) 二本松駅より南へ、杉田駅より東へ各二キロ、阿武隈川の沿岸に位置し、眺めのよい所である。

紀元一五一三年、人皇五五代文徳天皇仁寿天台第四世の座主慈覚大師東北御巡錫じんしやくの折此の地に留錫せられ開基せられし所なり。後冷泉天皇の御宇、阿部氏征討として源頼義、義家両公天喜康平年間来りし時、特に勝地たるを以つて当山に逆賊降伏の祈願ありきと云う。開基以来、千有余年の星霜を閱し興廢ありしも今に至る。

常陸坊海尊法師は文武両道に勝れ、源義経公の重臣にして、武蔵坊弁慶と共に併称され、源家の再興に与て力ありし士なり。紀元一八四七年文治三年、義経、兄頼朝との不和を生じ奥州に下る時、共に当山に來り、建久五年第五世として化道八ヶ年の旧跡にして法在中弟子を連れ、京都祇園祭を見物せしめ、一日に往復しぬ。新築家屋に火防の秘法を修せられ、衆人の目前に靈験を現し不可思議事に世人天狗の権化なりと世評専らなり。当地を去て仙台青麻の地に至り、後生青麻三光宮と奉祀された当山の常陸坊大権現即ち之なり。

当山には常陸坊大権現の護持仏身不動尊と称する不動明王の尊像を本地尊として奉安し其の御遺法により中氣除と火難消滅とは二大誓願なり。御靈験顯著にして古より篤信者多し。

尚、他に若干の遺宝蔵し、中にも金の釜と云い伝わる旧湯釜は、法の御使用の遺品にして、この釜の湯を喫すれば、中気を逃れ、御難症者も快癒を速めならしむる御利益顕面なりと伝えられ、之を乞うの仁多し。



三かえりの松

◇ 三かえりの松

トロウミの大内氏の庭に約二間四方のすこぶる立派な、絵に描いたようなすばらしい松があった。藩主長富公はこの松をお城山に移植しようと三度にまたがり来村したが、名木の枯れることを恐れて断念した。そこで、この松を三かえりの松と名付けた。現在は安達高校の玄関前に移植されている。

◇ 石のますめど

江口の江口ぶちと言う所に大きな石がある。その石の中に、縦二〇センチ、横三〇センチ位の穴があり、その穴をますめどという。その穴にもみながらを投ぐ込むと、こわだの弁天様の池に出ると昔から言い伝えられている。

◇ 鏡摺石

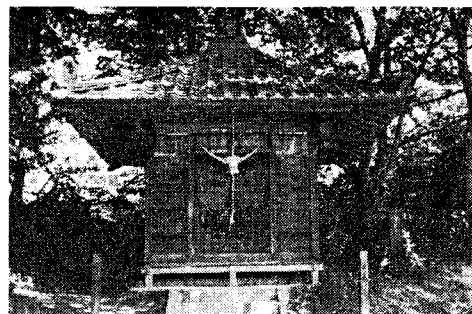
一盃森の川沿いにあぶすり石がある。この石は前九年の役の時に、偉い殿様が敗走して対岸の善応寺に行く時にさわったので鏡摺石という。

◇ オカバミ山

阿武隈川沿いにオカバミ山という所がある。そこはウワバミという耳がはえた蛇がいたのでウワバともいわれている。

◇ 平石

昔から三丁目の所に、平石というたいらな石が埋まっていて、その中に宝物が入っている。しかし、これを見た者の目はつぶれると言われているので誰も見ていな



廿酒地藏

(7) 箕輪

◇ 苗松太郎

昔、猪の苗松太郎は現在の苗松山に住み、時折山麓に下りてきては部落を荒し回ったという。この苗松太郎を退治せんがため強い人達八人が集まり、護摩堂において身を清めて苗松太郎退治に出発した。しかし、頑強な苗松太郎の抵抗にあい進むことが出来ず、これは神仏の加護による外なしと一心に経をとなえたところその一念が天に通じ火の雨が降った。さすがの苗松太郎も火には勝てず、頂上の大きな石に足跡を残し焼失した。以後、部落は荒されることになったという。退治した帰り道、朝となり鶏が鳴いた所を鶏峠といい、八人が集会した所を揃ヶ平、また護摩をたいした所を護摩堂、経をとなえた所を経塚山といい、その地名が残っている。また、後に八人が祀られたのが八王子

様であるという。

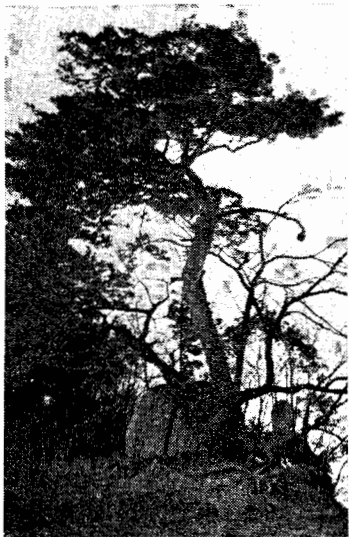
(8) 平石

蔵様が泥だらけになっていたという。地藏様は子供である倅を可愛そうに思い、早朝の暗いのを幸いに地藏様が身変わりとなって代掻の鼻取りをしたので代掻地藏という。

◇ 狐石

館山の東麓に白山原がある。昔の白山権現様の跡地で、そのすぐそばに小さな石がある。人呼んで狐石とも気違い石ともいう。この石はその昔那須野ヶ原の金毛九尾の狐が近辺住民のみでなく、大変偉い方々まで馬鹿にするなどして困らせた。これを聞いた偉い大僧が来てこれを退治しようと待ちかまえた。するとこの狐は石に化けたが、大僧は一刀のもとに切ってしまった。

するとこの石が三つにわかれて飛び、その一つが当地に飛んで来たという。この石にさわると気違いになるとかいわれている。



鈴石

◇ 西荒井の地名のおこり

小浜のお殿様のいる所から西の方に荒地が有ったので、西荒井というようになったとも。昔、道の測量をした時、最後に「西」の地区で測量が終わり、そしてそこで道具を「あら」ったので、西荒井となったともいう。

(10) 鈴石

◇ 弁天壇

鈴石字堀越にあり、弁天様が岩角と木幡の往復の途中休みを取った所という。昔、一人の僧がいて、小石に一切経を書き、書き終えるや柿一連を持ち、経とともに生理めを乞うたという。

ここに一本の老松があったのを、大平の人達が夜半に切り倒し、自分の方の地内に転ばしておいたのを、屋敷の八人でこれを引いたところ、さしもの大松も不思議に動いて取り返すことが出来た。これで造った臼が伝わり残っているという。

◇ 鈴石

鈴石神社の西側の道路を上がっていくと、左側の小高い所に鈴石がある。高さ二メートルばかりで、形は丸く鈴に似た割れ目がある。神社の境内からもこれを見ることが出来る。伝えによると、昔、この石が鳴り、その音が鈴のようであったという。この鈴石は地元の人達から親しまれ、村名にもなった。

この石の下を通る村人に、いつのころからかわからないが、美しい鈴の音色を聞かせてくれていたんだそうである。美しい音色を聞かせてくれてから何年かたったある日のこと、村の若者、健作が好奇心にかられて、この大石の

中には、何かがあるのではないか、その何か、美しい音を出しているのではないか、何かして何だろう、と考え出すといつてもたつてもいられなくなり、思い切つてあの大石を割つて中を調べてみよう……………。

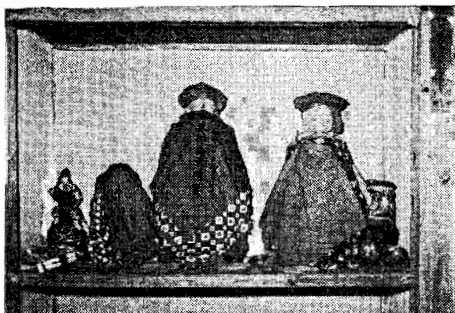
さつそく実行に移すことにした。村の石屋さんから大きな槌を借りてきた。健作は以前石屋でこなどしたことがあるので、石目というのがわかる。どこをたたけば、この石が半分に分れるか一目でわかった。健作は振り上げた槌を「えい」とばかり力を込めて石目をめがけて振り降ろした。「ガーン」とものすごい音がまわりの山にこだましました。大石は見事に二つに割れた。健作はやれ喜しとばかり急いで中を見た。「なあーんだ。」健作はがっかりした。素晴らしいものがあるのではないかと期待していたのに、中は普通の石と同じである。「これは、失敗したわい。」とぶつぶつ言いながら、金棒を使って割れた石を合わせた。

それっきり、この石は鈴石と言われるような、あの美しい音色を出さなくなった。村人のなかには、健作の乱暴を戒めながらも、「実は、おらも中がどうなつてんのか、一度見てみたかったんだ。」と言う人もいた。二度と美しい音色を出さなくなった鈴石であるが、その音色を聞いたという人は、現在生存していないし、音を出していたという語り伝えしか残っていない。

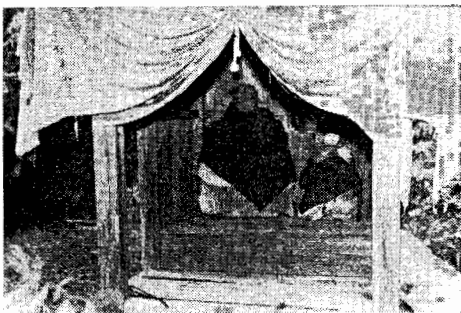
昔、親に結婚を許されなかった美しい娘が山の中で泣きじゃくるうち、そのまま鈴の形の石に化してしまい、夜中にリンリンとまるで鈴が鳴るような妙な音を発した。その鈴石に、娘たちが恋の成就を祈るとすばらしい良縁にめぐまれたという言い伝えもある。

◇ 万海坊

今から三百年以上も前のこと、万海坊という法印様が日本中の修験場をまわつて、出羽の国の羽黒山にもどり、しばらく



子育て地藏



池地藏

池に落ちることもなく、怪我をする子もなくすくすくと育ったそうだ。あまりにもお地藏さんのお力の有難さに、村の人はもったいなく思い、立派なお堂を建ててそのお地藏さんを安置してお祭りしたが、しばらくしてから、お地藏さんに移した家の者は得体の知れない熱病にかかり苦しんだそうだ。近所の人達がお地藏さんを元の位置に戻したら熱病も直り、子供も元気に遊べるようになったそうだ。このお地藏さんを池地藏とよんでいる。

くしてから再び修行に出かけることになった。岩代国安達郡鈴石村の行屋に行き、修行の結果さとりをひらいた。ある年のこと、鈴石村に不思議な熱病がはやり、村人達は次々とかかつては死ぬ人が増えていった。行者達は一生懸命折ったが熱病は止まらず、このままでは村がなくなってしまうのではないかと思われた。万海坊はある日のこと、村人を呼んで次のように伝えた。

「わしが生き埋めになって、この病から村人を救おうと思う。餅四九個、柿一連、水一桶を用意してください。わしが入れる位の穴を、この松の木の根本に一〇間程掘ってください。そしてわしを入れるのじゃ。」

村人はびっくりして止められ、万海坊のきびしい声に承知して穴を掘った。その中に入れてもらい、用意してもらった物も降ろしてもらい、竹筒を真中に立て土をかけてもらった。その最中もお経をとなえ続けた。土をこんもりと高くし、竹筒が真中から出て、そこから万海坊の祈りのお経と間をおいて聞こえる鉦の音がしてくるだけであった。村人は両手を合わせ「なんまいだ。なんまいだ。」と口の中でブツブツ言いながら我が家に帰っていった。

それから後、村人が田畑や山の仕事の行き帰りに、そこを通ると竹筒の先から「まんけえ坊様」と呼びかけると、「チーン」という鉦の音が返ってきた。それも百日位続いたそうだが、ついに聞こえなくなった。

万海坊の話でいっぱいになっていた村から、いつの間にか熱病は消えていった。

◇ 子育て地藏

和田から四本松へ抜ける街道の端に小さなお地藏さんが立っている。子供が生まれてから七日目の朝、赤子に晴れ着を着せてお地藏さんの前にそっと置いて家に帰り、半刻（一時間）程してから赤子を取りに行くと、その赤子は病氣一つせず丈夫に育ったという話が残っている。

ある年の春のこと、生まれて七日目の赤子をお地藏さんの前に置き、どんなことをするんだべと、部落の人々といっしょに、物陰に隠れて見ていると何事もなく半刻が過ぎてしまった。これでも丈夫に育つんだべかと家に戻り育てていったが、この子は弱々しく育ち、二歳になった夏の夜、とうとう亡くなってしまったとのことである。お地藏さ

んに見てもらったのになんだべな、隣の子供は丈夫で、うちの子だけ何で死んだのかとよく考えてみた。あつ、そうじゃつた、赤子を連れて行った時、みんなして隠っち見ていたつ。あれが悪かつたんだべ。うんだな、そうかもしんねえと、そんな話が村中に伝わり、その先の村にも伝わっていき、近郷近在の評判になっていった。遠くから来た人は赤子を置いていくのに少々不安があつたが、赤子が丈夫に育つのでそれもなくなった。親達は丈夫に育ててくれたお札にと、赤い着物をお地藏さんの体に巻いて着せてきた。

その後は子供が生まれると、お地藏さんに赤い着物をあげて、子供が丈夫に育つようお願いしたところから、このお地藏さんを誰いうとなく「子育て地藏」というようになった。

◇ 池地藏

米五町にある池のそばに小さなほこらがあつて、そこに小さなお地藏さんが祭られている。近所の子供達が池の回

◇ 弘法橋

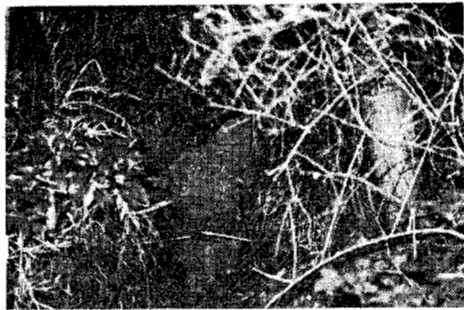
松が作から流れ、米子田を通って浅川に入る小さな川がある。その川にかかる石の橋を「弘法橋」と呼んでいる。昔々、弘法大師という偉い坊さんが仏教を広めるためと、日本国中の様子を見たり、困っている人々を助けるために、日本中を回って歩いていた。阿武隈山地から四本松に来て、鈴石村に入ってきた。松が作まで来たとき、村人が川を渡るのに難儀していることを聞き、その川のところに来てみた。見ると川は小さいのだが深いので、男子でも飛び越すのにちゅうちよするような所である。丸太をなぜ掛けないのかと聞くと、雨が降るたびに山の川の水が増えて、丸太が流されてしまったり、丸太の上を渡った人が足を滑らせたり、丸太が回って川に落ちて怪我をしたことなどを坊さんに話した。それを聞いた坊さんは、あたりの山に入って平らな石を探してきた。村人はそんな小さな石で橋が出来るものかと見ていると、坊さんは何かお経を唱えながら持ってきた石を向こう側に渡すようなしぐさをする。と、あら不思議、届きそうもなかった石がびたっとこちら側から向こう側へ収まって石橋になった。これには村人はびっくりした。

坊さんは盛んにお礼を言う村人達を後にしていずくともなく去って行った。村人達は、これで怪我人も無くなるし、流される心配もなくなったので安心した。

後になって、小浜の人達からあのみすぼらしい坊さんは弘法大師であると聞いて再びびっくりした。それでこの橋を「弘法橋」と名付けて、いつまでも弘法大師に感謝の気持ちを残そうとしたのである。

◇ 大清水

岩ノ作まで来られた弘法大師は、飲み水に困っている村人の様子を見たり聞いたので、どうにかして飲み水を探がしてやりたいと、あちらこちらを歩き回った。そのうち何かを感じられたのかお経を唱え始めた。しばらくお経を唱えていた弘法様が前の山を指差し始めたので、村人達は何事であろうと、その指先の山を見ると、木と木の間から光るものが見え始め、帯のように長くなって谷に落ちていった。じっと見ていた村人の中から大きな声が「あ



大 清 水

つ、水だ、水だ。」と言った。急いで谷を降りて向い山に行く者もいた。見ると大木の根本の窪んだ所からきれいな水がこんこんと湧き出ているのではないかと、村人達は大喜びした。

「これでもう飲み水に不自由することはなくなったわ。有難てえこっちゃ。」

「あの坊さまに礼を言わにやあなんねえな。」

と、わいわい言いながら戻ってくると、先程の坊さんはどこへ行ったか姿は見えず、いずれかに立ち去った後だった。村人達は、ポカーンとして狐につままれたような顔をしていたが、そのうち誰かが

「あの坊様は、都のえれえ坊様でねえべか。おら達の難儀を知って、都から来てくつちやんでねえべか。」

「有難てえこっちゃ、有難てえこっちゃ。」

と、口々に言っている坊さんが去っていったと思われる方角に向かって、いつまでも手を合せて拜んでいたそうだと、清水は今でもかかれることなく湧き出ているという。

◇ 八坂神社と坂上田村麻呂

昔、坂上田村麻呂がえぞ征伐に来た時、一時負け戦で逃げ回った。鈴石村まで逃げてきて姿を隠し休む所を探したが、神社の中や山の中ではすぐ見つかりそうなので、きゅうり畑の中に入って横になっていたら見つからず、敵が去ったあと八坂神社の中で作戦をたて出かけていったという。偉い將軍を救ったきゅうり、ということ、その後作らなくなったそうである。

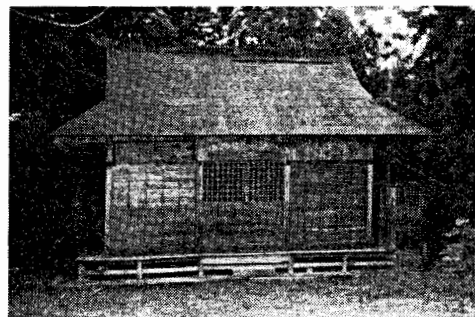
◇ 八坂神社の神様ときゅうり

八坂神社の神様がみすぼらしい姿に自分をかえて、村の様子を見にいかれた時のことである。作物の出来具合など

また、うわばみの首が飛んでいった山を今もうわばみ山と言っているそうである。新倉のお墓ではないかと思われる石碑も残っている。

◇ 産土様

昔々、栗ノ木内の藤三夫婦は、子供のいなさびしい毎日だった。それというのは、二人に子供がさずかっても、乳もあまり飲まず、弱々しくて大きく育つまでにはいかず、どこが悪いともわからずに死んでしまうのである。三人もの子供をそのように亡くした夫婦は半ばあきらめていた。が、四人目の子供が女房の腹の中にさずかると、今度こそは丈夫に育てたいと思ひ、あちらこちらのお宮さんや、お寺さんにお参りに行ってお願いした。それでも心配な



八坂神社

それからきゅうりを作らなくなった。

◇ うわばみ山

うわばみは、自分の姿を隠して通りかかる村人を襲っていた。村人の中には、足や腕を食いちぎられる者もいて、大変な難儀をしていた。うわばみをやっつけようにも、姿が見えないので、どうしようもない。何とかして、うわばみをやっつけてやろうと、新倉は考えていた。しばらく考えているうちに、あることを思いついた。それは、新倉の家の宝である刀は、今まで何回も自分の命をすくってくれたことがある。その刀を使えば、きつとうわばみの姿を見つけ、退治することが出来るであろう、と考えた。

新倉は考えつくとも、いてもたってもいられない。はやく、うわばみを退治して、村人の難儀を救ってやらねば、と夜明けを待ちかねて、宝刀をさげて家を出た。寺の前の道を戸ノ内の方へ行ったり来たりした。いつ襲いかかってくる

を見ておられたら、村人がそれを見つけて「怪しい奴がいるぞう。」とどなったので、神様はあわててそばの畑に飛び込んだ。あいにくとそこはきゅうり畑であったので、きゅうりのとげが神様の目に当り、神様の目の前は急に真暗になってしまった。体中ひりひりするが、村人が去るのをじっと隠れて待っていた。村人の話し声の様子から遠くへ行ったことを知った神様は、神社の方へ手探り足探りで帰って行った。

あくる日、村人達が再び集まって、きゅうり畑の回りを探してみると、誰かが這いずった跡と血がポツンポツンと落ちてるのが目についた。村人が血の跡をたどっていくと、神社の拝殿の中に血の跡が入っている。戸を開けて中をのぞくと、御神体の所で消えている。村人は驚いた。拝殿の前に土下座して、何回も何回も頭を下げてあやまった。

るともわからない。うわばみを待ちながら歩いていった。道路と浅川がくっついたり、離れたりにしている。何回目の時かよくわからないが、もう辰の刻は過ぎて、もうすぐ巳の刻(午前十時)になるとい頃、浅川が道路にくっついてきたところにさしかかった時、腰の宝刀が「カチカチ」と音をたてた。「はて、何事であろう。」と新倉は立ち止まって、あたりを見まわした。が、何も見えない。今度は激しく「カチカチカチ……」となり、刀身が抜けてさうになった。「さては、この宝刀がうわばみの気配を感じて、私に知らせているのであろう。」と思ひ、あたりに気を配りながら身構えた。再び、前よりも激しく宝刀が鳴ったので、刀のつかに手をかけ、大きく目を見張った。するとどうだろう。抜こうともしない宝刀がスーと抜けてきた。太陽の光が当ってキラリと光った。宝刀だけあってすばらしい光だ。すぐくまぶしいことには驚いた。新倉自身もその光には初めてなのでびっくりした。

身を隠していたうわばみも、まぶしい光に驚いて姿を現わしてしまった。今にも新倉に飛びかかろうとしている姿である。それを見た新倉はすばやく刀を横に払った。うわばみの首が空高く舞い上がり、向かい山に飛んでいった。夢中だった新倉が我に返ってよく見ると、首のない太いうわばみが道ばたの細い畑の中に横たわっている。村人に見せないために、急いで穴を掘って埋めてしまった。改めて宝刀の有難さを知らされたし、今後はより一層我が家の宝物にしようと思ひ、大切に保管したそうであるが、今はどこに残っているかわからない。

また、うわばみの首が飛んでいった山を今もうわばみ山と言っているそうである。新倉のお墓ではないかと思われる石碑も残っている。

◇ 産土様

昔々、栗ノ木内の藤三夫婦は、子供のいなさびしい毎日だった。それというのは、二人に子供がさずかっても、乳もあまり飲まず、弱々しくて大きく育つまでにはいかず、どこが悪いともわからずに死んでしまうのである。三人もの子供をそのように亡くした夫婦は半ばあきらめていた。が、四人目の子供が女房の腹の中にさずかると、今度こそは丈夫に育てたいと思ひ、あちらこちらのお宮さんや、お寺さんにお参りに行ってお願いした。それでも心配な



産 土 様

で、大門に行つて法印様に拜んでもらつたところ、法印様が言うには、「藤三よ、栗ノ木内に小さな祠ほらがあるじやろ。産土様うぶすなと言つてな、お前達を守つてくれる神様じや。その神様をこのところ何十年もお祭りしたことがないじやろ。粗末にしておるから神様がおこつてゐるんじや。これから帰つて、すぐにきれいに掃除をし、毎年春秋二回お祭りするようにな。そうすれば、子供が生まれても丈夫に育つであらうよ。」

藤三は急いで我が家に帰り、部落の奥に祭られている産土様へ行つた。なるほど、法印様が言われた通り、みるかげもなく荒れている。さっそく回りをきれいにし、祠も小さいながらも建て、御本体をお祭りして、我が子が無事に生まれてくることと、丈夫に育つことをお願いした。藤三の女房も大きな腹をかかえて、一生懸命にお願いした。

しばらくして、無事に生まれた子供は丈夫に育ち、元氣よく遊びまわり大きくなっていった。このことを伝え聞いた部落の人達も「ははーん」と思いあたるようなうなずき合った。それから後、お参りする人が多くなり、春秋の二回、お祭りもするようになった。

◇ 観 音 堂

昔、五月町の観音堂の近くにあつた家の人が農作業をしていて、夕方暗くなつてきたので、くわを洗つて家へ帰ろうと思つて、箕防内川へ行き、くわを洗つていると、上の方から何やら流れてくるのを見付けた。はて、何であろうと思つて川からあげてよく見ると、木彫りの観音様であつた。その人はびっくりしたが、観音様とわかつては、そのままにして家に帰つてしまふわけにはいかず、背負つて帰つてきた。家の中に置いて、改めて見直すとすばらしい仏様である。おかみさんもびっくりしたが、二人でよく相談した結果、自分の家に置いては、ばちがあたるんでは

ないか、かといつて外に野ざらしにして置いたんじや尚更のことばちがあたると思つて、家のわきに小さな掘立て小屋を作つて安置したんだそうさ。それがいつの頃かはわからないが、今のようなお堂になつたんだそうである。

◇ 道 祖 神

近くの村に、ひどいアバタ面の与太郎という男がいた。結婚する年頃になつても、顔がひどいためお嫁さんに来てくれる人がいないし、世話をしてくれる人もいない。与太郎は、自分と同じ位の年齢の若者が結婚する話を聞くと、うらやましくて仕方がない。あげくの果ては憎らしくなつてくる。

ある日のこと、与太郎は良からぬことを思いついた。自分の思いをとげるにはこれしかないなあ、と考へついたのである。

何日か過ぎて、近くの部落の若者が結婚するという話を聞いた。さっそく実行することにした。覆面をして、道祖神様の陰に隠れて待ち伏せをするのである。その前を花嫁行列が通り過ぎようとした時、飛び出して行つて、花嫁をさらうて行つて、山の中でいたずらをするのである。一度成功すると、そのことを何回も何回も繰り返したものだから、うわさが広まって、花嫁は道祖神様の前を通つてはならない、というようになってしまったのである。

与太郎は、その後、お役人につかまつて牢屋に入れられてしまったということである。

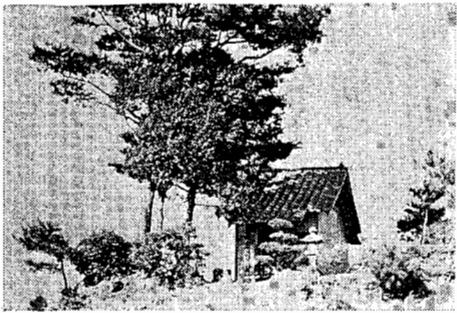
◇ 穴 地 蔵

新生町から米五町を通り、八坂町へ行く道路のわきに、今ではあまり知られていない、いや、忘れられてしまつていたお地藏さんが大きな石の洞窟の中にひっそりと立っていた。

この道路は、昔、二本松から小浜に行く大切な道路で、当時までこぼこ道で、幅も七尺位の狭い山道だった。



道 祖 神



蛇王権現様



藏地穴

昔、寒い冬のある日、雪の降る中を、一人の旅人が背中を丸めながら小浜への道を急いでいた。北向きの道路のため、吹きだまりが多く腰まで雪につかりながら、気持ちは急いでいるため深みに入ったり、川に落ちそうになったりして容易に進めない。とうとう力尽きて、もう一歩も進めなくなってしまう。食糧の持ち合わせもなく腹は減るばかり。近くに家もない。方角も分らず、強い風のため目も開けていられない程だった。もう死ぬだけだな、と思うと心が自然と落ち着いた。雪の中で一心にお祈りを始めた。どの位の時間がたったか、目の前にお地藏様のお姿が現われて手招きをしている。その手招きに引き込まれるように旅人は足を動かして行った。すると、肌にあかさを感じるようになり、「はっ」とわれに返ってあたりを見回すと、そこは三方が大きな岩に囲まれた洞窟で、十人位の人が入れそうな広さだった。奥の方には、お地藏様がにごやかなお顔で立っておられた。入口が狭いので風も入らず、とても暖く感じた。「ううーっ、私は助かったんだ。これも、お地藏様のおかげ、有難うございました。」と何回も何回もお地藏様にお礼を言った。今夜はここに泊めてもらうことにして、枯葉の上に横になったがどうも眠れない。落ちてくると、腹の虫が鳴き出したので、お地藏様が上がっている、藁筒の中のお赤飯を頂くことにして、お地藏様にお許しを貰って食べたが、秋祭りに上げたお赤飯なので、「干し飯」のように固くなっていたが、腹が減っているのでけっこうおいしく頂いた。腹が一杯になると、元氣も戻り、ぐっすりと眠った。

翌日は、昨日の吹雪もうそのように晴れ上がり、雪の中、道行く人も見られ、お地藏様に何度も何度もお礼申し上げてお浜の我が家に戻ったということである。

後に、この話が近郷近在に知れ渡り、御利益のあるお地藏様として、遠くの村や町からお参りに来たということである。また、お伊勢参り、善光寺や成田山詣は、昔は何十日も自分の足で歩いて参詣したものであるが、お礼参りはこのお地藏にした、と聞いている。

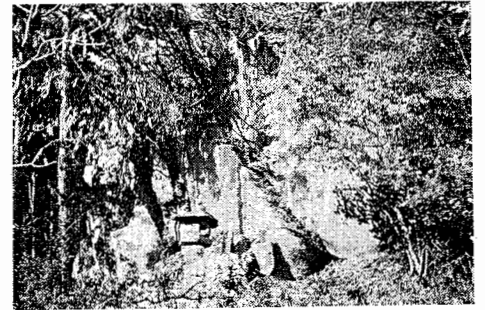
現在も、秋祭りがやってくると、近所の人達は草刈りや清掃をして、新しい藁つつこに新米のお赤飯を入れてお供えして、お地藏様との出会いを大切にしている。

◇ 蛇王権現様

昔、昔の大昔、竹ノ花に権現様が祭られていた。権現様は靈験あらたかな神様としてお参りに来る人が沢山あったということである。その権現様のわきに、太いケヤキの木が立っていた。ケヤキの木には、下から二メートル位の所に直径三センチ位の穴があった。小鳥の巣かな、と思っていた吾助はある日のこと、その穴から大きな白蛇が出てく

るところを見てびっくりした。しばらく見ていると、白蛇は何かをくわえて帰ってきた。吾助は、何をくわえているのかよく見えなかったのであるが、どこからか何かをとってきたんだな、と思った。そして、こう考えた。
 「我が家にいる、ひよこがとられたら困っちゃうな。ひよこがとられねえうちに殺してしまわねばなんねえ。」そう考えつくと、すぐ家へ飛んで帰り、三升だきの鉄びんに湯を沸し、熱湯にして持ってきた。踏台も持ってきて、それに上がり、まだ音を立てている鉄びんの湯をケヤキの木の穴にそそいだのだった。白蛇は………そう、死んでしまったのである。

吾助は一応安心して家の仕事を一生懸命するようになったある日のこと、父親が風邪を引いたことから、熱が高くなり看病のいかにもなく亡くなってしまった。それから、四、五日たった頃、家内のおさよが、これまた熱病にかかり、熱が下



不動滝

がらないまま亡くなってしまった。その後は次々と母親や子供達が同じような熱病にかかり、最後に吾助が熱病にかかって死んでしまい、一家は全滅してしまっただのである。

そんなことがあってから、村人は、白蛇は神様のお使いであり十二支のひとつの守り神でもある蛇だから、殺してはいけないのだと今でも言い伝えている。

◇ 不動滝

昔、大門に不動滝といって七滝があった。ここには大きな石倉があって、その中に有難いお不動様が祭ってあったそうである。石の上には行屋があって、出羽三山のお山めぐりに出かける時や修業に行っている人がいると、屋敷の人々が集まって無事に修業が終わるようお祈りしたということである。この石の下には、源八幡太郎義家がえぞ征伐に來た時、馬が疲れた時かわりに乗った牛の爪跡があったそうである。また、石のわきには「亀井の清水」という湧水わきみずがあって、昔の人は金の杓子しやくしで飲んで長生きをしたそうである。

鈴石小学校の辺りを石合と呼んでいた。だから、校歌の三番に歌われている、「岩うち走る 石合の」の歌詞になっ

◇ 経 壇

鈴石村の松ヶ作と、大平村、小浜町の境にある小高い丘を、「経壇」と呼んでいる。

昔々、この鈴石村に「はやり病い」がまんえんした時、万海坊さんもそうだったが、今ではその名もわからない行者さん達が、村人の難儀を救うために、一心不乱にお経を唱えながら、そのお経を書いていったのである。写経という。その写したお経の何巻かをここに埋めたといわれている。

ここを通る時は、昔から押んで通るならわしになっていたが、今では殆んどそのような姿は見られなくなった。

◇ 泣面石

昔々、松ヶ作の行の内というところに、このあたり一帯の長者がいたということだ。ある年取りの晩にむしろぶちをしていたら、「おーい、長者どん。長者どん。」と言う声が聞こえてきたので、はて、誰だべとあたりを見まわすと、屋敷のぐしのやぐらから大きな手が二本出ている。長者は何の手であろうと見上げてみると、再び上から声がしてきた。「お前、そんなに忙しいのなら、おらが手伝ってやっぺか。」

長者は、その者の顔を透かし見たり、手の大きさ、声の太さにびっくりして腰をぬかしてしまった。そのことがシヨックになって、長者は寝こんでしまった。そんなことがあってから、長者の家はさびれるばかり。長者が病で亡くなってからは、家は傾きとうとうつぶれてしまったという。

この様子を、長い間長者の前にあった石が見ていたのである。この石にも心があつたのだろう。かわいそうに思い、毎日涙を流したということだ。今でも涙を流したように見えるので、村人達はこの石のことを「泣きつら石」と呼んでいる。

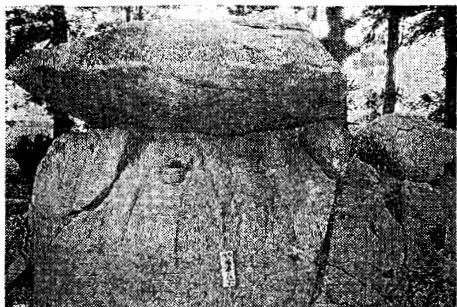
◇ 加賀壇（朝日長者伝説）

昔々、芹ノ沢地内に加賀壇と言われる所があった。今でも、そこから宝物が出るのではないかと、言われているところである。

どういうわけで、この鈴石村に移り住んだのかよくわからないが、加賀の国から来た人が熊野様を大変信仰したそうである。現在、皆さんが知っている熊野様は、芹ノ沢に祭られている熊野様で、足尾様と一緒になのでよく知られているところなのですが、道路から大分引つ込んでるので、通る人にはよくわからないか



経壇



鬼の岩屋

この女は、元、京の公卿邸に仕えて、口のきけない姫君の養育に当たっていた岩手という乳母であったともいわれる。妊婦の肝が啞の妙薬だと聞いて、岩屋に住んで妊婦の現れるのを長年待った。ある日待ち望んでいた妊婦がやって来た。それは伊駒之助夫婦だった。妊婦はここで急に産気づいたが難産となり、伊駒之助は薬を求めに走った。その留守に、岩手は「いまこそ」とばかりに襲いかかった。妊婦は苦しい息の下で「親を尋ねて歩いて来たが、その親に会えずに果てるのが残念だ。」という。急いで妊婦の守り袋をあけて見ると、なんとそれは我が子に持たせたものではないか。驚愕のあまり、岩手はついに鬼と化して、宿を求め旅人をあやめては、血を吸い、肝を食らう鬼婆になったという。

も知れない。

その芦沢の熊野様と、あかしうちの熊野様、藤治内の熊野様の三熊野様によくお参りに行った人で、「私が死んだら、この三熊野様の見える所に埋めて欲しい。その時、油千ばい、金千ばい、うるし千ばいを持って埋まりたいし、埋めて欲しい。」といつも家族の者に言っていたそうで、死んだ時にその通りにしたそうである。

その後、この話を言い伝えてきた子孫が、話にもとづいてこの場所を掘って探して宝物をさがそうと思ひ、一日掘っても探し当たらないので、明日こそこの続きを掘って探し当てようと、次の日その場所に行くと、昨日掘った穴は埋まっていたので、「誰が埋めたのだろう。」と不思議に思ひながら、今日もまた精を出して掘っても探し当らず、明日また続けようと思ってそのままにして帰って、次の日行くとまたまた昨日掘った穴は埋まっていたのである。そんなことを何回か繰り返しているうちに、何だか馬鹿馬鹿しくなり、また、何かわけがあるんじゃないかと思ひ、気が悪くなり、宝物が見つからないうちにやめてしまったということである。

(1) 大 平

◇ 片葉よし

前九年の役で、源義家の射た弓矢に片側の葉が切り取られた。その子孫が今も谷地に片葉で生えている。

◇ 螺 石

東光坊が鬼婆に追われ、持っていた螺貝を棄てた。それが螺貝の形で石となって、諸越谷の畑の中に有る。

◇ 三度返り

東光坊が鬼婆に追われ、同じ道を迷って三度駆けめぐったという。

◇ 安達ヶ原の鬼婆

二本松から針道へ向かう針道街道から北へ入って間もなくのところに真弓山観世寺が、その境内に鬼の岩屋、鬼婆

の石像、観音堂などがある。寺のうしろの丘陵は安達ヶ原公園になっている。また、門を出て左にちよつと行くと黒塚があり、杉の大木が枝葉を茂らせ、陰々としている。

歌枕としても知られた安達ヶ原は、平兼盛の歌に「みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもりと聞くはまことか」(大和物語)と詠まれてるように、鬼との結びつきは古い。

聖武天皇の神龜三年(七二六)の秋のこと、熊野修験の東光坊阿闍梨祐慶という僧が安達ヶ原で行き暮れて、とある民家に泊まったところ、折しも夜寒の節であったので、女主が「そのあたりの柴を折って来て、焚火にあて申そう。そなたは決して寝間を見給うな。」と言って外へ出た。その留守に、祐慶は不審に思つてももの透き間から覗いたところ、屍が山のようにあるのでびっくりして逃げ出した。女が帰ると、客が逃げたのを知って追いかける。その有様はまさに鬼の姿そのままであった。祐慶はもはやこれまでと笈をおろし、如意輪観音に対して必死に祈願をこめ、ついに鬼女を呪い殺すことが出来たという。黒塚は鬼女のなきがらを葬ったところといわれる。

| 伝説名 | 地区名 | 出典又は調査員 | 伝承者 | 伝説名 | 地区名 | 出典又は調査員 | 伝承者 |
|----------|-----|----------|------|--------------|-----|---------|------|
| 牛石 | 二本松 | 「積達古館弁」 | | 苗松太郎 | 館野 | 国分逸作 | 佐藤武雄 |
| 居蛇沼の龍 | 塩沢 | 「塩沢村郷土誌」 | | 三かえりの松 | 平石 | 渡辺武久 | 鈴木利寿 |
| 鴨壇 | | | | 石のますめど | | | 大内正吉 |
| 雨乞不動尊 | | | | 鍬摺石 | | | |
| 赤目鱧石 | | 加藤安次 | 丹治征 | オカバミ山 | | | |
| 木の根坂 | | | | 平石 | | | 大内徹男 |
| 元岳温泉と梵宇石 | | | | 西荒井の地名のおこり | 西荒井 | | 遠藤イネ |
| 足利の七本桜 | | | | 弁天壇 | | 石井公民館資料 | |
| 機織御前 | | | | 鈴石 | 鈴石 | 「鈴石の昔語」 | 大内豊 |
| 黄金長者 | | | | 万海坊 | | | 鈴木周二 |
| 泣き石 | | | | 子育て地蔵 | | | 大内満雄 |
| 乳地藏 | | | | 池地藏 | | | 鈴木長正 |
| 田中神社の由来 | | 「塩沢村郷土誌」 | | 弘法橋 | | | 渡辺弥一 |
| 鷹森山 | | | | 八坂神社と八坂上田村麻呂 | | | 渡辺弥一 |
| 熊野宮の由来 | | | | 八坂神社の神様と | | | 渡辺弥一 |
| 湯坂の由来 | 永田 | 根本清七 | 根本清七 | うわばみ山 | | | 渡辺栄二 |
| 木の旗 | | | | 産土様 | | | 渡辺栄二 |
| 縁切り松 | | | | 観音堂 | | | 渡辺武市 |
| 硯石 | | | | 道祖母 | | | 大内豊 |
| 鬼面石 | 原瀬 | 「福島県の伝説」 | | | | | |

| 伝説名 | 地区名 | 出典又は調査員 | 伝承者 | 伝説名 | 地区名 | 出典又は調査員 | 伝承者 |
|---------|-----|------------|--------|---------|-----|---------|-------|
| 大三の鬼退治 | | | | 穴地藏 | | | |
| 七夜桜 | 杉田 | 「福島県のむかし話」 | 春日正夫 | 蛇尾権現様 | | | 渡辺伝四郎 |
| 石塚 | | | 佐久間太喜蔵 | 不動滝 | | | 橋本善光 |
| 姫小松 | | | 増田千代吉 | 経壇 | | | 佐藤義寿 |
| 虎丸長者 | | | 鈴木義秋 | 泣面石 | | | 渡辺ヨシノ |
| 隠れ里 | | | 佐藤顕照 | 加賀壇 | | | 渡辺幸吉 |
| 青麻三光常陸坊 | | | 国分逸作 | 片葉よし | | | 中村智明 |
| 念仏太郎 | 館野 | 「福島県の伝説」 | 本多シン | 螺石 | 大平 | 渡辺章 | |
| 甘酒地藏 | | | 安達幸保 | 三度返り | | | |
| 狐石 | | | | 安達ヶ原の鬼婆 | | | |

〔付記〕

○ 出典についての補足

「福島の伝説」 角川書店 石川純一郎・竹内智恵子著（「鬼面石」所載）

「福島のむかし話」 株式会社日本標準 福島県国語教育研究会編著

○ 「福島の伝説」 株式会社日本標準 福島県国語教育研究会編著（「虎丸長者」所載）

○ 二本松市の口頭伝承資料には既述の他に次のようなものがある。

「ふるさとの伝え語り——二本松市史資料叢書——」 二本松市教育委員会

「続ふるさとの伝え語り——二本松市史資料叢書——」 二本松市教育委員会

二本松市文化財基礎調査カード及び録音テープ（県教育委員会へ提出の昔話・伝説資料）二本松市教育委員会（渡辺武久調査員採録）

○ 伝説の掲載に当たって、文体と表記を出来るだけ統一しようとしたため、原話に手を加えたところがある。

資料提供者並びに協力者一覽

(順不同)

〔二本松地区〕

| | | |
|-------|-------|---------|
| 相原達郎 | 相原秀郎 | 安齋忠直 |
| 伊藤真一郎 | 伊藤徳衛 | 井上善治郎 |
| 大河内政喜 | 大槻哲男 | 岡村ヒロ |
| 川崎文蔵 | 川名勝顕 | 桑田千代子 |
| 斎藤正太郎 | 斎藤宏 | 崎田徹 |
| 佐藤タイ | 塩田四郎 | 菅野義雄 |
| 鈴木弘治 | 高橋タイ | 滝本透 |
| 田中アサノ | 中川一郎 | 根本喜一 |
| 橋本明 | 橋本与吉 | 蓮見米 |
| 平館康治 | 水田俊一郎 | 水田莊介 |
| 宗形睦子 | 諸橋キイ | 横山初美 |
| 渡辺一郎 | 二本松神社 | 福島中央新報社 |

〔塩沢地区〕

| | | |
|--------|------|------|
| 安部専次 | 加藤淳 | 加藤喜作 |
| 加藤豊 | 加藤吉郎 | 斎藤市 |
| 斎藤茂 | 斎藤重蔵 | 斎藤正次 |
| 斎藤六右衛門 | 佐藤秀司 | 高場一 |
| 滝本京司 | 内藤光吉 | 村松惣一 |
| 渡辺新一 | | |

〔岳下地区〕

| | | |
|-------|-------|-------|
| 安達ミヤ | 阿部盛保 | 井上善夫 |
| 今福佐一郎 | 大内一次 | 斎藤秋男 |
| 斎藤ハツイ | 佐藤一郎 | 佐藤一彦 |
| 佐藤トメ | 佐藤末治 | 佐藤みゆき |
| 菅野正 | 鈴木一 | 鈴木寛 |
| 鈴木太一 | 鈴木マス | 鈴木吉寿 |
| 鈴木吉亟 | 丹野寛一 | 根本治衛 |
| 橋本大助 | 原瀬寅蔵 | 馬場保 |
| 穂住忠 | 山下藤吉 | 遊佐ウノ |
| 遊佐登美夫 | 遊佐与一郎 | 竜石堂藤輔 |

渡辺利百

〔杉田地区〕

安達幸保
市川清治
金沢正作
国分作一
佐藤顕照
鈴木鉄造
本多虎男
増田ヨシ子
渡辺征二
渡辺与四雄

安齋範尾
大内勝司
熊耳重允
国分一
菅野啓蔵
鈴木長寿
本多登
松本清雄
渡辺正

安齋武
小国清一
桑野正夫
佐々木兵作
鈴木一男
高根ハツイ
本多幸男
村田喜久
渡辺午治

〔石井地区〕

安齋清一
安齋武三
安齋登
大内勝美

安齋清三
安齋長市
安齋政力
大石三郎

安齋宗吉
安齋利次
遠藤善一
大内栄一

大内勘四郎

大内長安

大内嘉正

桑原ナカト

佐藤一美

杉内鉄二

菅野亀代一

菅野弘道

鈴木喜一

渡辺一正

渡辺武治

渡辺晴美

渡辺睦

舟場新和会

大内清蔵

大内英雄

桑原勝司

桑原美佐男

佐藤義直

菅野栄治

菅野清治

菅野美好

鈴木新吉

渡辺幸吉

渡辺伝衛

渡辺正一

渡辺ヨシノ

大内徹男

大内満雄

桑原今朝治

桑原ムメヨ

穴戸武三

菅野勝夫

菅野照夫

菅野幸男

渡辺イシエ

渡辺惣弥

渡辺トキ

渡辺正夫

観音寺

〔大平地区〕

阿部勇
大内正好
神野徳

安部正八
奥山アキ
斎藤泉

岩本政雄
奥山奨
佐久間仙樹

佐藤行正
松本治一
渡辺国雄

高橋 伝
松本正義

田卷久正
武藤セシ

〔安達町〕

安齋勝己
安齋政一

〔福島市〕

福島県教育委員会
福島県歴史資料館
福島県立図書館
福島市史編纂室

〔本宮町〕
浦井喜立

〔東京都〕

舘脇徳蔵

二本松市史編纂顧問・専門委員（順不同）

| | | | | |
|------|-------------------------|--------|----------------------|--------|
| 顧問 | 元福島大学教授 | 故庄司吉之助 | 伊達郡梁川町立山舟生小学校 教頭 | 渡部 正俊 |
| 〃 | 福島大学教授 | 小林 清治 | 〃 | 〃 |
| 専門委員 | 元東北学院大学教授 | ○岩崎 敏夫 | 福島主県教育庁文化課 専門文化財査 | ○懸田 弘訓 |
| 〃 | 福島県文化財保護審議会委員 | 梅宮 茂 | 田村郡船引町立門沢小学校校長 | 須賀 紀一 |
| 〃 | 二本松市文化財保護審議会委員 | 紺野 庫治 | 福島県立小高工業高等学校教諭 | ○相馬 胤道 |
| 〃 | 福島県史学会会長 | 田中 正能 | 学校法人桜の聖母学院高等学校 教諭 | 佐藤 公彦 |
| 〃 | 福島県立福島農蚕高等学校教諭 | 佐藤 友治 | 福島県立安達高等学校教諭 | 安藤 公男 |
| 〃 | 財団法人福島県文化センター 遺跡調査課長 | 目黒 吉明 | 伊達郡桑折町史編纂室 | 田島 昇 |
| 〃 | 福島県教育庁文化課 文化施設整備室主幹 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 財団法人福島県文化センター 歴史資料課長 | 鈴木 啓 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 福島県立安積女子高等学校教諭 | 菅野 与 | 〃 | 〃 |

（○印は本巻担当委員）

二本松市史民俗編基礎調査員(順不同)

二本松市教育委員会事務局

二本松地区

宇多 敦

杉田地区

岩本 茂

〔二本松市史編纂事務局〕

二本松市教育委員会 教育 長

市川 忠治

塩沢地区

加藤 安次

館野・箕輪地区

国分 逸作

教育次長

国分 道男

高越・成田地区

菅野 嘉一

平石・西荒井地区

渡辺 武久

社会教育課長

三津間定雄

永田地区

根本 清七

鈴石地区

鈴木 仁

社会教育係長

高橋 健二

原瀬地区

大内清四二

大平地区

渡辺 章

主 査

根本 豊徳

主 査

渡辺 博

二本松市史 第8巻 第5回配本

民俗 各論編1

昭和61年3月31日 発行

定価 6,000円

編集・発行 二本松市

印刷 明和印刷株式会社